THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿四年　第八號

第二百四十五號

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

伊藤公爵菊池男爵閣下序

新語學獨案内

僅々四個月に英語の熟達

メール主筆
エフ・ブリンクリー先生新著

本文索引共千四百餘頁
菊判總クロース綴美本

壹萬部限 **特價貳圓八拾錢**

定價金參圓八拾錢
小包料十六錢 清・韓・臺灣・樺太四十錢

章を分つこと百二十、始めて英語に志す諸君は一日一章を修めて能く四個月間に熟達するを得べく●新組織の編纂は教員の爲めに教授上無二の參考書たるべく●英語を活用せんとする諸君の爲めには日常の最良顧問たるべし●何れの點に於てもブリンクリー先生は諸君の爲めに成効の活路を示すもの也

直ちに見本を請求せよ

往復はがきを以て至急御申込まれたし

東京神田 **三省堂書店**

振替貯金口座東京一五九七番
電話本局七二一・七四九・特三三一六

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

反省社編輯

空文年表

菊版約三百頁紙質上等　價金五十錢　郵税八錢

本書は常に世人の必要を感して未た出版せられざりしものなりその世に行はるゝ年表類と異る點は年號紀元等の外には史上の事件を擧る事なく餘白として存したり且前後通して十箇年一頁としたれば充分なる餘白を供し得ると共に參照搜索に便利なり

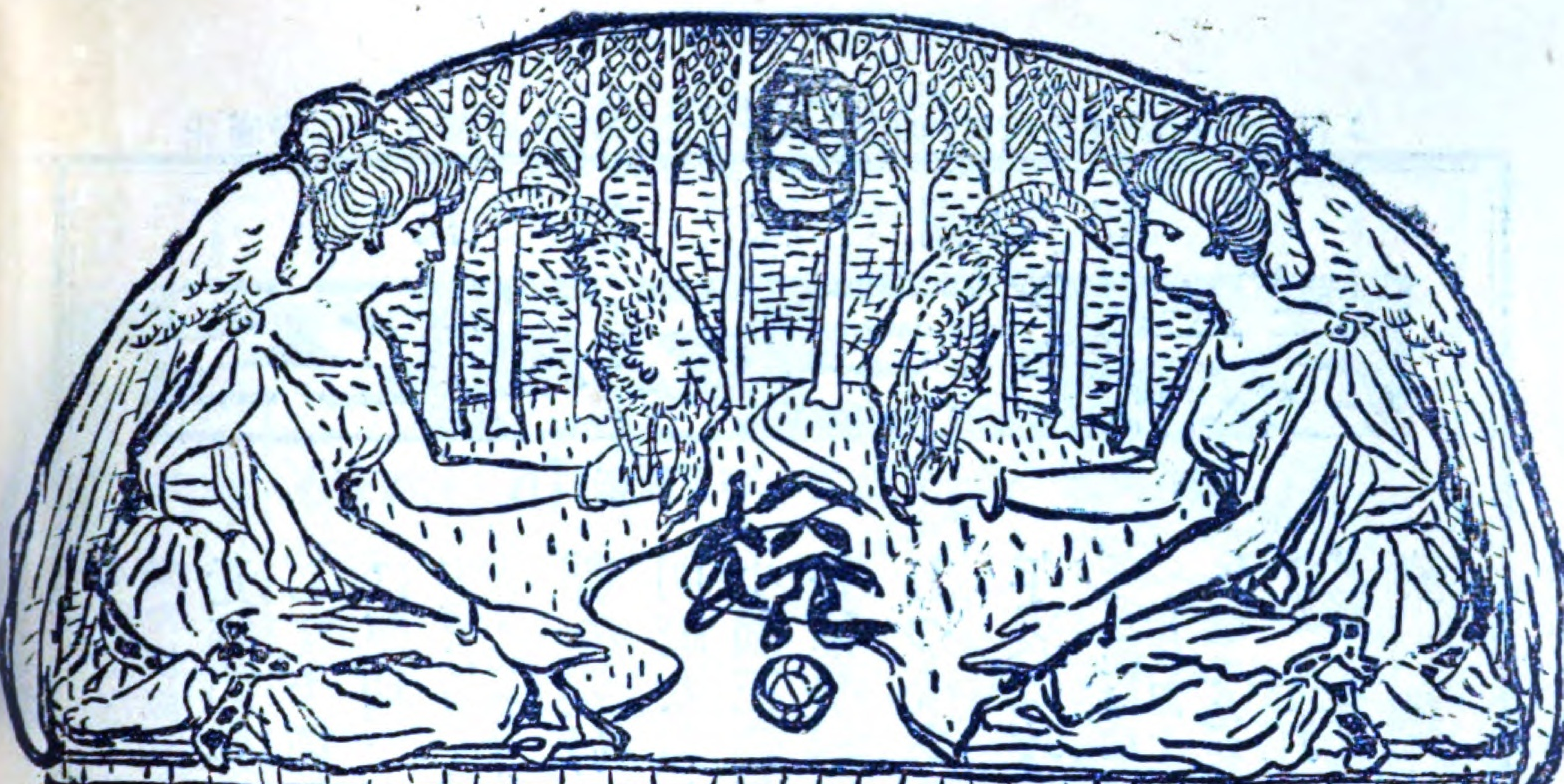
本書は博く世人の需用に應ぜん爲め便利と實用を主眼としなるべく普通年表の陷り易き亂雜の弊を避け其配列に我社は特に意匠を凝し嶄新なる方法を用ゐたれば緊要なる事項はすべて漏さず記入したるに係はらず極めて簡明に且明瞭ならしめたり又各年號に對して索引を設け支那歴代中に於ける小覇王の年號は別表として之を卷末に附したり

各種學校にありて歴史を練習しつゝある人又は專門的に歴史を研究しつゝある人は此書の出版によりて今後各自に年表の原本を作製するの勞を省き得べし歴史的研究の旺盛なる今日學者須らく之を座右に備へらるべし

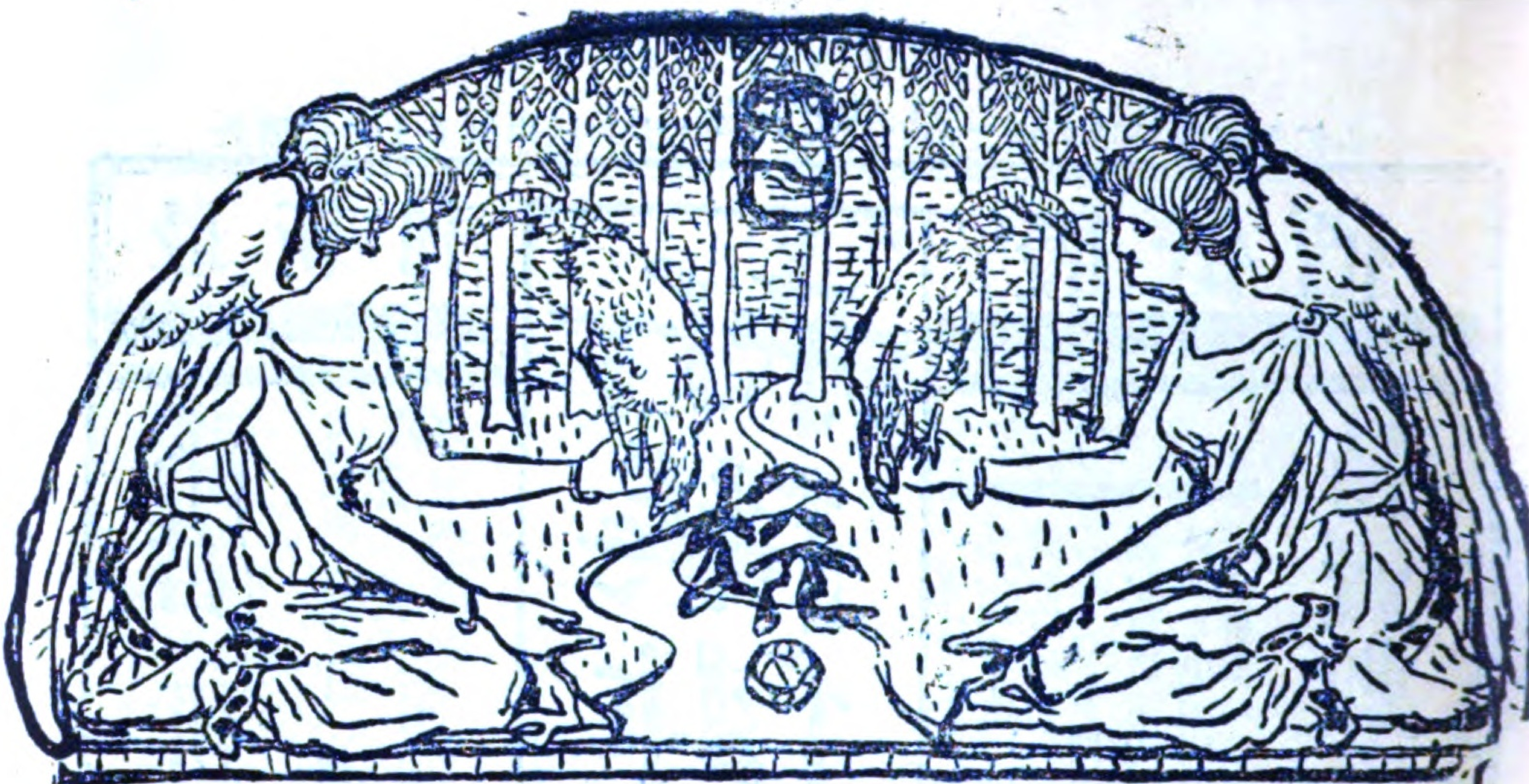
年表は攻學者に限らず世上事務に從事する人にも必要あり我國の舊時に於てすら各家庭には必ず一部の年代記を藏したり本書は我新時代の要求に應すべき文明式の年代記なり敢て之を江湖に薦む

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地（電話下谷九百十九番）　反省社

賣捌所　東京堂　上田屋　文明堂　有明館　盛春堂　岡崎屋



中央公論第二十四年第八號目次



此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

最新刊

諸君は俳壇に一の完全せる辭書なきを遺憾なりとせずや

内藤鳴雪翁題句
高濱虚子
河東碧梧桐 兩先生序
岩本梓石
宮澤朱明 兩先生共編
（紙數九百餘頁 挿畫貳百餘個）

新撰俳諧辭典

警告

最低價

内容見本進呈

書は宗鑑 武ノ創始 代より現今に至る三百有餘年間に行はれし著名の俳書を渉獵して季題壹萬、用語壹萬五千を蒐集し精細適切なる注解を施し尚説明の仕難きものには挿畫を以てし一面古今の俳書を繙くに難解の恨なからしめ一面句案の時に際して取材の淵函たらんことを期す加ふるに精細なる連句作法、季寄、畫引等を以てしたれば其索引至便を極む更に附錄俳諧人名譜に至りては古今の作者を網羅すること二千餘 前人未發の新史料多く史的研究家の好資料たり本書は實に斯道無上の寶典にして一本を座右に供ふる俳士は既に俳諧の堂奥に達したるものといふべし

特賣數僅に三千部即時講求せよ

特價販賣

四六判六號三段詰装禎頗美麗全一冊正價貳圓五拾錢

三千部限り 特價金貳圓

郵税 内地金十二錢 臺清韓各金卅五錢

發行申込所 東京日本橋角 大倉書店 振替貯金二三八番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Landscape with Cattle and Figures.



BY ACLBERT CUYP.



第二十四年
第八號
第二百四十五號

桂黨と西園寺黨の對立

（一）

我が政界の分野は、畢竟桂黨西園寺黨の對抗に由て截然區劃せらる、彼の所謂新政黨の組織を主張するもの丶二大黨成立を以て憲政の進歩に欠く可らずと做すが如きは、一の理窟のみ、然らずんば政界の分野を視るの明無きのみ

桂黨の總理たる桂侯は容易に西園寺黨たる政友會と爭ふの意なく、寧ろ機會を得て政友會に入り、西園寺侯に代らんと欲するの希望なきにしもあらず。而して事實之を利とするも、勢ひは容易に之をして然らしめず、茲に於てか桂黨また對抗の力を張るに懈るとを得ず、勢ひをして益々相抗爭せしめざれば

止まらざらんとす、故に政界の分野は依然として桂黨西園寺黨の對抗に由て截然として區劃せらる

（二）

伊藤公が韓國統監を罷め歸りて、更らに樞密院議長となれるは頗ぶる注目すべき事象とす、或は揣るらく、伊藤公は年々歸朝する毎に必らず統監を辭せんとを諷するを例とす、辭意あるに非ざるも、山縣公桂侯等をして百方留任を懇請せしめて、以て自から高くすると共に公侯等をして其の意に反すると能はざらしめんとするのみ、今年また例に由て辭意を漏らすや、公侯等之を止めず、竟に已むを得ずと稱して伊藤公の辭職に同ず、是れ伊藤公の意表に出てたるものにして、伊藤公自からは以て山縣桂の術中に墜つと稱して、頗ぶる啣む所あり、必らず之に報ひんとす、思ふに政友會を煽して桂内閣に突貫せしむるもの必らず伊藤公なるべしと

果して然らば伊藤公の歸りて樞府に入れるは、是れ虎を家に入らしむる也、桂内閣自から眼上の瘤を作れる也、愚もまた甚だしと謂べし、然れども多智多算を以て許さるゝ桂内閣如何ぞ此の愚を做す可んや、抑も伊藤山縣の二公は外相和して内常に相競ふ、伊藤公は山縣公を以て一介の武辨に過ぎず、憲政の機法には寸毫も通ぜずと輕侮するも、然かも局に立つや必らずしも其の功績伊藤公の下に在らずして政界に於ける勢力却つて動もすれば伊藤公の上に出てんとす、是れ伊藤公の心常に平かならざる處、嫉惡の情時に腦裏を去らざる所以とす、隨つて山縣公の門下生と視らるゝ桂侯の成功は、決して伊藤公の快とする所にあらず、少くも西園寺侯の成功を悅ぶが如き能はざる也、伊藤公素より元勳を以て、口に

桂侯の成功を祈るといふも、必らずしも其の本心に非ざるや言を俟たず、故に公が政友會を指嗾して桂內閣に突貫せしむると、必らずしも絕無と謂ふべからず、然れども井上侯あり、侯や桂侯と親戚にして又實に山縣公と友たり、其の親懇の深き素より伊藤公と同日に語る能はざるも、尙ほ同鄉の兩友をして相爭ひ相傷きて其の末路を亂さしむるを欲せず、百方兩者を綏慰して以て和怡ならしめんとす、伊藤公素より情に於て井上侯に叛く能はず、山縣公また井上侯に聽かざるを得ず、而して桂侯に至ては、勉めて伊藤公に師事すると共に、井上侯をし兩老を調和せしめ、延きて自家の安固を保つに努む、蓋し感情に由て相爭ふが如きは、桂侯の最も避けんと欲する所にして、然かも之を怖るゝや或は虎よりも甚だし、是れ桂侯の勉强して伊藤公井上侯に事ゆる所以とす、乃ち井上侯健在なる間は、伊藤公濫りに桂侯を虐するを得ざる也、况んや政友會の幹部には、井上侯に叛くを得ざるもの少からざるをや

(三)

桂侯は圓滿を主義とす、而して其の人物實に調和の特能を有す、能く元老の歡心を結ぶに努め、又政友會と爭はざるが如き、正さに其の特色とす、然れども侯は徒らに圓滿調和を以て能事となすものに非ず、時と場合に由ては、伊藤公の如き元老を敵に廻すも避けざる氣魄を有す、而して又其の備を懈るとなし、蓋し侯は敵の來らざるを恃むものに非ず、自から俟つて備あるもの也、其の貴族院に勢力を植えて、牢として拔く能はざらしめんとするは乃ち其の一證也

改進黨は理辨に長じて多智を誇りとし、自由黨は卒直剛毅を其の本色としたりき、我が日本の歷史を

視るに理辨多智を愛せずして卒直剛毅を好むと幾んぞ我が國民性なるが如し、藤原氏平家の不人望にして源氏の民心を得たりしは其の證也、典章燦然たりし王朝政治の歡ばれずして、簡樸單純なりし武家政治の人望ありしは其の證也、隨つて進歩黨の地盤よりも、政友會の地盤の大なるも其の一證ならずんばあらず、近時代議士の政友會に入るもの多きは、大抵撰擧區の關係然るのみ、若し奇策を以て強き壓力を加へざる以上、政友會は必らず常に大多數を占むべし、且つ政黨は猶ほ雪達磨の如し、其の大なるに隨つて自然に大を加ふ

故に衆議院が政友會に左右せられて、西園寺黨のものたるや明か也、假令奇策を以て強き壓力を加ふるも、政友會の一角を突崩すに足るのみ、一時多數黨たる實を失はしめ得るも、また久しからずして漸くに其の大を成すに至るべし、民間に何等の地盤を有せざる桂黨が之と拮抗するが如き、假令權變を以て一時の勝を制すとも、到底永久の勝者たるに足らざるや明らけし、故に桂侯のために圖るに、身を以て政友會に投ずるか、然らずんば別途に出てゝ之と對抗するに如かず

別途に對抗する所以は他なし、貴族院に據つて政友會と相競ふにあり、幸か不幸か、我が貴族院は憲法上衆議院と同權利を有して何等の軒輊あるとなし、強ひて其の差を求むれば僅かに豫算議權の先後あるのみ、然かも其の權利の質と量とには寸分だも高下大小あるとなし、故に政友會が衆議院に據つて之を左右する以上、桂黨は貴族院に據りて之と對抗するの外あらず、幸にして(桂黨のためには)貴族院には所謂山縣系と稱せられて桂黨に味方するもの少からず、現に研究會と幸倶樂部のみを中堅とするも、

裕に之を左右する力あり、少くも西園寺黨が衆議院の死命を制するが如く、桂黨も能く貴族院を自由にする勢力あり、之に由て西園寺黨と對抗せば兩々容易に相下らざるに足る、敵の來らざるを恃まざる桂侯如何ぞ玆に手を下さゞるの理あらんや

（四）

西園寺黨中に於て最も智慮ある、最も辣腕ある原敬氏は、桂黨を敗る所以の途唯だ貴族院に於ける彼れの勢力を奪ふにあるを看破し、其の内務大臣たりし時先づ郡制廢止案を提げて桂黨に挑戰し、貴族院の形勢をトせんと試みたりき、蓋し貴族院に於ける桂黨の勢力は動もすれば不分明なりき、現に最も訓練あり最も節度ありと稱せられて、曾ては伊藤公をして七重の膝を八重に折つて嘆願すとまで哀請せしめながら、頑强に之を聽かざりし研究會も、山縣内閣の宗教法案に反對して、極力之を否決したりしのみならず、其の有力者たる堀田子の如き寧ろ政友會に欵を通ずるものあり、幸倶樂部員中には、又公然籍を政友會に置くもの一二に止まらざれば也、故に原氏は郡制案を提げて桂黨に臨むと共に、極力研究會幸倶樂部の攪亂に努めたりしも、桂黨能く奮戰して竟に郡制廢止案を粉碎し、同時に貴族院の形勢頗ぶる分明となり、桂黨の勢力範圍十分に看取せらるゝに至りしが、原氏は此の一敗に屈せず、先づ研究會を突崩して以て桂黨を攪亂せしめんと欲し、鋭意畫策する所ありたりき、大木伯を起たしめて伯爵同志會の組織を看るに至らしめたるも其の一也、秋元興朝子をして談話會を組織せしめ、子爵議員間の勢力を割かんとしたるも其の一也、而して西園寺侯が堀田子を拔て遞信大臣たらしめたるも實に其の一た

らずんばあらず、近時子爵議員の補缺選擧に於て、談話會をして極力研究會中の尙友會に反抗せしめたる、亦此の一に外ならずとす

然れども研究會の應戰また見るべきものあり、殊に桂黨の聲援最も努め、每時西園寺黨の計畫を打破して、益々其の勢力を固むるを視るに、其の志蓋し貴族院に據りて以て衆議院を提ぐる西園寺黨と對抗するに在るや爭ふ可らず

西園寺黨が貴族院に多數を制せんとは、桂黨が衆議院の多數を制せんと欲するよりも難し、桂黨にして若し進步、大同、戊申等の各黨派及び又新會の一派を糾合し、更らに辛辣なる壓迫を加へて政友會の一角を突崩さば假令一時に過ぎずと雖も、尙ほ西園寺黨と拮抗し得られざるに限らず、然るに西園寺黨の貴族院に於ける、万々一幸ひにして研究會を粉碎し得るとありとも、非桂黨たる谷、曾我、二條、德川、藤田、鎌田の諸卿氏をして自黨たらしむる能はざるや明白にして、到底多數を占むる能はず、何ぞ況んや貴族院と衆議院とを縱斷するは、兩院設置の根本義に反すといふの說多くして、貴族院に政友會の勢力を容るゝを欲せざるもの少からざるをや、貴族院は少くとも當分の間、衆議院が西園寺黨のものたると同じく全く桂黨のものたるべし、桂侯は斯くして政界の分野を兩分して其の一を保ちつゝ、表面には圓滿調和を主として各元老の歡心を失はず、又西園寺侯及び其の一派と爭はず、平和の間に其の政治主義の遂行に力むべき也、是れ頗ぶる有智の擧也、時と場合とに由ては敢然彼等と抗爭し、一步も引かざる準備を有して、而して和協調節す、智と謂はざる可らざる也

桂黨貴族院に據り、西園寺黨衆議院を提ぐ、西園寺黨の勢力地盤は全國に渉りて深く且つ大なりと雖も、其の勢力の實質に至ては、竟に桂黨と軒輊すると能はざる也、少くも五分〳〵と視ざる可らざる也、何となれば貴族院と衆議院とは、其の權利に於て寸毫の逕庭あらざれば也

故に向後兩黨の爭ふ所ば明白也、西園寺黨は衆議院に於ける勢力を張ると共に勢ひに乘じて貴族院を動かさんと欲し、極力桂黨の中堅を崩すに鋭意すべく、而して桂黨も亦貴族院を堅めて其の本壘を高くすると共に、衆議院に於ても政友會と對抗ずる機會を覗ふなるべし、其の攻守の巧拙、勝敗の決定は、政界觀測者の頗ぶる興味を以て迎ふる所なるべし

英人は憲政の妙旨妥協（コンプロマイズ）に在りと信じ、常に相爭ふも然かも極度まで爭はず、互讓妥協するを以て智なりとす、而して英國の堅實なる、又實に玆に因すと做す

我が桂侯は、貴族院に據つて西園寺黨と對抗し、伊藤公に對しても、西園寺侯に對しても萬一の場合一歩も下らざる準備を有し、一寸も引かざる實力を蓄ふるも、然かも之を恃みて爭はず、爭ふも結局互讓妥協の外なきを信ずるが如し、爭ふも妥協、爭はざるも妥協すとせば、竟に爭はざるの賢なるに如かざらん、然りと雖も對手と對抗して五分〳〵の力を備ふるにあらざれば、妥協は得て望むべからず、力足らざれば敵に敗らるゝの外なく、屈伏の他に執るべきものなければ也、玆に於てか漸かに政界の分野を兩分して其の一を保有し、以て對手と圓滿の間に妥協し調和す、桂侯の智なる所以にして、而して憲

政の妙味も亦寧ろ玆に存ぜずや、思ふに西園寺侯の心を降して和怡の態を爲すも、全く玆に悟るあるが爲め乎、然らば則ち此の兩侯は、能く憲政の奧義に通ずるもの也、彼の口に英國憲政を學ぶと稱して未だ其の堂に入ると能はざる瞶々者流は、宜しく二侯に學ぶべし、少くも現下の形勢を看取して其の理勢を悟るべし

日韓覺書の骨子

伊藤公は韓國統監を罷めて樞密院議長に任ぜらるゝや、更らに韓王へ告別のためと號して、七月上旬京城に入り、其の君臣と宴樂悠遊する間、密かに閣臣の主なるものを招きて新規約を締結せんとを促したりしに、彼等頗ぶる難色ありしも、公は彼の内閣を更迭するも必らず之を成立せしむべき決心を示せしかば、彼等も竟に閣議を決して之に應ずるとなれり、公が豫め我が桂首相等と協議を重ね、彼の國の閣臣に促すにも、極めて咄嗟の間に於てしたりしを以て、事の外間に漏れて無用の物議を生ずるとなく、僅かに京城の內外に內閣更迭の風說の流布されしに過ぎざりしは、措置の老巧なるものとして、何人も之を稱せざるは莫かるべし

覺書の要點は、韓國の裁判及び監獄を擧げて我が日本に委任するにあり、而して軍部の廢止も亦た口約せられたり、韓國の國防は海陸共に我が任にして、彼れの有する軍隊は唯だ一の禁衛隊あるのみ、其

の員數、また三千に滿たず、僅かに之あるがために堂々たる軍部を置くは、猶ほ一個旅團あるに過ぎざるに陸軍省を設くるが如し、其の廢止の當然なる別に言說を要せじ

從來韓國の裁判は三樣に分たれたりき、即ち韓國人の裁判は韓國裁判所に於てし、居留日本人の裁判は統監府の法務院理事廳に於てし、居留外國人の裁判は其の領事廳に於てしたりき、然かも韓國裁判所の法官といふも大抵我が國法官を雇聘したるものにして、我が政府が韓國司法費として立替たりしもの亦少からざりき、斯く混雜せる司法制度にては、多くの不便不利あり、差當り其の著るしきは、日韓合同の事業の如き、例せば東洋拓殖會社の如き、日韓孰れの裁判管轄に屬すべきや未だ分明せざるの不都合あり、且つ韓國人をして裁判官として法律思想を十分に具へしめ、剛直公平廉潔の資格を有せしむるとは甚だ難し、少くも五十年七十年にして得べからず、凡そ此等の不便を除かんには、全然韓國の司法權を我れに收め、日本の裁判官をして直接に韓國人民をも裁判せしめ、由て以て內外人の裁判を統一するの簡捷にして安全なるに如かず、今回の覺書を交換したる精神乃ち玆に在り

覺書の骨子として、吾人の最も祝するは、韓國民の裁判を日本司法官の手に移したるに在り、韓國民は從來大抵郡守に由て裁判せられたりき、郡守は一の行政官にして、素より法律を知れるものにあらず唯だ賄賂請托に由て恣に人民の生殺與奪を恣にするもの也、故に韓國民の生命財產は何等の保障を有する能はずして、一に郡守の意のまゝなりき、然かも韓國の君主、大官以下郡守の徒、皆民を虐し、誅求收斂を事とし、甚だしきは民を殺して其の財產を沒收したるを以て、民皆貧弱ならざるを得ざりき、韓

國の今日ある主要原因は全く玆にあり、故に韓國民を助けて之を文明の恩澤に浴せしめんとせば第一に法律を定め、此の法律に由り裁判を以てするに非ざれば刑罰を受くるとなしと定め、以て其の生命財産の安固を保證するを第一とす、然かも韓國のために完全なる法律を制し、裁判所構成法を定むるとも、韓國の裁判官は假令法文を學習するも其の心事は依然たる舊郡守のみ、舊大官のみ、沐猴にして冠するもの也、之に裁判せらるゝ韓國民は到底其の生命財産を安んずると能はざるや明らけし、即ち法律及び裁判所構成法の實施と共に、又我が司法官をして之を裁判せしむるの外ある可らず、之にあらざれば、眞に韓國民の生命財産の安固を保障するに十分ならざれば也、幸ひにして覺書は全然韓國の司法權を我に收む、韓國民は之に由て始めて其の生命財産の安固を保障せられ、暴吏惡官の收斂苛虐より免かれて、漸く以て文明の化に躋るを得べきか、是れ吾人の深く祝する所以なりとす

居留日本人を裁判するには、日本法律を以てする亦甚だ差支なかるべし、然れども韓國には其の習慣あり、舊例あり、古俗あり、之を斟酌して以て韓國民を安んずべき法典を要し、此の法典に由て裁判するを要すべし、吾人は我が統監が意を玆に致さんとを求むると同時に、更らに韓國内に行はるゝ治外法權も漸を以て之を撤廢するに至らんとを望む、日本の法律と裁判官とを信頼する列國、亦思ふに之に異議なかるべき也

更らに細事ながら、注意すべきは韓國民を裁判するに、通譯を要するの煩細なると也、吾人の聽く所によれば、東京人にして仙臺に裁判官となれるもの其の方言に通ぜす、百方被告人を審査糺治して、將

さに判決文を草するに方り、方言に通じたる書記の忠告によりて更らに審査を新たにし、始めて至當の裁判を下し得たりしといへり、韓國民を裁判するに當り、我が司法官の第一に困難するは此の通譯に由て審問糺治するとなるべし、何となれば通譯にして被告のため故意に其の陳述を枉ぐるとあらば、毫厘の差異に千里の異を致すなきを保せざれば也、玆に於てか吾人は最も公平廉直なる我が邦人を通譯たらしめんとを望まざるを得ざる也

司法權を收むると共に、警察權をも全然我れに收めざりしは聊か遺憾ならざるに非ず、司法官をして眞に其の目的を達せしめんとせば、其の手足たる警察官を自由に使用するに非ざれば、十分に犯罪を檢擧すると能はざれば也、韓國民が犯罪被告人たる場合には、多く警察の手を要せずと雖も、然かも韓國官吏のため或は羅致し構陷さるゝ虞なしとも限らず、斯る場合には必らず剛直清廉にして又敏捷なる警察を要す、故に吾人は漸を以て其の警察權をも我れに收めんとを統監に希望し置かんと欲す

且つ既に軍部を廢する以上、法部も亦之を廢止すべし、司法權旣に我が手に移れる以上、韓國何ぞ法部を要せんや、事務なきに省を設け官吏を置て徒らに國庫の財用を糜するは寧ろ曲事たり然れども韓國の事總て一概に律す可らず、緩急時に宜しきを測らざるを得ざる事情あるを以て、吾人は一概に之を難せず、但だ司法權を我れに收めたる骨子の、韓國民を救濟し、韓國の進歩を致す所以なるに於て、深く之を歡迎せざるを得ざるのみ



人間を描かざる小説

松井柏軒

近時行政官に由て小説の罪せらるゝもの頻々として相續ぎ、之を掲載したる新聞紙、雜誌、書籍の發賣を禁止せらるゝもの甚だ多し、玆に於てか平生小説を閑文字視する政事家と雖も、稍々其の實質如何と注目する傾向を生ずるに至れり、況んや之を一片の閑文字視せざる經世家をや

吾人は小説を罪する行政官の措置の當否と寛嚴とを論ずるものに非ず、但だ今の小説家が不具の人間のみを描き、且つ人生無要の局處のみを描すに偏するを視て、坐ろに嘆惜を禁ずる能はず

「ノートルダム、ド、パリ」『ミゼラブル』『モントクリスト』を讀むものは、廢人、少女、高僧、快雄、政事家、富人等の熱烈、崇高、仁愛、姦曲、冷酷等の深く且つ大なるを感じて、幾んど人生を超越する思あるべし、著者の之を描く正に天來の靈筆あるに似たり、シエキスピアの諸作を讀むもの亦人生因果の理法を識るに於て、無限の感興を湧起せざるを得じ、然かも其の打開し來る局面、捻出し來る人物、總て自然にしてす分だも異常なる所あらず

水滸傳、金瓶梅、三國志また勇者、梟傑、淫婦、姦人を描し、其の人物をして紙上に活躍せしめ、生々たる面目、讀むものをして之に應接するに遑あらざるを感ぜしむ

我が馬琴の作物中には、往々偏固に過ぐる人物なきにあらず、然かも理想的武人として理義を守るに堅實なる實に偏固に類するに至るのみ、而して毫も不自然の感想を起さしめず、他の男女老若の面目に至ては、却つて個々に生動して個々の色采を帶ぶ、京傳三馬等に至ては描寫に最も妙を得たるもの、其の筆の輕くし

て而して巧みなる、殆んど天性に出づ、彼の春水に至ては冶郎娼婦の言語姿態を描すに巧みに、而して情緒の纏綿を寫して其の神を得るの妙往々にして讀むものを魅するが如きも、倘ほ其の人物の往々にして常識を失するを免れず、士君子の之を唾棄する、必らずしも其の主として淫靡に流るを卑むのみにあらず、實に人物の非常識なるが故也

小說は人間を描くもの也、人生を寫すもの也、故に若し其の描く所にして人間らしからず、又人生に有り得べからざるものならしめば、其の小說や小說にあらず、小說としては全く價値あるとなし、吾人の見によれば、紅葉露伴の二家は、其の質よりも寧ろ文に重きを措くの傾向ありしも、然かも其の捉ふる人物皆非人間的ならず、個人の個性を寫すに於ても多くの用意を重ねしに似たり、此の二家が早くより名聲を馳せたるの偶然ならざる所以とす、然るに今の小說家の描す所は若き男女の情事のみ、其の趣向着筆も畢竟千篇一律のみ、殊に其の描く所の人物の常識なきと驚ろくに足るものあり、其の人物の思慮なきと意氣地なきと、到底實際にあり得べからざるを多しとす、彼の歌人詩客か日夕咏吟苦作するに拘らず、眼前の風物のみに拘泥して其の作陳々腐々、徒らに故人を踏襲するに過ぎざるに方つて、頼山陽が歷史に着眼し、史實と人物とを咏唱して一代に盛名を恣にしたるが如く、我が小說家中には、若き男女の戀愛以外に出てゝ、歷史上の一部分を捉へ來つて一種の觀察を下し、茲に筆路を拓くもの、僅かに漣柿園と美妙の二家あるに過ぎず、然かも此の二家が當世式戀愛を描かざる、寧ろ描すに長ぜざるも、能く名を成す所以は他なし、世間既に戀愛小說の千篇一律なるに飽たればならん、多くの小說家之を察せず、單に戀愛小說のみに腦漿を絞る、其の作の陳腐にして而して相共に大家たるを得ざる、必らずしも怪むに足らざるのみ

且つ其の戀愛の若き男女間のみに止まるは卑むべし戀愛は神聖なりと稱するも、若き男女の戀愛は畢竟肉慾に止まる、寧ろ卑むべき獸性に過ぎず、且つ若きも

のは識力淺く、經驗足らず、村閭の間に出入し、學校に往返するのみ、其の境遇の單純なる、また多くの變化を求む可らず、如何に心理的に觀測するも、其の淺くして卑しきは論なし、之を描す如何に巧みなるも、抑も何の感興をか惹かん、將た何のレスソンをか與へん、實に無用有害也

英國の學德を兼備せる淑女、一蕩夫に嫁して其の肉慾に耽り、蕩夫の蕩術に溺れて漸く墮落し行くを寫せる小說あり、筆路の巧妙なる頗ぶる人を魅するも、英國人の多數は却つて嚴に之を非難したりき、其の描す所の局處其の宜しきを得ずとてなり、人生の事悉く公けにす可らざるものあり、殘忍、冷酷、放縱の如き人生の暗處なるも、之を描して戒め救ふ所以を示す必らずしも無用なりとす可らず、然かも之を描すや深酷ならず、描すも以て戒めむる所以を感ぜしめず、徒らに暗處を公けにするに止まらば、是れ無用のもの也、殊に之を描すがため徒らに卑むべき慾情を衝動するに止まらば、更らに有害無益也、彼の春畫の僅かに露骨ならざるもの丶如きは、最も卑みて唾棄せざる可らず

小說の描す所にして、單に人生の暗所を公けにするに止まらば、而して戒め救ふ所以に資する所なくんば經世家は寧ろ之を禁絕するを可とすべし、況んや年若き男女の卑情を挑發するに止まるものをや、行政官が之を罪する、其の志風敎の維持にありとせば、識者は之を是認せざる能はず、徒らに藝術の神聖を論じて、行政官の僭越を咎むるも、人間を描かず、人生無要の局處のみを描くが如き小說家は、自から却つて藝術を辱かしむるもの也、藝術に神あらば、行政官を待たずして之を禁絕すべきのみ

吾人は今の多數の小說家が英雄高僧等の崇高雄大なる個性を描し出さゞるに不平を抱くもの也、惡人を描きて深酷ならず、心理の變化を描して復雜ならず、精密ならざるを遺憾とするもの也、而して其の描く所の千篇一律なるに拘らず、其の男女の多く常識なく、到底世間に存在せざる不具的人物なるを視て、殊に慷慨せざるを得ざる也、自から藝術家を以て標置するもの、

其の眼孔豆の如く小に、僅かにヒポコンデリーの痴漢、ヒステリーの痴婦を視るに過ぎず、營養不良にして意思の貧薄なる少男少女の外は曾て接したるとあらざるが爲め乎、其の識力の低きは論莫し、手も亦甚だ低き乎、吾人は切に彼等の自重して苦心修養を積まんとを望まざる能はざる也、吾人は彼等が兎にも角にも藝術の士なりと稱するに對して、今は具體的に其の作物を擧げて一々例證を示さざるも、識者は必らず吾人と同感なるべし

唯物史觀

（總結）

藤井健治郎

一

歷史哲學の問題は獨逸、及び獨逸語を話す澳太利並に瑞西の一部分の哲學界を賑はし居る生ける問題の一つてある。從つて此問題に關する新著が非常な勢で日に月に刊行出版せられつゝある有樣である。歷史哲學の問題とは如何なるものぞといふに、人間の歷史は之を或る一個の最高史上の法則に還元し得るものなりや否や、若し斯ゝる法則有りとせばそは果して如何なるものなりや、又その法則は果して認識論上確實に認識し得るものなりや否や、尙ほ進んで、凡そ歷史とは何ぞやといふ如き諸問題を包含し居るものである。此等の諸問題に關して現代の獨逸哲學界は盛に闘論を試み居るものであるが、その大體の傾向を言ふと、人間の歷史は全然無秩序無規律の者で、其處に何等一定の法則等を見出すことは出來ぬ、人間の歷史は丁度百色眼鏡の如きもので、その時代々々のチャンスにより變化し經過し行くものだといふ樣な、此樣な考も少しは見えぬて無いけれども、併し左る考を抱き居る學者は、少くも數の上では極めて少許に屬するものである。多數の學者に在つては兎に角其處に、人間の歷史中には一點右樣の法則を發見し得るものとの考を抱くが如くに見ゆる。とはいへその法則は果して如何なるものか

との問題に關しては、學者の意見は區々で一定しては居らぬ、ヘーゲル思想の正統(オルソドックス)を承け繼ぎ居る學者は專らその法則を精神的のものと認め、マルクスの系統に屬し居る學者は多く物質的の者と論じ、又爾餘幾多の學者はその衷を折して兩者を統一せんと試み居る樣である。バルトの如きはその第一派に屬するもの、獨逸のカウツキー、ホリッチャー、伊太利のロリア、澳太利のベンチアス等はその第二派に屬するもの、而して獨逸のスタムラー等はその第三派に屬する中の尤なるもので、亞米利加のセリグマンの如きも亦大體スタムラーに近い考を有するものとして宜い樣だ。併し玆に斷つて置くが、セリグマンの思想はその衷を折するものとはいへ、マルクスの思想により多くの趣旨を認むるものであるに反し、スタムラーの思想は寧ろカントの思想で調和しやうと試むるものだから、兩氏の意見には互に相出入齟齬する所がある。此の如く歷史哲學の問題が、獨逸哲學界に於て今尙ほ持て囃されて居る所以のものは、遠く源に溯れは際限なき事ながら、先づ近くはヘーゲルの歷史哲學及びその門より出たマルクスの唯物史觀等に源を發し居るものである。ヘーゲルの歷史哲學は論題外故暫く之を省くとして、マルクスの唯物史觀だけは色々の理由で必ず之を研究せざるを得ぬ有樣に立至つて居る。第一には政治上の必要である、夫の所謂社會民主黨なる政治上の一派は最近の總選擧に於て多少の椅子を帝國議會に失つたとはいへ、約十九世紀の六十年代頃から基礎を固め、着々政治上の地盤を獲取して遂に帝國議會にその代表者を送り、少くとも彼等の政見をその議題としたり、或はその政見を實行せしむる迄にも立至つたのである、人も知る如くベーベルや、ベルンスタインや、カウツキーやの如きは、常に有力なるビユーロー內閣の政策の批評家として彼等の爲に憚られ居るのである。此社會民主黨の主義政見は果して何處に基き居るかと云へば、言ふ迄もなくその建設者たるマルクスの經濟意見にあること明瞭であるが、そのマルクスの經濟意見なるものはエンゲルスの言ふた如く、夫の剩餘價値及び唯物

史觀の二大根本思想の上に基礎を置く者であるから、政治上に於て社會民主黨の主義政見を批評するにも、又賛成するにも、その根本に迄溯らずば確乎たる意見を形くることは出來ぬのである。その必要として唯物史觀なるものを研究せざるべからざる狀態になつて居る。又之を學術の方面から見るに、所謂產業時代若くは資本本位時代に於て、所謂社會問題なるものが或は古代或は中世等に起れる問題とは稍々性質を異にし、啻に性質を異にし居るのみならず、更に極めて嚴肅なる問題として、生か死かといふが如き問題として、提出されて居るのである。それ故苟くも實地經世濟民の事に携はる政治家は言ふに及はず、その經世濟民の事を研究する學者に於ても、左る生か死かといふ程の嚴肅なる問題を等閑に附し去る事は出來ず、是非とも何等かの根本的解決を與へねばならぬと焦心苦慮し居る次第である、然らばその所謂經世濟民の理論を研究し居る學者とは如何樣な方面のものかといふに、その直接には經濟學者、法律學者、倫理學者、社會學者等を指すものである、此に於て獨逸に於ける右の方面の諸學者は、何とか解決の方案を發見したきものとその方面の研究に從事し居るので、彼のマルクスの所謂科學的社會主義なるものも亦左る嚴肅なる問題の解決の一方案として生れ出でたるものである。否啻に一つの方案たるのみてはない、十九世紀の後半に於て現れた唯一の解決方案はいふも可なるもので、その他には何等の具體的方案も生れずに居る。それ故に經濟學、法律學、倫理學、社會學等は、學問の性質として如何にしても古を温ね新を知らねばならぬものであるから、此等の嚴肅なる問題を解決しやうと思へば勢ひ是非共マルクスの科學的社會主義の研究に指を染めざるを得ぬ譯となる、然るに前述の如く、マルクスの思想は剩餘價値及び唯物史觀の二大根本思想の上に立脚し居るものだから、マルクス思想の研究といへば必ず先つ研鑽の鑿をその根本に迄加へて、それを削りそれを解くの學に出ねばならぬのである、是れ學術方面に於て歷史哲學の問題を研究する所以

である。

二

予は嘗て故パウルゼン教授に逢ひ、談偶ま歴史哲學の問題に觸れ、マルクスの唯物史觀の是非の論に入つたことがある。その時教授は次の一言で予の凡ての議論に對して答を與へられた。その言に曰ふ「マルクスの唯物史觀も左る事だが、足下は足下の母國の歴史を果して只經濟上から遺憾なく說明し得るか如何か、それを考へて見るならば唯物史觀に對する正しき見解は立地に決定し得やう」と、その意味は別に解する必要は無いが、パウルゼン教授の考では、唯物史觀は決して歴史上の眞理で無い。恐らく日本國の歴史も決して經濟事情一邊では解釋し得まい、解釋し得ぬ事が軈て唯物史觀の眞理ならぬ證據だとの意見であるとはその時に予の了解した所である、教授の元來の世界觀は、その哲學概論や倫理學に見えた所で推定するに、畢竟主義論である事疑ない、とはいへ彼の著述の至る處に、又彼の講義の至る處に、將た又彼の論說及び論文の至る處に折衷的匂ひのせぬ所は無い、從つてその態度からして唯物史觀などいふものを一種の僻見と見るのは、教授の思想の統一上當然の事で、前に述べし如き唯物史觀に對する答は極めて要領を得たものである。けれども凡そ哲學上の見解なるものは自然科學のそれ等とは稍々趣を異にし、學者その人の性格によつて影響せらること頗る多大なるものである、若し「文章のスタイルが彼の人格(パーソナリティ)なり」と言ひ得べくは、それ以上の更に深刻なる意味を以て、哲學はその哲學を打建てし學者の人格なりと言ひ得やう、又スピノーザの哲學はスピノーザの人格があつて始めて可能であり、カントの哲學はカントの人格を待て後にあり、アペナーリウスの哲學はアペナーリウスの人格で、ニーチエの哲學はニーチエの人格の反映である。それ故人格の異なるに從つてその世界觀人生觀は、自らその脚色を異にしその趣味を異にするに至ること、自然科學よりも深き意味に於て免れぬことである。從つて個人々々の世界觀人生觀なるものは、之を第三者から見ると何處かに

その欠陥その矛盾を見出さぬことは無い、謂はゞあ特定の一人の哲學者の世界觀、人生觀なるものは、凡そ人類が有し得る全思想の斷片で、決してその全體では無いのである。それ故或る哲學者の世界觀、人生觀の批評をするに當り、此考は斯樣なる大事實に矛盾する、此考は或る論理上の錯誤がある、此考は自分の信ずる能はざる所である、なぞいふ理由の下に凡て一擧に之を唾棄し去らうとせば、如何なる哲學と雖も唾棄し去られないことはないと同時に、唾棄し去られるやうな哲學ゆゑに三文の價値も無い哲學であるとすれば、是れ亦如何なる哲學でも然らずといふとはない。若し左る見地より見るならば他人の打建てた世界觀、人世觀を研究したり批評したりするといふ事は、極めて無益な愚なる所行てあつて、何にもあれそれ等他人の見解等とは全然沒交渉に自分の考を引出すことが正當な譯てある。けれども此の如くならは、ベーコンの謂ひし如く人は皆各々自己の洞穴の偶像に立籠つて、何時になつても中正の見に近く機會を失ふに至るものである、されば他人の世界觀、人生觀を批判するに、只それは斯ゝる事實に背き居るなどいふ事の爲に、一概に唾棄し去るを止め、寧ろ仔細にその思想の出つて來る所以、その思想の事實上の根據、その思想の社會應用上に於ける結果等を考察することが必要である。唯物史觀の如きも、予は未だ十分之を試むるの機會を有せぬけれど、之のみて我日本の歷史を解釋しやうとするなら、或は幾多の困難の點に遭遇しやうと想像される、けれども只此爲の故にのみ、此思想は學者の顧る可き價値なきものとし、唾棄し去るが如き予の與せぬ所である。

三

予はマルクスの唯物史觀が幾多の缺點を有するとも知つて居る、又幾多の批評が各方面の學者から加へられた事をも知つて居る、或はマルクスの唯物史觀は人間の歷史の過程を全く因果の理法で解釋しやうとするものだから、彼は人間の自由なるものを拒斥し居るものである、然るに人間に自由の有る事は事實であるか

ら、マルクスの思想は取るに足らぬ說であるといふが如き批判のあることも知つて居る、或はマルクスの論は畢竟形而上學上の唯物論に根據して居るものだから、此世界及び人生に於ける精神的原理を否定する考である、然るに此世界及び人生は、精神的原理を容れずしては解釋し得るもので無いから、此點に於てマルクスの考は間違ひ居るものだと言ふものの有るのも知つて居る。又マルクスの論は畢竟唯物論に立ち居るから道德の基礎を危くするものである、唯物論の根據に立つ論理說は必ず快樂論に終らざるを得ぬ、然るに此快樂論は此人生の道德的觀念を破壞し、惑亂するものであるから、此點に於ても亦マルクスの考は取るに足らぬと批難し居るものあるをも知つて居る。又唯物論の立脚地に立つ時には、我々は認識論上世界及び人生を統一的に見ることが出來ぬ、認識論上から見れば世界及び人生を統一的に見るに當つて必ず其處に或る精神原理を認めざる可からざるものだといふ、斯かる認識上よりの非難ある事をも知つて居る、又最後に幾多の歷史上の具體的事象が、マルクスの見解によるのみで說明し得ぬから、マルクスの論は誤つて居るといふ風の議論を爲したる人あるとも知つて居る、それ故一方からして見れば、マルクスの唯物史觀は四方八面に敵を受けて攻め立てられ、殆んど完膚なく、それ自身當さに寂滅すべき運命を有し居る如くにも見ゆるのである。けれどもマルクスの側から言へば、それ等諸多の非難によつて一も二もなく斃れてしまうやうなものでもない、是等の非難に對しても一定の辯解はあるのである、例へば自由意思及び精神原理の如き非難に對しては、セリグマンが明かに之を辯解して居るし、又パルトの認識論上の非難に對しては、ホリッチャーや、アイスラー等が之を辯解して居るし、道德の基礎を危くするといふ非難に對しては、セリグマン、カウツキー、スタムラー、スタウンディンガー等の學者が之を辯護して居る。今他の點は暫く省き、獨り道德の點に就いての言ふならば、セリグマンはその著「歷史の經濟的解釋」といふ書に於て、道德の根底は社會にある、

道德そのものが社會的のものである事を反覆論述して、道德の根底は個々人の良心にある、事の是非曲直は只直覺によつてのみ斷判し得るといふ直覺說をば打破つて居る。カウツキーは「論理と唯物史觀」といふ書に於て、先づカントの直覺說を破り、次にスペンサーの進化論的功利主義に說き及びて、その似而非目的論的倫理學なるを笑ひ、最後にマルクスの唯物史觀的倫理にして、初めて確實なる目的論的倫理學と見るを得と言つて居る。又スタウンデインガーは、その著「道德の經濟的基礎」といふ書に於て、人間の行動の唯一の淵源は自己保存及び種の保存に有ると立てゝそれから複雜なる倫理思想及び倫理關係の發展し來る過程を說き、其處に道德の經濟的基礎あることを明にした。スタムラーは前に述べた如くカント說に立脚して、唯物論的社會說と觀念論的社會說とを統一しやうとした學者だから、マルクスの唯物史觀の道德に向つて全然圍扇を揚げ居るものではないけれど、マルクスの唯物史觀を云々に解釋せば、そは道德及び法律の根據を說明せし正しき論たり得ると言つて居る。けれどもスタムラーが云々に唯物史觀を解釋したらばといふその云々なる仕方の如何なるものか、そは今少しく後に述べやう。

四

前に述べた如く、マルクスの唯物史觀は幾多の非難に對して幾多の辯護あるにも拘らず、人間歷史の解釋として唯一の者だとは許されぬのであるが、去ればとて又全然間違ひ居れりとも言へぬのである、すれば問題は、その唯物史觀を如何樣に解釋して如何樣に活かし行くかであるが、それに對して予の現在抱き居る考は、矢張りスタムラーのそれの如きものである、然らばスタムラーは如何樣に見居るかといふに、彼はその近代の名著なる「經濟と法律」といふ浩瀚なる書物に於て、人間の社會生活（スタムラーは社會なる文字を用ひず常に社會生活即ちゾチアールレーベン若くはゾチアーレス・レーベンと言ひ、そは外面的に統御せられたる人間の共同生存を指す者と稱せり。）を實質と形式とに分ち、而して實質と形式とは無始以來盡未來

際迄不可分離に相抱合し居るものである、人間の歷史が始まると同時に此二つの要素(エレメント)が有つたのである、然らばその實質とは何ぞといふに、それは人間の經濟生活である、形式は何ぞといふに法律と道德とである、スタムラーは之を支配原理と被支配原理といふ名目でも呼んで居る、即ち法律及び道德は支配原理で、經濟は被支配原理である。而して此形式と實質若くは支配原理と被支配原理なるものは、兩々相引き離して在存し居るものでは無いと共に、又之を引き離して認識論上認識し得ざるものである。只抽象したる上で我々は形式若しくは支配原理並に實質若しくは被支配原理を區別し得るものだけれども、それは只抽象の上のみで實際には相離れ得ざるものである、從つて一は他を產み他は一より派生せられたるものなりしといふが如きことは言ひ得ぬ、換言すれば內容は形式を產み、形式は內容を生ずるなどいふことは出來ぬものである、概念としては全然異なれる二つのものである。此に於てマルクスが道德宗敎法律といふが如きを、凡て經濟關係から派生したと爲し來つたのは、蓋しマルクスの僻見であつて、吾人が如何に簡單なる經濟生活を爲す場合にも其處に何等かの形式なき事は無い、例へば原始民族が只野原に出て獵を爲し、その獲物によつて生活し居る如き、極めて單純なる經濟生活の場合にも、矢張り獵をするに伴ふ形式、又獲物を分配するに就きての形式が無いことは無い、故に只單に經濟生活から道德及び法律宗敎が派生せられたといふ事は、吾人は曾て形式なき支配原理なき全然無秩序の生活を爲したる事のあるを許すもので、實際の事實とは齟齬し居るものである、けれどマルクスの言つた如く、所謂生產力が變化して來ると生產方法が變化する、從つて生產物の分配の上にも亦變化を生じて來ねばならぬといふ事は、明に事實として許すべきことである、それを一方の歷史的觀念論者が、或は道德若くは法律思想の上から影響せられて生產方法が變つた、從つて分配の形式も亦變り來らねばならぬと言ふのも僅かに偏見である、道德及び法律の形式が經濟活動の內容を作つたな

どいふ事は全然謬見である、即ち兩者は初から存在するもの、只經濟關係が複雜になればなる程、道德及び法律の形式が精密になり、道德及び法律の形式が精密になれば、なる程亦經濟生活の形も變化し行くので、正に回互的（レシプロカル）の關係になり居るものだといつて居る、之が先づ大體スタムラーの見方である。スタムラーは此見地に立つて、經濟及び法律の結論の處に、カントの立脚地からマルクスの社會主義に對して同情ある批評をして居る、それは如何樣な意味かと云に、カントの所謂人格の尊嚴といふ事を根本思想とし、その幾多人格の社會生活なるものは、相互に相互の人格の尊嚴を認め、之を尊重する事によりて益々光輝を發揮させ得る、即ち人格の光輝なるものは、各人格の協同和衷によつてのみ之を認め得るといふ考である、即ち資本家は勞働者と雖も之を一人格なりとしてその尊嚴を認め、その光輝を發揮せしむると同時に、勞働者も亦徒に資本家に對して反抗的態度を取るを止め、同じく彼等にもその人格的尊嚴を認むると致し、互に協同和衷の道に出てこそ人間の社會的生活を爲し得るものなれとの考である。此考は決してスタムラー一人の考でなく、氏と同じく、所謂新カント派に屬する學者の多くは之に近き思想を有し居るのである。或はスタウンデンガーの如き、或はテンニース、フヲアレンダーの如きもそれてあり、又社會民主黨中の學者として立てられ居る夫のナウマンの、所謂新自由主義（ナチオナルリベラリスムス）（新獨逸經濟政策一千九百〇六年出版四百二十二頁より四百三十一頁迄參照）の如きも、スタムラーの考と亦全く相符合して居るのである。それ故に此所謂新自由主義といふ如き考が、獨逸の現代哲學界に於ける思想の一であり、そしてその思想はマルクスの唯物史觀に對して比較的多くの同情を寄せ居るものと言ふも大過なしと信ずる。

（大尾）

條約改正と關稅政策

稻田周之助

一、通商條約の改締

我と歐米各國との通商條約は明治四十四年七月十七日及び八月四日を以て各々其有効期限終了すべく、我が政府は來年を以て條約終了の通知を爲すべし。而して現通商條約終了と同時に新條約ありて其後を受けて彼我通商航海の事を支配せざるべからず。俗間條約改正と稱するものは則ち此新條約協定を指すの義に外ならず。

我が政府當局者既に新條約の談判に着手したりや否や予の與り知るところにあらずと雖も、久しき以前より其準備に取り掛り居れるは公然の事實にして、昨年十月條約改正準備委員を設けて關稅其他の調査に從事せるものゝ如き亦其一端を示すものならざるべからず。而して新たに通商條約を締結するに當りて當局者の最も心力を致すべきは關稅問題たるを亦疑を容れざる所にして、一般國民亦條約改正は即ち、關稅改正を意味するものと爲すの情あり。蓋し現通商條約は領事裁判制度を廢止し其他舊條約に比して進益する所多きや論なしと雖も、獨り關稅に就ては未た國民を滿足せしむる能はざるものあり、是れ其の朝野の人心を此に集むる所以なり。

且我が國民は近年數ば關稅定率法を改正して此に初めて其の國庫の收入に大影響あるを及び、農業鑛業製造工業に消長を及ぼす所以のもの甚だ大なるものあるを覺知し、國定稅の經驗に依りて此に初めて協定稅亦等閑に視るべからざるを想到したり。乃ち此度條約改正準備の事あるを機會として朝野共に關稅政策を攻究するに忙はしきが如くなるは決して偶然にあらず。

夫れ關稅協定といへば、保護政策又は關稅戰爭といふ思想と全く相容れざるや論なし。併なから我は國定協定兩關稅併用制を取るものにして、兩者相對立して我が財政政策を形成するものなれば、此たびの條約改正

を機會とし此問題を攻究するは蓋し最も其時を得たるものなるべく、予が瀧田君の需に依りて此問題を鄭寧反覆する、亦之に依りて大方の言議を促かすの一手段たるに外ならず。

二、關稅の協定

日本の外交史を研究するものは政府當局者の歐米各國及び清韓諸國に對する外交が世間の非難多きに拘はらず、常に其宜を失はざるに比して、關稅問題に關する外交は常に失敗に陷るも世間殆ど之を咎むるものもなく、當局者亦其過てるを知らずして過越し來れるの奇觀を見るべし。

何故に日本の外交家は關稅問題に失敗すること多きか、此に之を簡單に說き去る能はざれども、對手國外交家が自國民の利益を回護するを力めて讓らざると其の一。我が當局者通商貿易の實務に迂濶なると其の二。一般國民亦關稅問題に冷淡なると其の三。加之朝野の頑固者流毎に空論に耽りて實利を喪ふを顧みず、又紛々たる政爭其間に乘じて起り、外交當局者をして拮据綢繆に遑なからしむるとあり、是れ其の失敗多き所以なるべし。

初め安政五年の條約は主として當時の米國公使タウンセンドハリスの輔導盡力に依りて成れり。蓋しハリスは日本開國後財政困難に遭逢すべきを慮り、自國の財政政策に鑑みて關稅收入を以て國家の主要財源たらしめんとす。乃ち幕府の大官に說き、及び歐羅巴諸國使臣に周旋して當年の運上目錄なるものを協定せしめたり。其の英國と相協定せるものに就て之を見るに、第一種貨幣及び現用衣服家什板本は無稅、第二種船用具漁用具食料品石炭木材鑛物等は五分、第三種酒類飲料品は三割五分、以上三種類に含まれざるものは第四種と爲して二割の輸入稅を課するの約束なり。米國、英吉利、和蘭、佛蘭西、露西亞皆此協定稅を承諾し、漸く將に實施の運びに至らんとするに際して、國中の頑固黨開港に反對し、幕府之を制する能はずして此關稅上の利益を犧牲として、開港延期の事を列國に求む。是れ即ち慶應二年の改稅約束が五分を最高限として極め

て低き關稅を協定せる次第なり。

維新以來條約改正を企てゝ殆ど成らんとして敗るゝと數ばなり。其敗るゝ原因は常に外交にあらずして內政にあり。其內幕を窺はば政治家間の權力爭ひが最も大なる原因ならん。然れども其表面は一方に一擧して完全なる通商條約を贏ち得んとするの冀望甚だ盛なると、他の一方にシヤウヴイニズム、ジンゴイズムの發動極めて劇烈にして、通商條約談判の最中に排外熱を高め來るといふ珍現象を繰返し、外交當局者をして每度板挾みの窮に陷らしめたり。若し關稅の點より云はゞ寺島案固より甚だしき不可なし、井上案大隈案も其の成るは成らざるに優ると萬々にて、數ば成らんとして數ば破ぶれたる爲めに被れる我が財政上及び經濟上の損失は測るべからず。故陸奥伯蓋し此に見る所あり、條約改正談判に着手するに先ちて、深く伊藤公(當時伯爵)と相謀議するところあり、又議院の强大黨を引いて己れの與黨と爲し、破綻の內より起るを豫防して頗る綿密を極めたり。斯く維新以來の難問題たる條約改正事業が、陸奥外務大臣の手に依りて容易に解決せられたるは、畢竟內外の事情相熟せるに由ると云ふと雖も、抑も亦陸奥伯の智慮、前車の覆へりたるは一に外交當局者先づ內政の上より手を着けざるに由れるとを覺知し、未だ雨ふらざるに牖戶を綢繆したるが爲めなり。從て天下を擧げて條約改正の大成功を認め、當年の外交當局者を稱揚して及ばざるを畏るるが如くなれども、肝腎なる改正條約其ものは然ほど完全且優渥なるものにはあらず。併ながら完全且優渥なる條約を締結せんとして中途にして破ぶるゝは餅を畫くの愚を學ぶに過ぎず、多少の瑕瑾はあるも兎も角も舊條約に優る新條約を以てするを得ば足れりと爲すが陸奥伯の本志たりしや論なく、新條約一たび成りて海內之を謳歌し、復た其瑕疵をすら求むるものなきは偶ま以て陸奥伯の好政治家たるを證すべからずや。然りと雖も此事獨り日本の條約改正のみと云はず、大凡國際條約は對手國を承服せしむると及び自國民を滿足せしむるに最も重きを置き、條約其ものゝ完全無缺なるを求むる

が如きは寧ろ第二要件に屬するは古今東西外交史上の恒例なり。現通商條約既に然り、次の通商條約亦然らざるを得んや。

只此たびの條約改正を以て之を陸奥伯の改正談判當時の事情と相比すれば、後者の甚だ難きに對して前者の甚だ易きものあるを知るを得べし。乃ち今日は往年の如く領事裁判問題其他の厄介事件ありて存するにあらず、元居留地永代借地の處分、北米合衆國及び英國植民地移民に關する件の如き難問題といへば難問題なれどもたとひ條約改正談判なからしむるも此問題を決定すべき必要あり。又通商條約を獨立して之を協定すると亦難からざるべし。而して其の最も重大なるは關稅協定なるを論なしと雖も、由來關稅の事は通商條約の本位を成さずして、附屬條約として添加せるものにて其れすら英佛獨諸國の外は之を約束せざりしものたり。現通商條約は明治四十四年に至りて消滅すべしと雖も、之に先ちて新通商條約參伍相續いて成るべく、通商未だ成らざるものは暫く最惠國條款の利に賴るべし。而して關稅協定未だ成らざる間は我が國定稅率を普く適用するの外なきなり。一旦協定稅を設けたる國民に對して國定稅を適用するは我が甚だ欲せざる所たるや論なく、對手國民亦之を喜ばざるや言を待たざれども、協定未だ成らざるの間は此の欲せず喜ばざるものを擬するの外に取るべきの道なし。且此欲せず喜ばざるもの丶存在は則ち我と對手國民とを促かして協定條約を求めて自制互讓其衷を折せしむるの原因とも成るべくして是れ亦今の當局者が保有する特殊の便益ならざるべからず。

三、財政及び經濟政策

今日世界國民を通じて繁盛殷富駸々乎として日に月に進を見るものありと雖も、獨り其の歲計に就て之を觀れば何れも歲出入均衡を得ず、或は借金政略に苦み、或は增稅經營に惱み、頗る困頓を極むるの狀あり。蓋し各國の財政を紊亂するの原因三あり。其一は軍備擴張。其二は植民地經營。其三は社會政策の實施是れなり。今日如何なる富强國と雖も一たび此三者の一を

取れば即ち必ず財政上の困難を招かざるなし。況や其二者若くは三者を併せ取るものに於てをや。獨逸の財政困難は軍備擴張と植民地經營とに起因し、佛國歳計の缺陷は其植民地關係に由來し、英國は則ち三者併せ取りて其結果を招きたるものにて、就中養老金の遺算最も刻下の難問題たり。此上にも若し或ものの提案に依りて勞働保險制度を行ふに至ては更に其の甚だしきを見るべし。米國歳計膨脹甚だ急なる上に、今や養老金制度を施行せんとするの議あり。マサチユーセット議會委員の調査する所に依れば、北米合衆國にて六十五歳以上のものに養老金を與へんとせば、年々四億六千二百萬圓を要し、若し七十歳以上とするも仍ほ二億六千六百萬圓を算せざるべからずと云ふ。併ながら此の如き制度を施行して多くの違算、即ち五割七割の豫算超過支出を要するの先例に乏しからず。米國の國庫豊富なりと云ふも一たび社會政策に手を着けなば早晩缺陷を見出すとあるべし。伊太利は近年財政極めて順調なりと云ふと雖も、近報に依れば軍備大擴張の經畫を立てたりと傳ふるあり。彼亦北阿弗利加及び巴爾幹地方の經營に懸關して意氣甚だ壯なるものあり。其れ植民地經營と曰ひ、社會政策行用と曰ひ、軍備擴張と曰ふ、皆國家有用の事たらざるなしと雖も、財政上より云はゞ是れほど厄介なるものはなく、歳出膨脹して歳入之に伴はず、暫くは借金政略にて彌縫するも早晩増税を以て其の不足を補はざるべからざるに至る。是れ今日各國到る處增税經畫を云はざるなく、增税經畫を云ふもの遂に必ず關税增加に及ばざるなき所以なり。

今日の立憲國に於て税目を設け、税率を增し易きと關税に若くはなきなり。夫れ關税は外國貨物が國境線に觸るゝ時を以て課徴するものにして、其の直接の負擔者は外國品輸入者なり。内地人民は直接に其の痛苦を感ずるとなし。且輸入農産物に重税を課すれば農民は己れの保護せらるべきを信じて之を喜び、製造品に課税すれば工業者其の益を享くるを疑はず。之を内にしては各商業者皆其營業の保護せらるゝを欲し、之を

外にしては權衡を保つと稱し報復を行ふと稱して關稅を增徵す。宜なるかな世界各國の關稅漸次暴加の傾を示すや。

然りと雖も關稅の高に過ぐるは商業の衰退を來たすのみならず又農工業を保護する所以にあらざるは學理と實驗との明徵する所にして、今此に之を架說するを要せず。且更に憂ふべきもの二あり。關稅過重商業衰退せば、關稅の實收入亦減少し却て國庫の違算を招くヿなき能はず、是れ其の一なり。關稅を高くするヿを相競ふの極、關稅戰爭を開くに至らば國際貿易上の利益は第三者に奪ひ去られて、兩競爭者は共倒れの愚を見るのみならず、之が爲めに外交上の難問題を叢生し國家の危險を招くヿなき能はず、是れ其の二なり。

日本國民は幸か不幸か未だ關稅過重より生ずる痛苦を經驗せず。併ながら關稅國定制度を設けてより以來農工業者各々保護稅を望みて已まず、政府議院亦歲計不足を見る每に先づ關稅增徵を云ふと各國の近情と相異なるなし。是れ豈關稅增徵の前兆を示すものならずや。而して關稅定率法第四條にて我が船舶又は生產品に不利なる取扱を爲す國の生產品に對して、勅令を以て有稅品には定率法の稅率、無稅品には五割以下の輸入稅[illegible]するを得るといふKampfparagraphありて、法律を以て關稅戰爭を促しつゝあり。將來如何なる出來事を生起し來るべきか逆じめ知るべからざるものあり。

夫れ關稅を增徵するといふヿにして單に歲計の不足を補ふが爲めなりとせば洵とに已を得ざるに似たりと雖も、增徵必ずしも實收入を增す所以にあらず。特に關稅戰爭より國際關係を不良ならしめ、更に歲計膨脹の原因を作り出すが如きは其の失計も亦極れりと云ふべし。況や關稅問題の爲に政界の腐敗を來たし實業界の墮落を招くヿも亦立憲國民の最も畏るべき所なるに於てをや。則ち是等の禍根を絕つの道は關稅を協定して親交國民間に關係を明確ならしむるにあり。協定關稅は稅目を繁くし稅率を高くする所以にあらざるヿ勿論なれども、國際の貿易は之に依りて發達し國民的經

濟關係は是に依りて親密を加ふべければ、彼我國民相共に安心して其の營業に從事し其の條約の存在する間、政治家の野心當業者の利欲の爲めに蹂躙さるゝことなきを得べきなり。且一方に關稅々增徵すること勝手次第なる間は、功名を好むもの猥りに事を起して其の財源を問へば則ち之を關稅に求むべしと爲すがごときことありては歲計の膨脹限りなく、其の缺陷は從て蔽へば從て現はれ、遂に爲すべからざるの極に達せざれば已まざるべし。乃ち豫じめ其の弊害を塞ぐは亦治世の要道たらざるべからず。今や我が官民共に關稅問題の研究に忙はしきもの〻如くなれども其の財政及び經濟政策の根本要義に至りては殆ど之を攻考するものすらあらざるは甚だ遺憾なるを以て、此に微しく其要を語りて以て世人の注意を促かすも亦無益の業にあらずと信ず。

四、外國人の土地所有權

歐米人の日本の經濟を談ずるもの往々日本帝國の國法が外國人に土地所有權を與へざることに苦情を鳴らし、此禁制存ずる限り歐米人は日本に資本を投ずるに躊躇し、日本の經濟の內外共通は此禁制に依りて永く阻止せらるべきを云ふあり。內地財政家亦是等歐米人の言に重きを置き土地所有權は彼等の最も欲する所なり、稅權回復其他我利益を增進する爲めには好箇の約因（コンシデレーション）なりと爲すに至る。

然りと雖も所謂土地所有權なるもの果して其れだけの眞價ありや、歐米人此權利を得ば其の代償として彼に不利にして我に利なる協定條約を結ぶべきやは今豫じめ研究し置かざるべからず。

外國人に土地所有權を與ふるや否やといふことは本來國法上の問題にして國際條約の事項にあらず。我が明治六年大政官布告第十八號第十條に地所は勿論地券のみたりとも外國人へ賣買賣入書入等致し金子受取又は借受候儀一切不相成候事とあり。是れ外國人土地所有禁制の根本規則にて、此規則のみ嚴重に行はれて他の約束なきに於ては、外國人は不利の地位に立ちたらん。併ながら此規則は條約及び法律を以て大なる變更

を受けたり。乃ち外國人は一個人にては土地を所有するを得ざれども、法人ならば之を所有するを妨げず、又不動產抵當權の取得及占有をも條約にて之を許せり。而して鐵道抵當法工場抵當法鑛業抵當法案を以て外國資本家をして土地を支配するの權利を保存せしめたるも亦我法制上の一大變遷にして、今日にありては歐米資本家に取りては土地所有權なきも猶ほこれ有ると異なることなきなり。

且元居留地永代借地權を有するものは其の權利の實質は殆ど所有權と相異なることなくして、租稅負擔極めて輕し。故に若し永代借地權に代るに是れよりも一層優位なる所有權を以てすべしと云はゞ、彼等は必ずや囂々として其の不可を鳴らすの奇觀を呈すべきあり。

此に一言すべきは外國人の農業を營むの權利なり。日佛條約第四條末項に曰く、佛蘭西國に於ける日本國民及日本國に於ける佛蘭西國民は農業及不動產所有權に關する一切の事項に就き最惠國臣民若くは人民と同樣の待遇を享くべきことを約束すと。此明文に就て之を見れば農業權と土地所有權とは本來兩國民相許さゞるところなれども、若し或一國民に之を許すときは之に均霑することを相約せるものに外ならずして、土地所有權を獨立して農業權なるもの存在し、此權利は特に許與せられざる限り外國人に歸屬せざるものと解せざるべからず。

乃ち土地所有權を外國人に許すといふことは外國人に取りて不利なる事柄にあらざるは勿論なれども、然ればとて強て之を求むるほどの事にはあらず、況や何等かの代償を拂ふてまでも此權利を獲得することを望まんや。今日世界各國の實例を見るに植民地若くは未開地を除きては、土地所有權を外國人に許すが通則にて、我國の如く本國にて土地所有權を許さざるの例は甚だ稀れなり。故に世の中の進歩に伴ふて此權利を外國人に許すといふは可なり、此權利許與を保留して他に之を約因として何事をか求め來るを待つといふが如きは恐くは越裡の笑を招くに過ぎざるべし。

五、交渉談判如何

以上述ぶる所にして幸に大過なからしめば今度の條約改正は明治二十七年の其れに比して甚だ容易なるべきは論なしと雖も、通商條約のみを改締して關税は總て國定税率に依り、條約協定を爲さすといふが如きは蓋し望み得べき事にあらず。又既に關税を協定すると云へば之に依りて我が保護政策を行ひ、若くは高税率を課して我が收入の増加を圖るといふがごとき亦行はるべき事にあらざるなり。只之を協定するに當りて出來得る限り其品目を寡くし、相互の關係の單簡且明瞭なるを旨とすべきのみ。初め條約改正談判に際して英國と附屬税目を議するや、英國當局者は汪洋澹泊勉めて煩瑣に渉るを避けたるを以て協議は容易に成り立ちたれども、獨佛諸國と協定するに及びて彼の當局者は常に關税政策に鞅掌し、備さに辛酸を嘗め盡くせる黑人なるに對して我が使臣商買に通ぜず、本國政府亦甚だ其心を此に用ゐざりし爲めに一歩一歩切り込まれて、對手國の注問通りなる協定を爲すに至れりと云ふ。尤も當年の使臣の實務に迂なる言語に絕し關税の細目に就て他人に致さるゝが如きは是非もなきこととして、通商條約實施期を誤算したる爲めに英米其他の條約が、明治三十二年七月十七日より實施し得るに對して伊墺諸國の條約は八月四日ならでは實施し得ざるが如き齟齬を生じ、又或全權委員は己れの位階が正五位に進み居るを忘れて從五位某と記して、條約本文に記名したる爲めに進退伺を提出するといふ大さはぎを爲したるが如き無邪氣なる失敗もありて、一々算へ來るは際限なし。之に比すれば今日の外務省官吏及び大使館公使館員は智識經驗大に進を加へたると勿論なれば、鞠躬盡瘁、怠るなくんば庶幾くは過なきを得んか。

而して條約改正談判開始の後に至りて如何なる出來事起り來るべきか、逆しめ睹るべからざれども、官僚間の權力爭ひより互に其功業を相妨ぐるがごとき故態を演ずるものあるべしとは思はれず。又舊式のジンコイズム、シャウヴィニズムなども發動すべき朕兆もあらず。則ち維新以來の外交當局者が數ば失敗を招き、陸奥伯が拮据綢繆最も努めて稍々其功を成したるかごと

き事情は全く存在せざる者と見て大過なかるべし。只關税を増加すべしといふ議論は朝野に渉りて頗る勢力あるに似たり。然りと雖も我國今日の財政は極めて順況にて、現に年々の剩餘金の處理に苦勞するといふ有樣なれば、他國に於て見るが如き財政上の必要に迫られて關税増加を説くものはこれ無し。獨り農民の爲めに説くものは農産物に輸入税を重課すべきを云ひ、製造工業鑛業に從事するもの各々保護關税の惠澤に浴するを冀ふあり。田舍政治家亦相夤緣して之を鼓吹するが如くなれども、心あるものは竊かに其陋を指斥するといふ次第にて今は眞面目に之を云ふものすらあらず。則ち大局より之を言はゞ、外交當局者の自由手腕を揮ふに任かせて何ものも之を天關するものなき有樣なり。夫れ多くの難問題ありて存するにあらずして、特務の便宜を有すると甚だ寡からずとせば、世間今の條約改正者に望むに全功を以てする亦故なきにあらず。就中關税を協定して至善至美を盡すは蓋し我が當局者の當務の業なり。(完)

高等教育制度の改正を論ず

(大學院を活動せしめよ)

法學博士 鹽澤昌貞

高等教育年限の余りに長きに過ぐるといふ事は、昨今實業家並にその他の方面の人々より頻に注目せられ、問題とせられて居る事で、先日實業家の高等教育關係者招待會にても右樣の質問が出て文部次官からの答辨があつた樣である、それ等によると當局者も已に十分注意して居る樣ではあるが、未だ何といふ成案も存して居らぬらしい。

今の樣に高等教育の年限が長くては、あたら活動の時期を空しく學窓の下書册の間に過して仕舞つて、漸く卒業證書を握り、いざ社會に立たうといふ時には、紅顏徒らに消えて既に人生の半を超え居るといふ有樣

てある、のみならず實際、社會に立働くには唯書物のみて得た智識で濟むものではなく、別に活社會より得來つた經驗的智識が無くてはならぬ、然るに學校に於て往々にして人生の半を終る有樣では、此肝要なる經驗的智識を作る時間が無い、旁々此の如きは以て人才を經濟的に使用する所以の道ではない。

今日の有樣は高等教育を受くるもの日に益々滋くして、而かも各學校の卒業生は年と共に就職難に苦むの有樣である、此の如くにして推し行かば將來は如何なるべきであらうか、是れ一つには前にも述ぶるが如く抽象的の智識はあつても經驗的の智識は足らず、實際界に立働く上に格別の力を認めぬ、從つて余り重くは用ひられぬ、一方には志望者が多いから愈よ待遇は惡くされるといふ事もある、がその一方には高等教育なるものに對する、一般社會並に學生自身に於ける一種の誤解がある、それは何かといふに大學の門でも出れば直に學者に爲れるものと、學生自身にも一般世人にも爾く信ぜられて居る、が卒業して見ると大した力も備はつて居らぬ、けれども實に副はぬ名の爲めに一種の虛榮心が働いて、何となく自ら高く止まり度なる、世間では左程に買はぬ、自分では安く賣り度は無い、安く賣れば大學卒業の面目に關すると思ふ、それが爲に愈よ就職難は來る、が之に對しては又說を爲すものがある、今日は經濟界が沈滯して居つて各種の事業が甚だ振はぬから、從つて多くの人才を容れる事も出來ぬのだが、此の如きは永く續くべき現象では無いと、是れも確に一理由ではある、が今日の如くに高等教育を受けたものが增加し來ることは大體に於ては喜ぶべき現象ではあるが就職の點より見れば、需給の數が相乘除して宜きを得るであらうが、今年の官私大學の卒業者數を見ても帝國大學、早稻田、慶應及其他の卒業生を計上すれば大した數になる。此現况では樂觀は出來ぬ、就職難の叫聲は年と共に增加せぬを得ぬと信ずる。此處に於て諸種の方面から教育過重の聲の起るのも無理は無い、獨り日本人が言ふのみでなく、外人の目にすら爾く映すると見ゆる、此頃外遊の途中我

國に立寄られた亞米利加の市俄古大學教授ベートン氏の如きも亦切に我國のオーヴァーエジュケーションに就いて疑を抱いて居られた。高等教育と實務的活動との關係に就ては、何とか改善の策を講ぜねはならぬといふのが刻下の問題である、私は之に對して一種の意見を持て居る。

現在の官立大學ては一般學生の卒業年限が遲くなることは明かので之を何とか工夫して短縮せねばならぬのだ、茲に大學といふても、單に大學の本科をのみ指すのてはなく其豫科たる高等學校迄を含めるのてある、蓋し短縮の成否は後者に在て存ずるのてあらう。如何樣にして之を短縮すべきか、之には先づ大學なるものゝ性質から明瞭にして掛らねばならぬ、漫然として今迄學生と世人と共に信じ來つた如く、大學本科を以て單に學者を養成する最高等學府となすに於ては、今日の教育年限を短縮所か却つて增加せねばならぬ、三年若しくは四年そこらで完成した學者が出るものてない、出ると思ふのは大謬見てある、從來とても多少の例外はあらふが、その卒業生の大多數は學者と云ふ銘を打つたとは到底出來まい、學者となるには學理の根底にまで深邃なる理解がなければならぬのだが、多くの大學生を見るに如何てあるか、大抵は汲々乎として一意ノート筆記にのみ勉め、習つて居る間は其方のみ心を奪はれて十分理解力が働かず、家へ戻つてからノートの整理に勉め復誦して漸く大意に通ずるといふ始末、それも根底の原理に到着して止むなら宜いが、多くは部分々の淺薄なる理解に止まり、いざ試驗といふ時にその斷片的記臆に縋つて巧に難關を切り拔けるといふ樣な事が多い、平凡なる多數者は此如くにしてノート勉强試驗勉强に終り校門を出るのである、出れば一樣に學士號が付くのてある、それを世間には學士は學者てある、學士即學者といふ樣に「士」「者」無差別視する積弊が行はれて居るが何たる間違てあらう、學者を出すには此樣な方法てはいけぬ、大體學者を出すのなら教育年限に一定の制限を置くことはいけぬ、五年七年或は十年、その人々の所修の學科並にそ

の機根に應じて自ら伸縮あるべき事で、一概して三年四年と歳月を限るは謂はれなき事である、學問の完成が其樣に無雜作に出來るものでない。

が學者なるものは無くてならぬものながら社會としては左迄に多くを要するもので無い、學者は社會の智識の源泉であるからその源泉を涸らす譯には行かぬが、實際に於て多く要せらるゝものは學者よりも寧ろ高等專門教育を受けた活動的人物である、從つて學者を多く養成する必要は無い、よしや必要が有るにしても、學者なるものは左樣に多く有るものではない、詩人は天才だといふけれど、天才獨り詩人のみに限らぬ、學者も矢張り一種の天才を持たねばならぬ、十人が十人、百人が百人ながら、同樣の教育をさへ與へれば同樣な學者に成れると思ふたら大間違である。學者となるべき頭を有するもの、即ち天才あるものはその中の少數であるが常だ、而して此天才を養成しその器を成就せしむるには別に自ら方法がある。

兎に角學者なるものは左樣に多く得らるゝもので無く、社會の需要する所も亦直に實際界に役立つ高等專門の智識であり、尙ほ又それを成る可く短日月間に修得せしめたしといふ點に在るとすれば、今日の大學の本科なるものゝ目的も亦此處に定めねばならぬと思ふ、即ち大學を以て學者の養成所となし、學生並に世人をして一樣に爾く信ぜしめ來りし年來の積習を一掃して、大學の本科は實際に活動すべき人材を出すところ、學士は學者にあらず、大學を卒業するも毫も偉らき所なしといふ樣に一般をして心得しめ、斯くて大學には教ゆるに時勢に相當なる高等の智識を以てするが宜かろうと思ふ。此の如くなれば何も此處で學問の薀奧を究め盡す欲望も無く、求むる所は大凡その學說、又それからして導かるべき實際的の智識であるから、其豫科たる高等學校も之に應じて組織を改正し、自然に年限の短縮も出來やう、能く徹底的に考案を廻らすならば、遠く中學の組織からして改革しなければならぬか知らぬが、中學教育の事は暫く擱いても尙ほ優に高等學校から大學卒業迄の年限をズット短縮し得やうと

思ふ、七年のものなら五六年内外で卒業させ得やうと思ふ、

然らば學者を如何にして作るか、實際家だけ有れば學者は要らぬといふ譯には行かぬ、實際家だけて智識の根抵に培ふ學者たるものが出ぬとすれば、學術の進歩は之が爲に止まつて仕舞ふ、一國の文明は墮落する民智の地平線が低下する、從つて社會の進歩は全く止まつて仕舞ふのである、故を以て智識の根抵なるものは怠らず灌がれ培かはれて、愈よ固くなり愈よ深くなり愈よ蔓らねばならぬものだ、此般の消息は偶ま近世史を繙いても直に分る、獨逸近來の繁榮は如何であるか、その輓近に於ける文運の勃興學術の進歩と相即不離の關係あることに誰しも心附くことであろう、學者養はざるべからず、學者大に作るべし、而かも今の大學を前述の意義に改めたりとてそれには他に尙ほ方法がある、

そは大學院を今よりも更に活動的にすることだ、官立を例に引いて言ふと、今の大學院は意義の少いものだ、否な有名無實だとも聞く、大學院は名のみ存せられて最最高の學府となりをるものから、その實何等の講座あるでも無ければ、少數かは知らねど中には籍を其處に置きながら、身はその專攻科目と緣遠き官界に就職し居るものあるとも聞く、此名のみ徒らに有りて實の空しく逸し居れるものを、新に名實相添ふものとなし、此處に大學卒業生中の秀才にして實際研究に適するものを收容し、斯くして眞摯に忠實に最高最新最遠の學理の闡明に從はしむるが宜い、クラス制度にして各教授に各々專攻の講座を開かしめ、生徒をして各自の好む處に自由に出席せしむる、大學とは節度を異にして勉めて外部的干渉を去り、生徒をして自己の意志の儘に任意に勉强せしむる方針を取り、試驗等は一切せぬ、年限も無制限にして只最高學位を要求する資格の生ずる迄と定むる、此の如くにすれば亦能く天才をしてその器を成就せしめ、徒に頓挫中廢の嘆無からしむるを得ると信ずる。

之を要するに私の抱き居る高等教育の理想は二點に

分れる、一は學者を作るに在り、一は實際家を作るに在る、而して前者には大學院の設備あり、後者には大學本科の設備がある、即ち大學院の方はグラジユエートデパートメントて、大學卒業生のみを容れる、大學本科の方はアンダーグラジユエートが居る、此を以て大學院の目的は自ら最高學府である、而して大學本科の目的は自ら學俗の調和てある、俗といふ語には語弊が絡むが、此處の意は只實際と言ふ程の義である。更に換言すれば大學院はインヴエスチゲーシヨンを旨とし、大學本科てはインストラクシヨンを旨とするのである。亞米利加などの制度は英獨の折衷で先づ大凡そ此てある、即ちカレージコースといふのが我大學本科に相當するので、之を本としてその上にグラジユエートコースなるものがある、即ち我大學院だ、之は專ら研究の方に從ふので年限も無期限になつて居る、併し試驗丈はやる。

斯くの如くに目的が明瞭に二分されると教授の生徒に對する態度手心も自ら分れて來る、大學の講座に就いては教授は只その各學科の要處々々を巧に摘發して十分に會得せしむるを勉め、餘は參考書を示して自ら研學補修せしむる、試驗の時にも豫め參考書を告げ置きて問題をその中より選ぶ事とする、そして此方には何も教授が自已の智識の洗ひ浚ひ、蘊蓄の底を迄傾け盡して掛る程の必要は無い、而して生徒の方では容易に理解し大義に通じて誤らざるを得ると同時に、右樣の教授法ではノート勉强に左したる効果がないから、勢い態度の眞面目たる學問が身になるといふ結果を生ずる、すれば所修の智識は慥に確實になる事と思ふ。

一轉して大學院に向ふて此處は研究の方であるから、教授も生徒と打混て共に研究の態度を取る、從つて自分の研究し得た丈、それがまた未了のもので有ろうと搆はぬ、教授は揮身の力を籠め造詣の限りをさらけ出して講演する、秀才を集めた生徒である、彼等にも隨分創見も有ろう、教ゆるもの常に教ゆるとは限らぬ、時には却つて教えらるゝ事もあろう、而かも虚心坦懐互に相琢磨し切磋して眞理の爲に獻身するとす

る、すれば教授連も自然の刺激から晏如としては居られぬ、研鑽怠らず、日に日にその識を新にして行かねばならぬ、その結果は次第々々に一國の智識の平準が高まることになる。彼の米國の大學院や獨逸大學の「ゼミナール」などを見るに正に此の如くである、そして學者も大學者を以て目せらるる程の人は大抵自己あるを忘れ一意眞理をのみ目懸けて進む、動もすれば見受くる如き、我國の學者の偏狹なる態度とは甚だ逕庭がある。此點は學び度き事と思ふ。

兎もあれ此の如きの制度を取れは、今迄困難にせられて居た修學年限短縮の問題も容易に解決せられ樣と思ふ、從來その問題の困難とせられたのは、大學本科を以て事實上學問の總結としたからであるが、今それが全然前述の如く改められるとすればその方の困難は自ら廢せられる譯だ、又大學を卒業しても學者を氣取るといふ事が無くなるから職を求むるにも自ら氣易くなる、此方にも一難が減ぜられる譯になる、究竟する所私の提案は今日困難とせられ居る幾多の要求を滿足せしめ得た上に、尙ほ一國智識の高度を進め行き得る制度であると思ふ、その細目の如きは大綱既に立てば左迄の困難なく制定され得る事と信ずる、敢て微衷を陳べて同憂の士の參考に供する。(談話筆記校閲濟)

貴族院論

田川大吉郎

貴族院の多數者は口癖の如くに國家主義といひ又武士道といひ、日本の現時に於ける武士道並びに國家主義の代表者は自分達の外にはないと考へて居る。けれども武士道を解せず又國家主義を解せざること貴族院の如く甚しきものはない。詰り貴族院は今日の個人主義の好標本である、好典型である。

歷史に遡つて見れば、彼等の祖先は人を殺したものである。人をして自分の馬前に討死せしむることを愉快とし、自ら進んで人の馬前で討死した事のないものである。人を見ると土塊の如く、他人の榮辱苦樂に痛

切なる同情を持たない。彼等が政治に興味を持つのも詐りは一身の榮達利慾の念より起るのであつて國家の休戚安危を憂ふるより來つたのではない。近來或人は衆議院を抑へて貴族院を揚ぐるやうな傾があるが、若し此個人主義的性格を改めざる限りは、偶々僅かに貴族院にあらはるゝよき働、美しき業も之を賞讃することが出來ぬと私は思ふ。現に今回の日糖事件に於て衆議院の人が縲紲の辱を受けたるに對して貴族院の人て快氣を呼んだ人がある。是れ實に衆議院の墮落、貴族院の潔白を證明するものであるとて得意になつて居る。衆議院に此の事ありしは確かに衆議院の耻辱であるが、貴族院には墮落したる人が決してないと斷言し得る人幾人あるであらうか。私の聞く處によれば、日糖會社の帳簿に、會社のいふがまゝになつて働く人と印をつけられた人が貴衆兩院を通じて卅二名あつた相てある。然るに衆議院で檢擧された人は二十名に超えない。して見れば殘りの十數名は貴族院にあらねばならぬ譯である。貴族院には斷じてかゝる人なしとわが良心に問いて答へ得る人幾人あるか。若し果してかゝる人があつたとすれば所謂人の振り見て我が振り直せて、大いに顧る所あつて然るべきだと思ふ。只漫に衆議院を譏つて自ら獨り潔白な樣な風をして居るのは甚だ感心出來ぬ事であつて、此一事を以て見ても貴族院の人は未だ武士道の何たるを解せずと思ふ。

貴族院の人は武士道を解せず又國家主義を解せず、いふ所、望む所、個人の榮辱利達である。而して此呼吸を解したるものが貴族院を制することが出來るのである。大隈伯は貴族院でウケヌ人である。私は大隈伯の貴族院にウケヌことを以て、伯が進歩主義の人てある證據だと思ふ。貴族院の多數は所謂保守頑固の人てある。夫れ故に大隈伯の如き進歩主義の人はウケヌのてある。大隈伯に次いで貴族院にウケのわるいのは伊藤公である。其初め伊藤公は公侯伯子男の爵を定めて、恩を貴族院に賣つた人であるに拘らず、七重の膝を八重に折つても貴族院では失敗して居る。伊藤公は矢張り大隈伯に次ぐ進歩思想の人である。先進の政治家中

一番貴族院にモテル人は山縣公である。モテルも道理である。山縣公は伊藤大隈二老に比して遙かに保守戀舊の人であるが故に貴族院にモテルのである。又現在に於ては桂侯は最も貴族院にモテル政治家である、山縣公、桂侯は性格趣味が貴族院の人々と合體するのみならず、又確かに貴族院の人々を收攬する秘術を解して居る。貴族院は國家、武士道などいふことを解せずして、死して後位一級を進むるといふやうなことが其希望であつて、且つ之を家門の譽として居る。自分自身の政治上の主義主張なく、息子達でも引立らるれば此上なき感謝すべき事として居る。こういふ貴族達の階級位置に對する年限、又息子達に將來如何なる學問をさせ如何なる方向に進ましむるを願ふかといふやうな事に委しいのは桂侯が第一等である。次いでは山縣公である。桂侯は貴族院に對しては乃公より以上にうまくやれるものがないと信じて居る相である。例へば龜井警視總監が貴族院に對してヤキモキすると、貴族院の事はおれがやるから心配に及ばんと傲語する相である。又實際桂侯程貴族の內輪の情實を解し、又貴族の子供達を世話するものが稀であらう。世の中に親の心を取るには子供の心を取るに若くはないといふが桂侯は此諺を貴族院に施して居る。それで貴族院の多數を制して、巧みに貴族院を動かして居る。要するに情實の仕事であつて、國家本位の仕事ではない。大隈伯などは政見主張の上から動かさうとするのであるから饒舌ると最も多くして益々多數を失ふのである。桂侯は何にも饒舌らずして味方を多く得るのである。

聞く所によれば今度の子爵議員の補缺選擧に於て桂侯も非常に力を入れた相である。之について世間いろいろの說もあるが私は其一事よつて天下の秋を知るのである。何故なれば、山縣系桂系が此選擧に全力を注いだのは衆議院に於ける政友會の絕對の權力を認めた結果である。政友會の多數を制するは彼等が蛇蝎の如く忌む所であるが、今に於ては過半數の政友會をさし置いて衆議院で仕事は出來ぬ。衆議院は政府のものでない。夫れ故に貴族院は益々基礎を固めて政府の爪牙

とせなくてはならぬ。故に貴族院の山縣系桂系を防禦するは此時機也として一層力を注いだのである。其盡力の結果として研究會の勝利に歸し、桂系及び天下も等しく桂派の優勢なるを認めたのである。然し將來は到底預言し難い。今回の競爭も、初めは研究會が百四十五、談話會が約百と想像せられて居つた。夫れ故に研究會に四十五の勝のあることは敵も味方も初めから知つて居た。只勝負を爭ふ積ならば默つてゐても勿論勝つたのである。それを努力して爭ふたのは研究會の地盤を成るべく鞏固にして指一本もさゝせまいとした爲めである。さうして終に百九十六票を得た。即ち豫測よりも五十一票を多く得た。此五十一票なるものは政府の運動の結果である。必ずしも研究會員の殖えたのではない。中立無所屬者が運動に絆されて一時研究會派に投票したのである。研究會は之に滿足して居るかも知れぬが、此連中は他日如何に動くか分らぬ。談話會の方は百といはれて九十八を得て豫定以下に切り崩された。けれども研究會も自身は二百八を得るといつて居たから、實際は揚言よりも十四減された譯てある。談話會は之を以て研究會與し易しといふて居るが、これは痩我慢の言葉かも知れないが亦一理もある。研究會を擁護するもの深く將來を考へなくてはならぬ。然し貴族院今尙研究會の手中にあり、研究會は又山縣系桂系の手中にあることは爭ふべからざる事である。私は山縣系桂系が全力を盡して爭ふことを愉快とするものであるが、貴族院が情實の府であつて、山縣公桂侯が情實に投ずることを知るが爲めに貴族院を有するものとすれば、立憲政治の爲めに之を殘惜しく思ふ。極端にいへば、貴族院には政治を解せず又立憲政治を咀ふやうな人も居る。貴族院の爲めに惜しむべきてある。貴族院の將來は要するに四十四年の總改選の時にかゝる。今日勝つた山縣派も四十四年の勝利を期し、又熱心に運動するてあらう。談話會も亦今日後繼續して戰ふてあらう。其數は今日から豫想する人もあるが自分は分らんと思ふ。如何に成り行くに拘らず、此問題は、衆議院の政黨問題よりも興味ある問題と思ふ。

私は今日よりして深き注意を以て四十四年の結果の如何を見んと欲する。

大體に於て山縣派の勝は眼前の事實であるが、眼を放つて大觀すれば、衆議院に於ては已に政友會に負け、貴族院では全力を盡して其壘を堅うするに努めて居るとすれば、立憲の進歩遲々たりといふ中にも、立憲政治の大勢が已に貴族院の堡に迫りつゝあるを知るに足るのである。此心持が四十四年の總選擧の結果に於て、過たず一層割よくあらはれんことを希望する。

今日では衆議院は政友會の獨占に歸した爲めに政治上の力拔がして面白い變化がない。貴族院は未だ一黨派に歸せず。區々に分れて居るが爲めに政黨の駈引の間に勇將猛卒が少くない。例へば研究會側に於て三島彌太郎、關清英、岡田良平などはどうしても衆議院に比類少なき鬪將である。此連中の戰の仕振は政友會の領袖などの如くに脇眼を振らず、躊躇逡巡の態がない信ずる所に突進する。男らしく又勇ましい。私は自分の主義政見としては此人々に慊らぬ所が多いが、其武者振を頼もしいと思ふ。柔弱なる同主義者よりは、政見が違つてもかゝる人が頼もしいと思ふ。四十四年の總選擧に當つて最も武者振の花々しいのは此人々であつて、そしてこれが此人々の最後の舞臺であらうと思ふ。堀田正養子に對しては私は多大の望を囑しない。其糾合し得る數も知れたものと思ふ。彼れ自らは衆議院の又新會の如き位置を保ち、多數黨の間に介在して中立者の位置を占めんとして居るらしい。けれども私は又新會の半ばにだも達し得まいと思ふ。又現に直接にいろ／＼な事をせぬにしても、貴族院の事を論ずるに當つて、どうしても考の外に置くとの出來ぬ人は清浦子である。元來多智にして政治上の閲歴多き彼は、貴族院を率ゐて雄飛せんと期して居るだらう。現に研究會に有する勢力も少くなからうが、今後如何なる態度を取るかゞ分らぬ。同じく桂派の中とせられて居るが桂にいかに當てコスルかといふとも注意すべき現象の一つである。

終りに尾崎君は近來一院一黨論を唱へ、世間亦此説

の可否を論じて居る。自分も尾崎君の說を疑ふもの丶一人である。假りに尾崎君のいふが如く、衆議院は終に政友會に委ぬるとしても、貴族院は終に一黨の手には落ちぬ。研究會が政府に立つて總ての政黨が其指揮命令を仰ぐといふやうな事に決してならず、貴族院には益々黨派が多くならうと思ふ。外國でも例のあることで、以前では二大政黨といふて居たが、黨派の數が段々多くなり、獨逸には七つ八つあり、佛蘭西にはモッと多い。二大黨の本場なる英國も、保守黨自由黨中に夫々黨派が出來て來た。米國では一人の大統領を選ぶに、近來は國民黨社會黨等の勢力も加はつて來た。世が進むにつれて、人心も追々細かく分れる傾向があるから、政黨なども此傾向と關聯していくらか多くなつて行くものと思ふ。只政治家は此數多き政黨に聯絡をつけて一つの方向に動かすことを心掛け、又出來るであらうが、只一黨として了ふとは出來まいと思ふ。此意味に於て私は尾崎君の說に反對する。理屈はとにかく貴族院は將來益々黨派が多くなるだらうし、衆議院も假りに一黨的現象を呈しても一時の事であつて永續しまいと思ふ。日本人は兎角一方に傾き易く、自由貿易主義が流行れば極端に保護貿易說を斥け、保護貿易主義が流行れば極端に自由貿易主義を排するといふ風に二個以上の思想を對立させるとの出來ない國民である。今や貴族院が漸く立憲政治の味を解して從來の迷から覺めて活動せんとする時、衆議院統一論といふが如き日本政界の惡い過に感染せんとするのを惜む。貴族院か眼を覺ましたことを喜ぶと同時に、衆議院も亦眠らずして活動せんことを望む。蓋し貴族院をして今日の活動をなすやうに導きたるものは衆議院であつて、衆議院をして活動せしむるものは、今日の貴族院の覺醒であらうと思ふ。私は四十四年の貴族院の大活動を望むと同時に、其運動の餘波が衆議院に及んで、兩院共に目覺ましき活動をなさんことを祈るのである。(完)



現在に於ける海外一切の状勢殊に我國と密接の關係ある環米問題の消息を主に最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

モンロー主義の由來と變遷に就いて

マスター、オブ、アーツ　石村誠一

吾人は思ふ、吾人が米國國史を繙くに當りて容易に看過す可からざる三大記錄ありと、何ぞや、曰はく獨立の布告、華盛頓の告別の辭、「モンロー」氏の教書即ち是れなり。建國以來僅に一百三十有餘年北米合衆國は已に宇内に雄飛して、終始世界の外交場裡に獨立自由の活劇を演ずる所以のものは、蓋しこの三大遺訓に基因せるものに外ならず。而して米國外交の主義も亦實に玆に胚胎したるものなり。

惟ふに米國建國の大旨は、當時猶未だ英領植民地たりし北米十三州民等が、慷慨悲憤奮然立ちて母國に反旗を飜へし、天下に自由獨立を叫べる彼の獨立布告中にあるが如く、固より自由平等民政共和の一大原則の下に建立せられたるものなれば、獨立以來彼等は是れに依りて内政自治の國是を定め、重きを殖產工業の發達と通商貿易の進步とに置けり。是れ自然の約束にして、是れと同時に成るべく歐洲諸國と政治的關係を絕ちて、常に政爭以外に超然として嚴正中立を守り、無用の干涉を避けんの必用を生せり。是に於てか開國經世の士日夜額を鳩めて慘憺苦心しけるが、中にて尤も能く其の意を闡明して、以て後世子孫の爲めに國家百年の長計を定めたるものは、即ち建國の祖父華盛頓なり。奉公義勇の化身たる彼れは正に建國の大業を終はつて、靜かに晩年をポトマック河畔に養はんとして、悠然國都華盛頓府を去るに臨み告別の辭を述べて曰はく、外國國民に對する一大法則として、吾人は彼等と通商貿易の發展を計ると共に成るべく彼等と政治上の關係を離れざる可からず。然れども既に彼等と契約協定せる事件に就いては、誠實誠意履行の實を擧げて、以て玆に一段落を告げしめよ。

猶はまた彼れと終始南船北馬、國難を共にして、獨立の大事を助けたる、「トーマス、ジャワーソン」の如きも、一千八百〇一年「アダムス」の跡を受けて、新大統領の桂冠を戴くや、議會に向て教書を發せり、其の一節に曰く、「各國國民と交はるに、平和商業友誼を以てして、決して彼等と政治的同盟を結ぶ可からず」と、以て如何に達觀先覺の士等が、米國の國

是が歐洲政界の上に、超然として無用の係累を避くるに在るを知るべく、又是れに由りてのみ生產工業の起り、幸福平和の日の來るを認めたることを知るに足る可し。

夫れ斯くの如く米國政府は、商業貿易局外中立の二者を以て對外國是の一大政策と成したるが是等と相前後して更に同國外交史上に一段の光彩を加ふる事實を舉げたり。即ち「モンロー」主義是れなり。蓋しモンロー主義の起るや、其の起るの日に起るに非らずして、遠く是れが根源を獨立の布告、告別の辭中に有せり。而して其の間あるは「アダムス」の口に上り、あるは「ウヤヲーソン」の筆に現れたりと雖も、公然該主義の宣告を下したるものは實に「モンロー」其の人なり。是れ後世人之れを呼んで「モンロー」主義と稱する所以なり。抑も氏をして、此の主義を宣告するに至らしめたるは如何なる動機によるか。即ち露帝の宣詔並に神聖同盟是れなり。請ふ余をして其の由來を述べしめよ。一千八百二十一年露國皇帝は一個の詔敕を發して、「ピーリング」海峽より、北緯五十一度に渉れる西北一帶の亞米利加海岸は、露帝に隷屬するが故に、爾今同沿岸を去る一百海哩以內に於て、外國國民の商業航海漁獵を行ふことを嚴禁するの旨を布告せり。然れども固是れ專斷無法の處置なれば、從來同沿岸に一種特別の利害得失を有する英米兩國政府の反對に遭ひしを以て、露國政府は忽ち方針を變じて二國の要求に應じ、是れが解決をば三國協定委員に一任するに到れり。是より先き米國政府は、隣境南米新共和國に對する外交方針として歐洲諸國の(西班牙を除きて)彼等が內政外交に干涉せざる限り、超然局外中立の態度を採りて、時局傍觀の位地に立ちたれども米國元老政治家連は、若し西班牙以外の一國、若くば數國相連合して干涉の手を亞米利加大陸に伸ばさんとするか、其の時こそ干難萬艱を排して大陸保全の途を講ずべき覺悟を要することを主張したりき。然るに今や露帝の詔敕を聞く米國たるもの豈に何ぞ安閑默許するを得んや。即ち國務卿「クインシ。アダムス」は、時の駐英米國公使「ラッシ」幷に駐露米國公使「マンズルトン」に命を發して、談判交涉の任に當らしむると共に、一千八百二十三年六月二十八日內閣會議の席上に於て同問題の話題に上るや、熱心露帝詔敕の排斥を企て、越えて七月十七日華盛頓駐箚露國公使「チュール」伯に告ぐるに、「吾人は亞米利加大陸に於て露國が當に建設せんとする土地占領の權を爭ふと同時に、吾人は又亞米利加大陸の最早歐羅巴の新植民地として、その羈屬に甘んず可きものに非らずとの主義を取らざるべからず」との意を以てせり。於是乎、大統領「モンロー」は一方に於て時代の趨勢に鑑みると共に、一方に於て「アダムス」の主張に同意し、同年十二月二日議會に向つて一の教書を送れり。其の中に。

斷に自由獨立の狀態を保持せる亞米利加大陸が、將來決して歐洲諸國の植民地たるべき性質に非らずとの主義を宣告する所以のものは、益し是等に關する利益問題、幷に處方問題に就きて議論最中なる今日を以て、北米合衆國が當然享有すべき利益と權利上、尤も適切なる時機と認定すればなり、

とあり。此の言こそ、「モンロー」が陰に亞米利加大陸を見掛けて將來植民を企て、土地を割領せんとする歐洲諸國の侵畧的野心の上に一大鐵槌を加へたるものにして實に吾人が愉快となす所なり。蓋し亞米利加は、亞米利加人に由つて支配すべく、何ぞ局外者より無用の差圖を受けんやとは、夙に彼等の主唱する所にして、而して今や其の主張を天下に表白したるものといふべし。而して「モンロー」は同日再び左の教書を發して當時歐洲政界の一大怪物たる神聖同盟に對して大に備ふる所ありたり。

吾人は西半球の何れの方面たるを問はず、苟も歐洲諸國が專制的政治組織を、此地に移植せんとするの計畫をば、吾人の幸福安寧に有害にして且つ危險なるものと認む。吾人が斯く宣告する所以のものは、吾人は彼等と國際關係の上に於て誠實親交の存在するに由ればなり。但し從來既に歐洲諸國に屬せる植民地又は領地に關しては、吾人は何等の干渉を成さざる可し。然れども歐羅巴は既に天下に自由獨立を布告して、民政自治の體面を維持すると共に、米國政府より公然獨立の承認を與へられたる、各南米政府に對して、國運の發展を遮り、且つ制壓せんとの目的の下に、無用の干渉を行はんとするが如きことあらば、吾人は其の口實の如何と、要求の大小とに拘はらず、須らく是等の干渉を目して北米合衆國に對する不親の表情と認めざるを得ず。

と。洵々數千言專制君主政治の亞米利加大陸に於ける無用にして、有害なるを論じ、全然歐羅巴より同政治主義の輸入を嚴禁するの主旨を發表するに到れり。抑も神聖同盟は一千八百十五年九月二十六日露西亞墺地利及び普魯西の帝王等が、佛國巴里に會合して玆に個人的同盟を組織せるに起る。而して其の目的とする所は彼等は帝王神權説の口實の下に、當時恰も革命の餘波を享けて、歐洲大陸を風靡せんとする民權自由思想の發達を防ぎ、代議政體を破壞して、專制政治の保全を計らんとするものにて、數年後佛蘭西帝もまた之に加盟せり。而かも英國政府は同盟加入の勸誘を受けたれども、宣告趣旨の、英國が自由代議政體と一致せずとて之に應ぜず、却て反對攻擊の態度を執りたり。然れども、爾來同盟は益々驕虎の勢を逞うして、當時西班牙に於ける革命政府の轉覆を計り一千八百二十二年十月「ベロナ」に集會を開き、秘密條約を訂結して以て、飽まで民政政治の廢絶を企て、併せて印刷出版の自由をも束縛せんとの決議をなすに至れり。而かも彼等はこの活動範圍を、單に歐羅巴のみに止めず、猶ほ進んで南米西領共和國にも帝王神權の福音を傳播せんとするの計畫をなすに到れり。是に於てか、由來西半球に於ける地理上の利害得失を一にせる北米合衆國は拱手傍觀するに堪へず遂に「モンロー」をして決然教書を發せしめたる所以なり。蓋し民政自治は米人が政治的根本主義にして、民政以外政治無く、自治以外獨立無き彼等の熱心に、神聖同盟を排して極力共和政治の開展を計りたるは、北米外交上の一大成功として謳歌すべく、内外政治家の一驚する所なれども、若しこの時に當りて、英國が終始「モンロー」内閣の對外政策を贊助するなからんか、建國日尚淺く、獨立の基礎未だ堅からざる北米政府の、果して是れが勵行を世界に告白するの勇氣を生じ得たるや、否や我輩の疑を挾む所なり。

思ふに最初神聖同盟が、南米諸邦に對して政治上の一大野心を抱き、共和政治に代ふるに君主政體を以てせんとするの陰謀を發見し、早くも是れを未發に防遏せんとして、竊に其の意を米國政府に通じたるは、英名天下に隱れなき英國の大外交家「カンニング」にして而して氏が同主義の發案者なることは、米國上院議員「チャールス、サムナー」等の憚なく明言する所なるが、果して事實なりや否や、事外交の秘密に屬するを以て、我輩局外者の窺ひ知る能はざる事なれども、從來動もすれば神聖同盟に同情を表して、陰に加盟の意を漏らさんとしたる、時の英國外務大臣「カストレリー」の去つて、一度び「カンニング」氏其の椅子に就くや、決然輿論を代用して神聖同盟に對する、英國政府の態度を一變せられたるは爭ふ可からざるの事實なり。卽ち一千八百二十三年夏佛國政府は、神聖同盟を代表して、君主「フアーヂナンド」七世の爲めに、帝政回復の目的を以て西班牙に侵入すると全時に、英國政府は、神聖同盟より西領南米諸邦に於ける革命運動中止に關する列國々際會議を開かんとすとの覺書を請取るや否や、聰明大膽なるカ氏と、時の駐英米國公使リチャード、ラッシに告ぐるに、此際英米兩國が協同提携、以て同盟に當るの敢て難事に非らざるを以てせり。今其の提案の內容如何を視るに、英國政府は此の時に當りて西班牙政府が南米殖民地の回復を計らんとするは、最も無謀の所爲にして、早晩彼等の獨立が歐洲各國より承認せらるるに至るべきを以て、苟も西班牙政府にして南米諸國と妥協的解決を欲せんか、英國政府は獨り是れが和解に同意するのみならず、又た南米大陸に於て、土地を占領するが如き政治的野心の無きと共に、歐州の諸國をして南米の地に手を伸ばすことを許さゞるべし、云々とあり。而かも米國公使ラッシが、細心謹厚なる容易に是れが諾否の如何を明答せず、直に旨を本國政府に通じて、意嚮を確めけり。是に於て大統領モンローは「ジャファーソン」「マジソン」「アダムス」「カルフーン」等の元勳諸老を一堂に會して評論したるが、議論百出容易に決せず、遂に多數を以て「アダムス」の議論を用ふるに至り、之が爲めに英米協同の議は成立せざりき。是れ英國政府は猶ほ未た南米諸國の獨立を承認せざれば、民權自治を以て立憲治國の大本となせる北米合衆國に採りて、自から利害得失を異にするの恐れ有るが故に、米國政府は先づ英國政府が南米諸邦の獨立承認を與へたる後、始めて連合反對の擧に出てんとするの意に外ならず。米國の立場としては敢て無理ならぬ要求なれども、カンニング氏の其の意に從はざる結果、終に交涉中止の止むを得ざるに到りしなり。抑も氏は一面米國政府と協同提携して、神聖同盟の南米共和國に對する壓迫干涉を排斥じつゝ一面猶ほ未た彼等に向つて自由獨立の承認を與へずとは、果して如何なる理由によるか。謂ふまでもなく、彼れは是れに由りて南米各地に於ける、歐洲大陸諸國の商賣貿易上の獨占的市場を奪ふて、以て英國商業の發展を促し、門戸の開放を行ふと共に、政治上局外中立を守りて、暫時革命運動の雲行を眺めつゝ、時來らば一大飛躍を試みんとしたるや明なり。偶々英國政府の看破する所となりて、提案不調に終はりたれども、是れに由りて如何に米國政府をして覺醒一番、以て直に對外國是の大

主義を確立せざる可からずとの一大動機を作らしめ、大統領「モンロー」氏をして早急彼の教書を議會に送致せしめたるや疑なし。固より全國內治外交上の根本主義としては、既に華盛頓の告別の辭あり、又た「カンニング」氏の提案に先んずること約六個月以前に、米國政府の駐西米國公使に訓令せる所ありたれば、或は直ちに氏を目して「サムナー」一派の解するが如く、「モンロー」主義の發案者なりと謂ふ可からずと雖も、而かも氏が提案に由りて全主義發表の期を早め、嶄新政治家の心中に一種無量の感慨を與へたることは、我輩の信して疑はざる所なり。

之を要するに、「モンロー」主義は第一今後歐羅巴の南米大陸に於ける殖民政略を否認し、第二に神聖同盟の政治主義を亞米利加に輸入し、以て仝地の內政外交に干涉せんとする事の北米合衆國に對して不親の行爲と認定すとの趣意にして、最初「モンロー」氏は是等の主旨を一括して外交文書となし駐外米國公使をして神聖同盟の各政府に通知せしめんと企てたれども、而かも一變尋常一樣の教書として發表したる所以のものは、彼れは、單に其の主義の同盟諸國に限らず、進んで一般歐羅巴各國に適用せられんことを期したるが爲めに外ならず。是れ尤も適切なる處置にして、一旦仝教書の議會に現はるゝや、國會議員等は一大喝采を以て之を歡迎したるが、中にも智勇才辯雙びなきダニエル、ウエブスターの如きは、是れを目して米國史上の花なり、光榮なりとて、賞讃措く所を知らざりき。又之れを外にしては英國政界の驍將「カンニング」「ブローハム」卿等を始め倫敦タイムスの如き、最早是れに由つて南米問題を解決せりとまで、熱心口を極めて其の主意の獨り時代の精神に叶ふのみならず、南米諸國の獨立自由を永遠無窮に擔保するものとなせり。以て如何に「モンロー」教書の、內外政界を震動して、米國對外政策の上に一大光彩を放ちたるかを知るに足るべし。

既に「モンロー」主義の由來するところを說きたれば吾人は更に進んで、是れが適用如何を一言せん。彼の南米諸國の獨立の基礎漸く固く、民政共和の蹟稍々觀る可きもののあるに到るや、一時東西兩大陸を攪亂したる神聖同盟の功名野心も、憐れ一場の夢物語となつて、最早南米大陸に歐羅巴的專制政體の輸入の跡を絕てり是れ取りも直さず「モンロー」主義の反響にして、而して是れが爲めに我輩の所謂第二の「モンロー」主義は一先づ其の目的を遂して一段落を告ぐるに到りたるなり。然れども若し夫れ所謂第一の主義に到つては、活動範圍いよ〳〵廣く、由來米國外交の眞髓を左右し、以て今日に及べる者にして、一々其の千變萬化の出來事を敍すれば殆ど際限無きが故に、今其の一二を記さんに、即ち一千八百二十五年西班牙政府が、玖馬島を英國又は佛國に讓與せんとするの企圖あるや、時の米國々務卿ヘンリー、クレー氏は、直ちに駐西米國公使をして反對の抗議を申込ましめたるを始めとして、次に仝年南米に於ける民權自由思想の元祖たり、且つ愛國志士の模型たる「ボリバー」は、神聖同盟に對する反對手段として、南北兩米海陸軍同盟の目的を以て、巴那馬會議を開きけるに、米國また贊同の意を表したるが如き、或は一千八百四十八年「ユカタン」事件に續きて、一千八百五十年有名なる「ク

レトン、パルフォート」條約の下に巴那馬地狹の局外中立地たるを誓ひたるが如き、何れも「モンロー」主義を楯として、只管全米土保全の途を講ぜるものに外ならず。中にも尤も著しく全主義を適用して、是れが爲めに、一時は英米干戈を交へんとまで歐洲外交界を騷がしたるは、彼の所謂一千八百九十五年に於ける「ベネジュイラ」境界紛擾問題にして、全問題は一千八百四十四年以來兩國政府互に見解を異にして、圓滿なる解決を見るなく、漸く一千八百七十六年に到りて、「ベネジュイラ」政府は、前年「アバーデン」卿の指定に成れる境界線に同意したれども、英國外相「グレンビン」氏は更に顧る所なく、益々境界區域を西方に延長せんとするに到りければ、ベ國は主權の侵害なりとて北米政府の援助を求めんとせり、於是乎米國々務卿「チルネー」氏は兩國仲裁の勞を採らんとして、一千八百九十五年七月廿日倫敦駐在米國大使「ベヤード」を通じて、英國政府は此際全問題を一括仲裁協議に附托するの意有りや否やを確めけるに、首相「サリスベリ」卿は、全然不同意を表して、而して是れが反對理由として「モンロー」主義は、未だ國際公法上獨立國の自由行爲を掣肘する力を有せず、況んや本問題に關しては、米國は何等直接利害の關係を有せざるに於てをやと縷々數千言、敢て讓歩の意なきに、最早形勢を如何ともすること能はず全年十二月十七日大統領「クリーブランド」は議會に英國政府の返書を示すと、全時に特別教書を送りて曰く、若し歐洲の一國が境界延長の爲めに興邦共和國の精神意志に反して、土地横領の擧に出でんとするか、是れ大統領「モンロー」が所謂吾人が平和と安寧との爲めに一大害物なりと。直ちに議會に勸むるに調査委員の設立を以てし而してまた曰はく、若し他日調査の結果にして、現下爭點地なる境界線の「ベネジュイラ」國に專屬するならんには、是れ正に主權の侵害なり、領土の蠶食なり權利の毀損なるが故に、米國々民の義務として、極力其の方法手段の如何に拘はらず、一擧武力に由つて主張の貫徹に務めざるべからずと、痛快一番英國政府を罵倒し去つて大に米國政府の決心を示せり。於是乎英國々民の憤慨すること一方ならず、爲めに兩國の天地怪雲暗澹として蜚語百出世界の平和を破ぶらんとしたれども、其後誠實誠意なる米國仲裁委員の斡旋に由りて、英國政府の讓歩する所となり、目出度無事平穩の局を結びたるの一事は今猶ほ吾人の記憶に新なる所なり而かも虛心坦懷是れを英國側より觀ずれば、唯是れ一場の境界問題たるに留まつて、敢て米國政府の關係するを要せず、宜しく祖先の遺訓たる局外中立の下に尋常普通の外交手段を取る可き筈なるに、斯かる國際定規を逸したる激語を放ちて、極端なる武力的干涉を試みんとしたるは、畢竟彼等は徹頭徹尾亞米利加大陸は同胞米人の支配に屬するものなれば何ぞ國外國民の來りて漫りに殖民を企て、權勢を扶植するを許さんやと、一から萬事「モンロー」主義を振り廻はして、世界の外交界に勇絶快絶の怪腕を振はんとしたるもの也。而かも是れ果して全主義の眞意なりや、否や、彼等は今や「モンロー」主義は公然國際公法上の一大原則として、既に業に文明諸國の承認する所となれりとて、一千八百九十九年第一回海牙國際平和會議に於て、米國政府代表委員の一人たる「ホールス」氏が

提出せる決議案の通過を擧げたる次に、一千九百〇一年十二月二日駐米獨逸大使が、「ベネヂユイラ國が契約違反に對する强制手段を取らんとする前に當りて、米國政府に送れる公文書中に獨逸政府は如何なる事情の下に在りても、毛頭仝國土地占有の野心を有せずとの一文を揷じて、最早仝主義は動かすべからざる國際通義の一大法則にても有るかの如く、盛んに吹聽すると仝時に、從來「モンロー」主義なる文字の未だ曾て仝國公文書中に記載せられざりしにも拘はらず、大統領「ルーズベルト」氏は、一千九百〇一年十二月三日の敎書中に、公然同文字を記入して一段明快なる解釋を加へんとしたるが如き異例を作りて、熱心權勢扶植の術を講ずれども果して彼等が想像するが如く、文明諸國の公認する所となりたるや、否や是れ吾人最も知らんと欲する所なり。

つらく〵此の時の發案者たる「モンロー」氏等の精神如何を案ずるに、氏は最初是れを以て、唯た神聖同盟に對する當座的對外政策と定めたる迄にて、南米對歐羅巴に係る國際交涉問題に關しては、一點局外の干涉を加ふるの意無かりしものにて、武力に訴へて以て干涉の實を擧げんとするが如きは、彼の更に夢想せざりし所なり。然る所以は現に一千八百四十八年「ユタカン」問題に關して、米國上院は當に兵を墨西古國境に送つて、一時的軍隊占領の議を可決せんとするや、曾て「モンロー」內閣の一員たりし剛骨峻嚴なる「カルフーン」氏の如きは、兵力使用は「モンロー」主義の本意に非らずとて、極力反對せるに徴するも明らかなり。されば八十年後の今日米國政治家等の解釋するが如き、干涉、兵力、の「モンロー」主義に含有せざりしは、明白の事實にして、敢て疑ふを要せざれども、時勢の進步は何時しか「モンロー」主義の精神の新陳代謝を促して、今や好意的仲裁交涉に代ふるに、干涉を以てし、武力を用ゐんとして、熱心海陸軍備を擴張して、沿岸到る所に城塞を築き守兵を送りて盛んに武裝に怠りなきと仝時に、南米諸國を視ること、宛然日本の韓國に臨み、英國の埃太に於けるが如く、終始南米諸國を屬領地視して、對外交涉の上に無形の干涉を行はんとせり。從來南米諸國は多年歐洲國民と商業貿易の取引關係上、交通頻繁、交情また親善なる結果として、歐洲國民の彼等の爲めに、あるは公債に、あるは私債に貸金するもの巨額に上るの常なるに、彼等の習慣として一度返濟期限の目前に迫るや、各種の口實を設けて、容易く債務の責を果さず、於是乎債權者たる歐洲政府は、人を送り軍艦を派して償金返濟の約を促さんとするや、米國政府は起ち現れ來りて仲裁和合の途を披かんとするに至る、是れ毎度の沙汰にして、之を仲裁和解と謂へば一見頗る好意的態度の如くに聞ゆれども、而かも是れが爲めに一方債權者の要求を延引せしむると共に、一方には又た由來活動自活の精神に乏しき南米諸國をして、徒らに北米合衆國に依賴するの念を起さしむるの結果識らず、知らず、彼等が國際道德の觀念を薄弱ならしめつゝあるは夙に世の識者の憂慮する所にして、今日彼等は斯かる天與の地利を備へながら猶ほ未だ文明列强の仲間入りする能はずとは、職として是れに依らずんばあらざるなり。

惟ふに米國の外交方針は、彼の一千八百九十八年七月七日の布哇合併

に關れる以前までは、終始國父華盛頓の遺訓を奉じて、獨立自尊局外中立の態度を執りたれども、一度び全島を併呑するや、茲に帝國主義の甘味を覺えて、爾來對外方針の上に一大動搖を醸生したるが、中にも尤も甚しく祖先傳來の美習を脱して、霹靂一聲破天荒の帝國主義を實現するに到りたるは、謂ふまでもなく、彼の西米戰爭なり。彼の玖島の革命戰爭の際偶々「ハバナ」灣頭に碇泊せる米艦「メーン」の暴發せるを奇貨として、兩國戰端を開くや、連戰數閲月遂に敗後の西班牙をして玖島を棄て、不律濱諸島を割讓するの止むなきに到らしめたる米國政府は、この時より愈々一變し、當時の大統領「マッキンレー」氏は帝國主義の開山とまで謡はれ國民歡呼の裡に史上永く偉人の名を留むると謂ふに到つては、誰か今昔無限の感に打たれざるもの有らんや。蓋し氏は米國對外主旨を一變して武裝的干渉の帝國主義に於ける、彼の車の兩輪の如く、相離る可からずとの主義を確信應用したる人にして、彼れが後繼者たる前大統領「ルーズベルト」氏も、亦た故人の遺志を繼ぎて一千九百〇四年「コロンビヤ」共和國に武力的干渉を行つて、一小巴那馬の獨立を助けたるなり。之を要じ來れば米國外交の精神は自由より一轉して干渉となり再轉して戰爭となりたるものと云ふべし。

而かも彼等の勝手氣儘なる口を極めて、是れ「モンロー」主義なり、「アメリカンズム」なりとて、天下に辯明する所あれども、所謂從來の「モンロー」主義には一點干渉の意味無く、又た一片武力の精神あるを認めず、況んや大陸以外の領土を征服して殖民を作り、守兵を養ふに於てをや、之れ取りも直さず「モンロー」氏立案の精神に背くものにして、若し今日彼等が稱するが如き「モンロー」主義なるもの丶存在せりとせんか、是れ干渉主義なり戰爭主義なり、而かも戰爭と干渉とは米國建國以來の一大禁物にして、而して「モンロー」主義又た是れに外ならず、是の故に今や世人往々「モンロー」主義の存在を疑ふ豈に又た所以なしとせんや。現に一昨々年冬米國紐育「コロンビヤ」大學より第一回國際交換講師として、伯林大學に派遣せられたる、今大學政治科教頭「バーゼス」氏の如き、碩學鴻儒の士にてすら、折柄臨席せる獨乙皇帝の目前に於て、「モンロー」主義は過去の夢なり、最早既に其の存在を認めずと決論して、一時米國政界の物議を招きたることあるなど、偶々以て「モンロー」主義の頽廢を證明して餘りあるを致せり。今や眞正の「モンロー」主義は其の跡を沒して、干渉戰爭てふ同音異容の「モンロー」主義は、米國政治家の頭腦を支配して、茲に祖先の美徳を傷け、美風を破ぶるに到りたること、吾人は彼等の爲めに千萬遺憾に思ふ所なり。

海外消息

六月二十九日巴理より

無念庵

●謹啓●● 此程の革命騷動にて、サロニカに配所の月を見る事と相成

償土耳古先帝アブヅル、ハミッド陛下は、其後住み慣れぬアラチニの宮殿に、極めて寂ひしき生涯を送りつゝありとの事に候が、近頃は殊に儲ぎ給へて、數多き女御達をも召させられず、獨り皇子エフエンヂ殿下の母をのみ待らせて、朝夕エミル灣に面せる窓に打倚らせ給ひ物もあまり得云はず、誠に哀れなる有様と相成候由、先帝と最も交友厚かりしは獨帝陛下にして、今日までに東方諸問題に於て獨帝が受けたる利益は敢て尠少ならざる筈なるも、先帝一度（ひとたび）幽居の身ならせ給へてよりは、獨帝の態度前とは打つて變り、潜かに先帝の最も憎み給へる青年土耳古黨の有力者に疑を通じて、腹心の老臣ゴルツ將軍を新帝モハメッド五世陛下の政府に仕官せしめたり、而してゴルツ將軍仕官の勅許去月下旬を以て發表せられたるやに聞き及び候故、今後獨帝の勢力は以前に倍せるものと相成るべく如何に私情に拘泥すべからざるものとは云へ、獨帝の輕薄老猾はあまりの事にて今更ながら呆れ申し候。因にいふ、青年土耳古黨中の軍人側にはゴルツ將軍の教を受けたる者最も勢力を有し居れば、今後の成行は隨分面白き事と存ぜられ候。

●阿富汗人又々印度に侵入せん 昨秋多數の阿富汗人が印度の國境に侵入して、猖獗を逞ふし、英國が阿富汗王の擧動に疑念を抱きて、少しく不穩の形勢となりたる事ありしが、此程の印度シムラ通信に依れば、阿富汗斯の暴民等は波斯商人の手を經て近來頻に武器を密輸入しつゝある由、何れ何等かの騒動を引起す事と存ぜられ候。

●露國の排英派 近來露國の政治家中に動もすれば現内閣の不信任を唱ふる者ある事は、既に前號に於て述べたる處なるが、それらの關係より露國政府の財政方針に惡影響を及す事少なからず、彼等は露國の外交は外相イズヴォルスキー氏が常に英國の意を迎へつゝあるを以て、事毎に英國に左右せらるゝ傾向ありとて之を批難し、且つ波斯問題に對しても、英露協商は徒に露國の手足を束縛するの外何等の効力をも有せず、露國は常に波斯に於ける秩序紊亂の爲に、莫大なる損害を被りつゝあるも、それすら倍償の餘地なく、徒に英國の意の儘となり居るは遺憾なりと論じ、露國は此際須く、獨帝の希望を容れ獨露和睦を承諾すべしと主張致し居り候。

▲是等の頑冥なる分子は敢て齒牙にかくるに足る者にはあらずと雖も、英露佛三國の新關係の爲には甚だ好ましからざる事に候。

●露獨兩帝の會見 本月上旬露獨の會見近きにありとの報は、此際少しく外交界の單調を破りたるやうに見受けられ候い媒介者は例の外相イズヴォルスキー氏にして、獨帝自ら芬蘭の一島に出馬し、此處に露帝と落合ふ手筈なりとの事なるが、獨逸宰相ビユロー公の機關新聞は兩帝會見に關し、其社説に於て、獨逸は露國をして其佛英兩國に對する態度に影響を及ぼさしむるが如き希望を毫釐も有せず、露國は獨逸と隣交の情を毀

めたりとて、決して佛英二國に對する其義務を害ふが如き事あるべからず、此の意味に於て獨露兩帝の會見は頗る好結果を生ずべしと論じたり。

▲又露國半官報ノウオエ、ウレミヤ紙は、露國は獨逸が日露戰爭の際、最も熱心ある中心國となりたる事を忘るべからず、殊に現下の形勢より云ふも、一朝英獨衝突起るに際せば、露國は自國の利益より見て、嚴正中立を守らざるべからずと宣言したり。

▲以上の如き兩國政府側の辯明の下に愈々兩帝の會見は、六月十七日フヰルカ島の附近まで出迎ひたる露國帝室船スタンダード號に於て實現せられ候。

▲兩帝會見には露國首相ストリイフヰン伯外相イズオルスキー氏、獨逸外相シエン氏列席し、饗宴後別室に於て外交問題に關し長時間の協議を遂げたり、其協議の内容に就ては兩國政府共に沈默を守り居るも、露國人民側の新聞紙の報ずる處に依れば、獨逸は其國の外交が塊地利のボスニヤ、ヘルツエゴヰナ二州合併に際し、露國の爲に極めて利益ある政畧を取りたる事を露國政府に告げ、之を恩に着せて交換的に露國從來の外交を獨逸に有利なるやうに變ぜしめんとしたるも、流石に効を奏せずに終りたりとの事に候。

▲之れ固より一地方新聞の言論にして、敢て信を措くに足るものにあらずと雖も、以上述べ來りたる處に依れば、獨逸が此際何等かの新關係を露國との間に結び置かんとするの意ある事は疑ふ餘地なしと思はれ候。

●露國代議士の英國觀光團　露國國民議會の議員連は、英國の内地視察かたがた英國の人に接觸せん希望を以て、英國に行かれたるが英國下院は之が爲に熱誠をこめたる招待會を開き、席上藏相アスキス氏の演説あり、アスキス氏は、英露の親交が既に政治的危險の時期を經過したる事を公言したりしが、露國代議士ホミアコフ氏は觀光團を代表して、露國々民は堅忍不拔以て能く財政軍事上の損傷を醫せざるべからずと論じ、終に臨て前首相バルフオア氏は憲法政治の利益と困難と題する一場の講演を爲したり。バルフオアの講演は最も深き感興を與へたる由に候。

●佛國海軍の醜態　佛國議會の海軍調査會は、此程略調査を結了したるが、其結果驚くべき佛國海軍の醜態を暴露したり、即ち其報告に依るに、佛國は過去十年間に一億二千萬磅を海軍に支出せるにも拘はらず、之より少額を以て成りたる獨逸海軍に及ばず、新戰鬪艦用の大砲裝置は戰艦竣工後數年を經て、後猶準備成らず、加ふるに、現在の大砲は不完全にて實際の用に立つべくもあらず、而して地中海の貯藏所に於ては是等無用の大砲を貯藏し居るのみならず、更に目下之を盛んに製造しつゝあり、又海軍費として支出せられたるものが、實際に於て、他の費途、例へば殖民地經營費に、流用せられ居る事をも發見せられたり。

▲以上調査會の報告は佛國の朝野に少なからぬ打擊を與へたり。佛國海軍が其實力に於て他の關係列國に及ばざる事遠しとの風說は之に依りて

會々確實にせられたるが如き事なきを得ず、巴理の諸新聞紙中には早くも例の佛國海軍悲觀說を唱ふるに至り候。即ち佛國海軍の悲觀論は先年非戰海軍少將某氏に依りて極めて詳細に說かれたる事あり、之を今回の調査報告に照らして見るに、佛國の海軍が政府側の言ふが如き有力なる者にあらざる事だけは、信ずる者の尠にあらざるべしと言ふにあり、されど威信ある新聞紙は極めて愼重の態度を取りつゝあり。政府は目下之を本會議に於て有耶無耶の間に葬り去らんと盡力し居るものゝ如くに候。

●獨逸宰相と豫算案　英獨海軍擴張競爭の結果、豫算に大缺點を生じたる爲め、ビユロウ公は新財源として遺產相續税、火災保險税、諸印紙税等を擧げ、之に依りて、年々約七百萬磅の增收を見る計畫を立てたるか、公の之に關する說明演說は甚だしく冷淡にして、議會の大多數を失望せしめたり。公は各政黨を確かに攻擊し、自己は何れの政黨の援助をも得可く、極左黨と雖も、獨斷頑冥ならざる限りは、自己を助くるに吝ならざるべしと述べしのみにて、豫算の內容、事茲に至りたる理由等に關しては何等熱誠ある說明をなさず、議員は少しく憤激の面色にて退場せり。

▲宰相の恐嚇　續いて獨逸議會は之に就き討議を開始せしが、公は新税の大部分が資產ある階級の負擔すべきものなる事を主張し、遺產相續税を固持し、「若し自由保守兩黨か妄に黨派的根性に驅られて、予の立案せらる新說に反對するに於ては、予は現職を去るべしと恐嚇せり。

▲遺產相續税の否決　新税案中の主眼たる遺產相續税に關しては獨逸の朝野を擧げて贊否の聲喧々たる有樣なりしが、遂に中央黨及保守黨は相應して之を否決する事に決し、六月二十三日の議場に於て、百八十七に對する百九十五の多數を以て、之を否決せり。

▲議會の休會　議會は遺產相續税及び其他二三を否決したる後、一週間の休會を宣しなり、之れ政府が其間に幾多の議案を否決の運命より救ひ出さん魂膽に出てたるものなるは申すまでもなき處なるが、大勢既にビユロウ公を去りたるを以て、如何ともする能はず、獨逸宰相は遂に辭職の決意を確くせり、宰相が議會と戰ひ、之に敗れて辭職するが如きは、實に獨逸歷史に未曾有の事に候。

●印度改革と回教徒　印度に於ける回教徒は殆ど印度人の三分の一を占め居り、又最も智識ある分子なるを以て、英政府の印度改革には最難物の一と數へらるゝ處に候が、今回の改革沙汰に於て印度政廳は大に苦慮し居るものゝ如し。印度政廳は其主宰の下に立法參事會なる者を新設し、之に依りて改革實施案を協定せん計畫なりしが、參事會の會員が殆と印度人のみに依りて成る傾きあるを見て、回教徒は喜ばず、必ずや回教に不利なる立案を見るべしとの杞憂より、彼等は英本國及びカルカッタに於て最も激烈なる運動を開始したる由に候。今回の擧は頗る當を得たる改革方法なるを以て、回教徒の此の紛議をさへ片付くれば、今度こそは滿足なる結果を得べしと申し居り候。

●英國と英領殖民地　英獨海軍の競爭は種々方面に影響を及しつゝあるが、英國も其豫算案の下院多數の反對に遭つて目下行惱みの姿にある有樣なるが、濠州聯邦にては、母國の窮境見るに忍びずとなし、之を援助せんが爲め盛大なる運動を起したる由近著の電報に見えたりしが、英國政府は既に戰鬪艦一隻寄附の申込を受け、之を受納したりとの電報、巴里の某紙に見え候。

●波斯の新撰擧　波斯皇帝が財政窮乏其他の原因に依りて、又昔の如く頑冥ならざるに至りたる事は前號にて述べたるが、外、英露兩國の壓力は次第に其頭上に加はり、内にありては、國民憲政の聲頻に至るを以て、遂に從來の主張を破棄し、選擧法中より財產資格の制限を撤去し、階級を無視して人口を根底とする新選擧法を裁可したり。之れ實に波斯の一大進步とも云ふべき事に候。

●クリヰト問題再然か　嘗て歐州の平和を威嚇したるクリヰト問題は、再び六ケしくなり來りたり。島民は萬一の際に備へん所存か、軍器を購入し、佛國は軍隊を駐屯せしめて、土耳古對クリヰトの成行を見つゝあり、土耳古は如何なる事ありともクリヰト島は手離すまじき決心を以て、之に對し居るものの如く、土耳古の代議院は萬場異議なく最後まで其意志の遂行に全力を悉くべしと議決したり。而して外相リフアト、ヘアシヤ氏は列國に對し政府の決心を通牒したる由に候へば、如何にクリヰト島民が叫べばとて、到底無駄なるべしと某外交通は申し居り候。

●伊太利の軍備擴張　列強中海軍の最も劣れる伊太利は、近時殖民及び商業政策上、海軍擴張の急務に迫られ、愈々本年より六ヶ年に一億五千万リラを臨時に支出する案を立て、議會の協贊を經たる後、藏相は他の金を流用して、之を三ヶ年間に支出し、從來の一八一〇年より一九一二年に至る十三年繼續海軍擴張案の一ヶ年分の支出額たる八〇六六万リラに新支出額の三四六六萬を加へて、三年間にドレッドノート四隻此價格二億二千萬を建造し、其殘餘の四千一百万リラを以て造船所の建築及び其他の費途に充てる筈なりとの事に候。



現代人物評論（十九）

小村外相論

△外相小村

三宅雄二郎

運、鈍、根で出世が出來たと言ふものが有れば、小村伯と林伯とは慥にその例に入るであらう。二十年前何人もその今日あるを想はなかつた、小村は飜譯局に居て齋藤、鳩山等に馬鹿にされて居た、林は十年大書記官であつて到底勅任に爲れぬと想はれた。所が當時笑つたものは現に此二人より遙に下の位置に居る。二人は互に性格を異にせるが、孰れも大に運に惠まれた、實に運の好きものと言はねばならぬ、顧みたら自分でも少しく不思議に思はれる位であらう。が世の中には時々さういふ事がある、人は誰でも何れ丈か運に因らぬとは言はれぬ、唯だ二人が著しいのである。二人は又慥に鈍である、卑い位置で平氣で有つた、頓着しなかつた、所謂才物なるものから見れば鈍の此上も無い者であつた。が才物の彼方此方目移りして飛び廻る間彼等は鈍なる儘に仕事をして居つた、次第に熟練して來た、或る事に精通し、場合に依て人に優つた能が現はれる樣になつた。その上二人は又慥に根が有る、必要とあれば隨分勉強して仕事をする方である。先づ運、鈍、根を備へたものと云ふべきである。が二人を比べると、運に於ては互に相讓らぬが、小村伯はより多く鈍で、より多く根が有る、林伯は可なり調法な方で種々な官を經廻つた、小村にはそれが無い、それ丈一つ事に通じて居る、又根に於ては林は時を見計つて緩漫に流れ

るが、小村は何うかして結果を見やうと勉める、其邊が違ふ。

併し運、鈍、根の外に認むべきものが無いても無い、小村伯は普通の同等官の者に比して膽氣が有る、性分も有らうし、高利貸に苦められて錬り上げた所も有らうし、その他種々な事情も有らうが、割合に度胸が据つて居る、下らぬ餘計な事に心配せぬ、して又境遇の然らしむる處か、國家の上から打算して爲さざる可からずと信ずる所は必ず之を決行せうとする、身體は弱いが死ぬ迄職に盡さうとする、林伯自らが言つて居る、自分は日英同盟に與つたが、若し自分が外務大臣て有つたならば、從來の關係上、伊藤を初め種々の人に氣兼せねばならぬ、恐らく同盟を結ぶ事が出來なかつたろう、小村はさうで無い、思ふ存分遣れば宜いのである、それて成功したのであると。日英同盟は一朝一夕に成つたので無く、漸次熟し來つたのであるが、當時人多く迷つて居つた、處が小村は是非之を事實にせねばならぬと信じて飽く迄奔走した、井上の反對あるに拘らず、山縣を説き附ける事が出來た、若し彼の如く勉めなかつたならば同盟は早晩成るにしても稍々後れたであろう。日露談判の如き隨分困難なる位置に居つた、併し彼は彼の爲した外別に手段無きを信じて居つた、彼は非難に取捲かるゝを豫想して居た、多少自分の思つたとは違つた所があるにしても、ウイツテとの談判に於て殆んど爲す可き限りを爲した、外交の經驗に於て相手の上に出て居るし、難題に對しても威喝に對しても怯む所なく談じ附けた、傍に居る者の眼には此く迄の技倆ありとは思はなかつた程であつた、實に彼は爲すべき限を爲したのである、或は存命幾何も無い、貰土産に出來る丈の事をしやうと思つた處も有るてあろう。が死なかつた、歸つて非難を受けたが、殺されなかつた、轉じて病軀を驅つて北京に行つた、事情が込み入つて十分の解決を得なかつたが、此處でも出來る丈勉めたのである、世に一身を賭するといふ諺があるが、彼は屢次一身を賭して居る、此邊は林伯の暢氣な處と違つて居る。が誰にも一

長一短はある、體軀に於て小村と林とは正反對て有るが如く、性格及び能力に於ても殆んど亦然りてある。林は駐英大使として甚だ評判が宜く、さうして外務大臣となつて馨しい事が無かつた、小村は駐英大使としては甚だ評判が惡く、さうして外務大臣としてより以上に認められて居る。若し二人を合せて一人としたならば完全に近い外交官となるてあらう、別々ては各々片輪てある。

けれど小村は様々の事情で養成され來つたにしても、外交官として明治年間に秀でたものである。欠點は多いが兎に角一種の技倆は有る、して凡て國家の上に着眼する。人は概ね故陸奥伯を稱するが、他の事は姑らく措き、外交官としては小村は陸奥の上てある。小村は早く陸奥を稱して曰つた、陸奥は眼前の事を處するに妙を得て居る、が大事に臨むと明かて無い、實に三回大なる思ひ損ひをした、十年の役に薩摩は必ず勝つものと認めた、さうして誤つた、井上の條約改正案は必ず成るものと認めた、そうして誤つた、日清談判は必ず戰爭に爲らぬものと認めた、さうして誤つた、先づさういふ工合に大きな事て思ひ損ひをしたと、斯う言つたのは日清戰役の了つた當時てあつたが、小村自らは大事を見るに明なるものと信じて居つたらしい。目の届く處は限あるけれど、陸奥と幾分立場を異にして居る、陸奥は比較的多く自己の政略を交へて居る、小村も全く自己を思はぬて無からうが、外事に當つて國家を標準とする、他一切を顧みぬ、此點に於て陸奥より安全な所がある、陸奥ほど切れぬにしても安全てある。國家を思ふの切なる陛下の御思召の渥いも偶然て無いと察せられる。彼は運と鈍と根とて、一生外交官として貫き、稍成功に近いたのである。が外交を專門として其れ以外に何の力が無い、陸奥の如きは外交官たるよりも何かして總理大臣たらんとしたてあらう、さうして或は之に堪へたのである、小村は如何にするとも總理大臣に爲れぬ、器の大小能力の多寡を計つたならば、小村はさう宜い位置を占め得ぬかも知れぬが、其處は運と鈍と根とてあつて、目移りせず一事に專ら

てあつた丈、今日あるを致した、齋藤鳩山等は一寸眞似の出來ぬのである。併し今日あるといふとも、爵位ていふも僅に伯爵に過ぎぬ、之て終つたならば矢張り公侯爵の下てある、人爵て言ふならば成功といふに足らぬ、がその病軀を驅つて國家の爲に盡すといふ處は寧ろ稱揚を値する、尋常月給取りの及ぶ所て無い。(談話筆記校閲濟)

△小村壽太郎伯

富士見亭主人

小村壽太郎伯は外務大臣として少くも故陸奥宗光伯に匹敵するに足る、死後は必らず霞ヶ關へ銅像として永久に貽さるべき人だ。

伯は一代の奇材てある、猶ほ陸奥伯の如くてある、併し陸奥伯は一個の政事家として内政の方面にも少からず手腕を伸べた、機會さへ有たら總理大臣にも成り得たてあらう、一世の梟雄星亨や、今の政友會の竹中半兵衞たる岡崎邦輔氏などは、皆此の伯の門下生て、自由黨は多く此の伯に繰縱さるべき宿命を持て居た、が我が小村伯に至ては、外交以外に寸分の野心をも持たぬ、同じく一個の奇材てありながらも、外交方面にばかり之を用ゐたものだ、又自身も然か期待して居るらしい、從つて政事家としては二歩も三歩も故陸奥伯に讓らざるを得ぬけれど、外交家としては寧ろ故陸奥伯に優つて居る。

日露戰役以前から戰役時代へ掛けての我が外交は舞臺も廣大てあつた、筋道も込み入つて居た、而して此の間に處しての小村伯の腕前は實に見上げたものてあつた、規模宏大、用意周匝、網のやうに縱横に張り渡した其の籌梅など、流石に外交の妙を見たのてあつた、併しながら内政方面に掛けては頓と不用意千萬てあつて、竟に彼の馬鹿々々しく、而して慘鼻すべき日比谷の燒打事件をも生ずるに至つたのだ、是て小村伯と故陸奥伯との相違が明白に看取される。

小村伯が外務省に局長次官てあつた頃は、萬事豪放

て、僚屬の意見書や何かは、皺くちやに丸め込んで其のまゝ卓の引出しに入れて置て、幾日經ても頓着せぬ、僚屬が拙へ兼ねて催促に及ぶと、ウン左樣〳〵と紙屑籠たる引出の中から、件の書類を搜し出して、此れは斯く〳〵、彼れは然か〳〵と裁定し命令する、決裁恰かも流るゝが如して、不用意千萬のやうでも其れが一一肯綮を失はぬので、當時から外務省では伯の凡骨ならぬに推服して居るものが多かつた。

伯が米國公使として華盛頓に滯在中は、公使館に陣取つて、スチーヴンス氏などを顧問に兀々事務を執つたものだが、米國の國柄たら、地方分權だから少くもヒラデルヒア、紐育、ボストン、シカゴ、ニウオルレアン、サンフランシスコ等に網を張て置かねばならぬと言て、汎く此の方面にまで手を弘げて居た。其の規模の小ならぬとは之でも分る、伯は又米國育ちのハイカラでありそうであるけれど、實は中々の蠻カラであつた、米國公使館内では、縞の羽織か何かを引掛けて、日本酒でなければ飮まぬ、日本料理でなければ口にせぬといふ調子で、館内に女切れといつては唯だ皿洗ひに通勤する一洋婦人ばかりであつた、伯が紐育などへ出掛ける時は、流石に外交官たる氣前を見せて、毎夜寢臺を取替ゆるといつて、世界隨一の贅澤と評判されるホテルへ泊り込み、部屋代で一夜百弗も拂ひながら、三度〳〵日本料理屋を漁さり步いて、例の日本酒に日本食と濟ましたものである。

伯が外交家として世界に腕を示した始めは其の北京公使時代である、北京の外交團で當時伯を『廿日鼠』と綽名して、其の敏捷絶倫なのに舌を捲いたものだ、日本が東洋で列國間に重きを置かるゝに至つたのは、日清戰役でなくて寧ろ三十三年の團匪事變からである、我が軍隊の功の多いは勿論であるが、『廿日鼠』の巧みに拔け目なく立廻つたのも、亦實に與つて功あるとは爭はれぬ。

ポーツマスに於ける日露の媾和談判で、小村伯は世界の賞賛を博しつゝ、然かも日本國民多數の惡罵熱嘲を浴びつゝ歸朝したが、時の內閣の倒れ掛つたにも拘

らず、清廷との交渉を纏めねばならぬといふので、直ぐに又北京へ出掛けた、米國大陸の想像にも及ばぬ極暑を冒して、歸朝匆々未だ旅裝だも解かずに、今度は名にし負ふ烈寒を凌いで北清へ往く、王臣蹇々躬を顧みるに遑あらざるもので、日露戰役以前から、列國と折衝の任に當つて息も付けぬ間に又々是れだ、此の勞苦丈けても確かに伯爵陞任の功は十二分であらう、現に容易に人に許さぬ大浦男でさへ、當時の伯の忠節に感じて、之を語る毎に涙を以てするといふことである。

今更ポーツマスの當否や利害やを繰返すでもないが戰局を收拾するに、恐らくば是れ以上は無かろう、韓國に於ける宗主權を確立して、神功皇后以來列聖傳統の皇謨に始めて大團圓を付け得た、露國の勢力を極東から驅逐して、我れ之に代つて、世界交通の動脈線の一部なる南滿洲鐵道をも收めた、撫順炭鑛をも我が物とした、露國の權臣が皇帝とグルになつて獨斷しやうとした鴨綠江の森林伐採權をも得た、金州半島をも租借し得た、樺太の半部をも收め得た、必らずしも伯ばかりの手柄ではないが、外政當局者たる功績は到底沒すべきでは無い。

若し識者からいへば、滿洲よりも南清方面へ多く手を伸したい、福建不割讓といふが如き寧ろ自繩自縛の姿ある窮屈千萬な約束を捨てゝも、豐沃富饒の南清へ利權を建つるのが、我が利益でもあるし、又臺灣領有を無意味ならしめぬ大策でもある、イヤ北守南進の宿命にも適當するのだ、北方は先づ韓國の宗主權を完全にし、其境壤を安固にする丈け滿洲へ手を掛くる位に切上げ、更らに主力を南清及び其れ以南に進めたい、第二次桂内閣に於ける外務大臣としての伯は、願くば斯くありたいものだ、滿州方面へ手を伸すのも、之を一偶に抑へて更らに一偶に伸びる所以で、大なる外交資源である、例の小村式の規模壯大、網を八方に張る外交型である、但だ伯の健康果して南進を許すや否やが氣遣はしい、今や清國との懸案が大分面倒に成り行きつゝある、倫敦タイムスの主張で英國の輿論を一變し得た、清國との懸案を裁斷するのは是からで、容易

に決定するのも寧ろ之からであろう、随つて面倒は今日以後に無いかも知れぬが、甘く之を取片付けて、更に南進の大方針に擱ひたいものである。

伯は有名な無頓着家である、壯時は酒を被つて斗酒尚ほ辭せざる趣があつて、從つて一家の計を顧みぬから、アイスに包圍せられて曾て其の厄を免かれなんだが、此の頃は眞逆に左樣のともなかろう、併し其の小石川原町の自邸なるものは、矮小狹隘、到底大臣の居てはない、然かも之を購ふにも、之を建つるにも、總て人手に一任して、伯は幾んど之を見なかつた、所謂國家の大計を苦慮して自家の米鹽を顧みざるもの、後の歴史家は、定めて此の點でも伯を賞揚するてあろう。

△小村外相の今昔

工學博士　平井晴二郎

えゝ、小村氏は宮崎縣だが佐土原ては無かつたらしい、がその附近の樣に記憶して居る、明治三年に貢進生として選拔され、東京へ出た、私は明治四年に最早貢進生といふ事が止めになつてから出たのだ、小村氏とはそれから知り合つたのさ、小村氏は英學が出來、海外留學を命ぜられたが、その留學も私と同時であつた、學生中では随分若い方、私より一つの年嵩だと思ふが非常に能く出來た、才子である、氣轉が能く利く度胸も相應に有る、當時の法科中で學問では小村、鳩山と言はれたものだ、卒業すると二人とも選拔されて文部省から海外留學を命ぜられた、私は科が違つたが、法科中からその時留學生とされたのは四人、鳩山、小村の他には齋藤(修一郎)と菊池(武夫)てあつた、齋藤も菊池もね、頗るの才子て遂に留學を命ぜられる事にもなつたが、それは才子ばかりてなく相應に學問も出來たさ、が周圍から注目されては居なかつた、注目されたのは矢張り鳩山、小村の二人だつたよ、遣られた先は米國で、その中鳩山だけはエールへ行つたが他は皆ハアヴアードであつた、此ハアヴアードでも小村は仲々能く出來た相であつた。留學生時代は皆二十一二だ

つたから大學生時代は十七八、先づお互に十代だつたね、

小村氏は日本へ歸つてから飜譯官になつたが、此時代は薩張り行けなかつた樣だ……。私は北海道へ行つて居て年に一度位しか東京へは來ぬ、來ても公務の爲に忙しくて左樣は逢はぬ、私が東京へ戻つたら小村氏は外國へ行つたから又逢へぬ、漸く外務大臣になつてから多少往來するといふ始末多くは駈け違つて來て居たのだから近頃の事は餘りタンと知らんよ、逸話ッて、左樣さなあ、お互に腕白だつたから色々面白い事もあつたのだが一々記憶もして居ぬ、小村氏は仲々氣轉のよい男でね、うん、此樣な事もあつたよ、所詮錢のない連中だつたから、書生の頃はさね。燒薯や、はじけ豆、大福餅位を能く寄ると食つたものだ、その大福を銘々ストーブの上へ並べては互に人の分を取つて食ふ、すると小村の奴は、指頭て並べて有る丈の大福に皆唾を付ける、左樣して悠々と自分一人てペロリしてのけたものだ、それには弱つたつけ。

飜譯官時代に振はなかつたのか、それには譯のあるのさ、何ても家庭の事情から來て居るのだね、餘程氣の毒な次第があつたといふ話だ、お父さんの借金かなどて首の廻らぬ始末になつて居り、先生自暴自棄になつて居たといふことだ、餘程憐むべき事情てあつたらしい、飜譯局へ入つたのも何でも齋藤かなんぞの世話てあろうと想像するのだ、能くは知らんよ。幾度も幾度も友達が寄つて家政整理に骨を折つたが整理が付かぬ、小村は自暴自棄になつて遊ぶ、友達等が寄つて整理に骨を折つて居るといふ際に、自分は月給をすつかり懷中して家を餘所にするといふ樣な事もあつた相だ、その爲にすつかり頭を惡くして居たのだね、その後兎に角始末が付き、漸然頭もノルマルの狀態に復歸したので復た活動し出したのだよ。ウン磊落な質だ。

鳩山？、彼れは小供の時の氣象、學才て其儘圓滿に發達したものだ、元から溫良しく丸て女見た樣て姉、姉と渾名されたのだ、齋藤などとは正反對の方だよ、一寸逢つて話すと大きな事をいつてアハハアハハと笑

ひはするが、根は矢張り温良しいのだよ。如何しても人は子供の時の有樣で一貫するものだね、小村も此頃は如何であるか能くは知らぬが、靑年時代は今言つた樣な次第で仲々の傑物だつたよ。（談話筆記）

△小村外相論

田川大吉郎

十年前に同志相會して朝野の人物の月旦を試みた事がある。其時分に一人が、中根衆議院書記官長の言なりとして、未來の外務大臣は小村である。東洋の事情に精通すると朝野を通じて第一人であるといつた處が、同志の多數は皆手を拍つて笑つた。其時分彼は政務局長位であつたと思ふ。多數の吹き出したのにも相當の理由があつたかも知れぬが、自分は中根の言要領を得てゐる、彼も東洋問題の衝に當る一人になるだらうと思つてゐた。彼は十數年前より一部政客の間には未來の發達を豫想せられてゐたのであらう。特に最近に於て山縣派の未來を代表するものは桂にあらず、小村か平田ならんといふ批評を聞いた事がある。彼が近來益々振ひつゝあることはこれでも分る。

昨年の夏六月の初、自分は事を以て桂侯を訪へる際、侯が一言小村を評した。桂は小村を引上げて彼を外相の位置に置いた事を自己の鑑識として得意で居るといふ事であるが、「小村は體は小さいが膽は大きい、今日の群政治家中殆んど匹儔ない」といつてゐた。此時自分は桂は世間の噂通りいよ／＼内閣を引受け、外務を小村にやらせる氣だなと思つたのである。評判は斯くの如くよいに拘らず、又自分は一度は内閣の人となるだらうと思つてゐたに拘らず、小村外相の働きには自分は滿足せない。小村を平凡とは思はぬ、又自分の慾が餘り大きいからかとも思ふが、どうも不足に思ふ。今多くはいはぬが、例へばポーツマスについていへば彼は償金の請求の出來ぬことは東京出發の日に知つてゐたと思ふ。それを柄になく大きく吹き立てる。私は之を輕薄に思ふ。時の眞相、大戰爭の成行について深

く心を用ひる人の態度とは受取れぬ。自分等は初めから償金は取れぬと思つてゐた。其考て談判すれば矢張り國民の多數からは批難されたてあらうが、世界の有識者をして床しいと思はしめ、力ある提議を爲し得たらうに、浮氣にも又氣輕にも事々しく償金問題を揚言して談判に當つた。其態度がどうも紳士らしくない。これは政治上の大なる瑕瑾と思ふ。當時も之を惜んだが、今日も尙之を追擊するを止み能はぬ。其後の彼を評すれば、私はどうしても彼は政界を去るべき人と思ふ。ポーツマス以後再び政界に出づべからざる人と思ふ。桂が如何に引いても隱るべき人と思ふ。然るに彼は再び內閣に入つて外相となつた。こういふ點に於て彼も尋常一樣の明治の人てある。眞に重厚な質實なる士の面影がないと思ふ。彼が外相となつて以來の苦勞を多とせない譯てはない。世間の批難の間にあつて仕事して居る彼に同情がない譯てはない。然し再び外相となりしことを以て大臣の進退の意味を解せざる人と思ふ。

廿五議會に於て彼は外交上に關する演說をなした。此演說は議會あつて以來の有數の演說てあつた。彼の辯舌は夫れ程爽やかでなく、又其音聲朗らかてなく、論理も亦いくらか暢達でないとて之を重んぜざる人もあつたが、其れは重んぜざる人の見識の不足を示す者てあつて、彼の演說は確かに近來の外相の演說中最も注意すべきものであつた。其關係に於て、抱負に於て大演說であつた。外國の外相の演說と比肩すべき程の意味あるものてあつた。歷代の總理若くは外相が多く語らず、語つても亦多くいはぬに比して意味もあり又決心もある演說てあつた。然し其趣意には私は服されなかつた。北米に移民を送ることを一切止め、滿韓に移民を集中せんといふのがあの演說中の第一の眼目てあつた。移民を各所に遣るのは不利てあると頻りに言つたが、所謂遁辭は窮する所に出づてあつて、あれは窮餘の言と私は思ふ。滿韓の原野は果して日本の移民を送るに適するか、私も滿州に三度行き、其觀た所によつて考ふるに、滿州に必要なるは資本てあつて勞力

てはない。外相が移民を送るといふのは勞働者を送つて其生産業を助けんとするのである。然し其勞働者は不足なく見える。而かも滿州の勞働者は日本のそれよりも低度のものであつて、時間も長く働き、生活も低く、又氣根も續く。自分は日本の勞働者が之に負くるのは殘念であるが、土地の適者としてはどうしても滿州人が日本人に勝ることを拒み得ぬ。滿韓に勞働者を送るといふ外相の意見は、滿韓は我勢力の中にある。勞働者の適すると否とに拘らず多く日本人を入れなくてはならぬといふのであらう。けれども已に滿州は資本を必要として勞働を必要とせぬ。勞働の入る餘地がない。假りに數歩を讓つて餘地があるとしても、彼地の勞働者と競爭の人間を送ることは無理である。或は資本に於て、或は智慧に於て、或は品性に於て、彼よりも優り、彼自ら頭を下げて來るやうなものを送るならよいが、然らずして只漫りに多數の勞働者を送つても却て勢力を失墜するに止るのである。夫れ故に私は外相が滿韓に移民を集中するといふ意味を是認することが出來ないのである。東洋通、支那通といはるゝ外相が、北米に移民をやることの出來ぬ口實として、滿韓に移民を送ることを說くが如きは、彼の思想が深くなく又、本式でない證據と思ふ。況んや當時も議會て質問をして置いたが、日本の移民法では滿韓以外のものを移民といひ、日本の政策として勞働者を滿韓に送らぬといふ主義を取つたのを、彼は之を打壞して、永年の苦心を一朝にしてメチヤ〳〵にしたのである。夫れ故にあの演說は演說としては小村伯の名を成すものであるか、其內容に至つては小村伯の見識なきことを表白するものと思ふ。斯くの如くに私は失禮ながら重ね〳〵小村外相の外交家たる地位を不滿に感ずる。然しそれは過去の繰り言になるから餘りいはぬ。桂侯小村伯にして若し我言に取るべきありとすれば、どうぞ將來の政策を謹んで貰ひたい。嘗て朝野の重望を托されたるに背かざる樣に努力して晩節を飾られたいと思ふ。自分は小村外相に深く感服せぬが、今や朝野に人物甚だ乏しく、殊に外交界に最も乏しい。故に伯が

熱心に日露戰捷後の日本の運命を開展するに勉められんことを祈る。伯の氣局、戰捷後の日本には小なりと思ふが、其れにも拘らず其努力を祈る。

△小村外相論

尾崎行雄

小村を一言にして評したら能吏といつてよからうと思ふ。普通の能吏といふものには厭味とか俗氣とかいふものが、得て附纒ふものであるが、小村にはそれがない。厭味なき俗氣なき、快活な能吏である。小村は學校時代から同學生の首領として尊敬せられたといふ話である。が、世の中に出てから躓いて、初めはたしか裁判官か何かになり、後、外交官になつたが、一向に用ひられなかつた。さりとて、進んで自分の首領をこしらへて、其人に諂つて重く用ひられて見やうといふやうな事もなかつた。大抵の人は親分を拵へるが小村は之を作らず、又自分の子分を作るでもなく、飜譯局か何かに久しく無名無聲て居た。日清戰爭前に支那公使館に行き、戰爭中に代理公使か何かになつたが、其時初めて其機鋒をあらはした。學生時代には異彩を放つたが、其後久しく平凡な役人と思はれてゐたが、此危急の際に頭角をあらはし、金州半島の民政官となつて、又公平にして快活、且つ事務を處理する手腕のある人だといふので、軍人にも屬官にも受けがよかつた。其時可なり世間に知られて、其以後はトン／＼拍子で行つた。いろ／＼の外務大臣の下に次官としてやつたが、黨派を作らぬ人である故に、誰にも受けがよかつた。大隈伯なども大變信用した。近來は桂侯山縣公などが引立てゝ重く任じ、山縣派の一人と目されてゐるが、然し小村は他の人のやうに自ら山縣派に取入つたのではなからう。思ふに彼は自ら信ずる所ある人であつて、親分の力によつてやらうなどゝいふさもしい考のない人であるらしい。又一種の樂天的思想を抱いて、人に知られなくても格別不平もいはぬやうだ。米國から歸つてから、明治廿七年まで、血氣盛んな、

功名の念燃ゆるが如き時代を十數年も、人に知られずにコツ〳〵やつてゐたのである。尤もその時は父の借金やら自分の借金やらで困しめられて、殆んど窮所に陷つてゐた時な相だが、どうかこうか切り拔けて、左程身體も傷めずにやつて來た所を見ると、心の中にどこか無頓着な所があるだらうと思ふ。又仕事には餘程忠實な樣だ。人間としても眞面目な人で輕薄才子とは違ふ樣である。死ぬまで仕事に勤むる人であらう。歷代の外務大臣中、大隈、陸奥の兩人は其爲した仕事の善惡に拘らず、人と飛び離れた、時流を拔いた人であるから、此二人とは一寸比較は取れぬが、其他の外務大臣中では第一流であらう。

小村の一體の遣り口を見るに大きな事をドン〳〵大膽にやつて了ふ方ではなくして、寧ろ小心にして大事を取る方であらう。夫れ故に非常な成功がないと同時に又失敗もない。つまり忠實に事を見る能吏といふ事に歸着するのである。然しどれ丈けか豪傑分子が加味せられてゐる。さりながら口でいふ程の無鐵砲な事はせぬ人と思ふ。

此頃支那問題についていろ〳〵批評があるが、私は小村及び桂の對淸政策は根本的に間違つて居らぬかと思ふ。列國中所謂懷柔主義を以て支那に成功したものゝないことは過去百年の歷史が之を證明して居る。私は所謂懷柔政策を捨てゝ强硬主義を取らねばならぬと思ふてゐる。

世界一周記

敬四郎

（一）世界

午前八時、麗かな春の朝日が硝子戸を透して教室の中に射し込む。十分前迄は押合ひ拗合ひ廊下に叫いて居た連中が今は悄然として一樣に教壇の方を見詰めて居る。黑板には海岸の景が描いてあつて、大小數隻の船が港を起點として順次沖合に列んで居る。最後の一つは其船體の半を水平線下に沒して、微かに檣頭の一端を現はして居る。そして海岸には高き崖を作つて、その上に人ひとり立たしてある——これが九つの時、

地球は圓いものといふ事を知つたのは先づ此時がはじめてらしい。地球は圓いもの、日本は島國で四方海が繞つて居るのだといふ、さうかくと承知はして居たものゝ、實は十六の春まで海といふものを見たことは無かつたのである。

其後布哇とやらに行つてお醫者をして居る一さんのお父さんが歸つて來て、町の舞臺に演說會を開いた事がある。演說やら幻燈やらがあつて、丁度一さんのお父さんのやうに奇麗な洋服を着て靴を穿いた大勢の人が、各樣な事をして居るのを見た覺がある。その時一さんのお父さんは一さんのお母さんや一さんやらを、その布哇とやらに伴れて行く爲に歸つて來たのであつた。『彼地へ行つたら一さんのお母さんもあんなにお腹が細くなるのでせうか』と聞いてお母さんに笑はれた事も覺えて居る。そしてあんな奇麗な、年中花が咲いてるといふ處へ往く一さんは餘つ程仕合だなと羨しかつた——此時布哇だの亞米利加だのといふ處に就いて稍具體的な智識を得。

亞米利加人だか英吉利人だか忘れたが、兎に角一人の外國宣敎師が來て柳屋の二階を借りて一晩說敎をしたことがある。此頃自分の鄕里——東北の山の中——へ西洋人が來るなどといふことは寔に珍しい事だつた。『それ異人だ、毛唐人が來た』といふので、宛然安政の頃に漂流人でも見るやうなつもりで、若いのも年取つたのも、男も女も、われもくと押しかけたものである。何でも、昔しキリストといふ西洋の神樣が山の上に登つて說敎をした、「燈火を點じてそを桝の中に置くものあらんや」とか何とか言つて其處にあつたカンテラを取つて、頻りに桝の上に置いたり入れたりしたる事を覺えて居る——これが西洋人なるものを見た抑々の初めてである。

其後十六の春に東京に出て來て、海も見れば多くの西洋人も見た。ベーツさんだのコーツさんだのと、一人二人は西洋人の間に近付も出來る。自分の通つた學校の先生も多くは洋行といふことをしたことのある人々であつた。それに最近の一年は大森に住んで、大分洋行歸の姿を見た。いやもう大森といふ處は妙なところで、洋行した人もせぬ人も、皆一樣に西洋人の眞似をする處である。朝の八時から九時迄の間に停車場に行つて御覽なさい、鼻下の髯をピンと反らし、頤の髯を短く先尖りに刈つて、丁度彼得大帝を近代的にしたやうな顏付で踏反り返つて歩つて居る人間がいくらも居る。此節は競馬が廢止になつて話の種が無くなりやせんかと心配でならぬ。

先づ以上が自分が生れてから今日に至る間の世界なるものに對する觀念發達の概況である。去年杉村さんの一週記を見て世界が一層狹くなつたやうに思つたが、眞逆一年後の今日、恁うして自分が出掛けて來やうとは思はなかつた。東京へ出て來て以來十年、いつからか心掛けて居ながら、川崎の大師から羽田の穴守さんへ參詣をしたのが漸つと此の一月のことである。『それぢや一寸行つて來ます』——世界一週をやる方が、遙かに穴守參詣に出掛けるよりも樂なやうに思はれる。

(二) 出發

三月二十日、愈出帆の日が來た。生れて二十六年、未だ一歩を其外に踏出したことの無い故國を離れて今日ぞ萬里の旅程に上る朝である。二時間の後には既に此處には居らぬ、十時間の後には既に横濱を離れて居る。七日の後には既に太平洋の眞中に出て見渡すかぎり水又水、一と月の後には米國の彼處やらに目を丸くして居るだらう。二た月の後には倫敦の月に遙に故山を偲び、三月四月の後には——と此處まで考へて來ると、再び此處に戻つて『あゝ疲れた』と大の字になつて寐そべつて居ることになる。四月の後に再び此處に歸つて、そしてかうして寐そべつて居るのならば、どうせ今から寐そべつて居ても同じことだ。此の忙がしい世の中に寐そべる爲に四月を待つ遠慮は要るまい、いつそ態うして今から寐そべつて居るならば、四月といふ短からぬ時を儲けるのだと思つたけれ共、今になつては仕樣が無い。九時といふに餘り勇ましくもなく家門を出る、といふと大層だが實は叔父さんの家の門を出る。會者定離は世のならひとか何とか少し氣の利いた事でも言つて見やうかと思つたが、何だか工合が惡かつたから默つて頭を下げたゞけて出て來る。

午前八時五十五分。最う五分で發車といふので響鈴ががらん／＼と鳴る。『ぢや乘らう』と揃つて待合所を出掛けやうとすると、周章てた大聲で『鍵が無い／＼』といふ人がある。見れば朝日新聞の號は玄耳、通稱椋十、本名澁川柳次郎君が、目を見張り齒を剝出して『鍵が／＼』と叫びながら頻りにポケットを探つて居る。楚人冠杉村君が遣て來て如何したのかと尋ねる。椋十先生怪げんな顏をして『鞄は來たが鍵を忘れて來た』のだといふので、『これから息子を取りに遣らうと思ふ』といふ。「東京見物」や「上方見物」を通じて椋十先生とは隨分妙な人だなと思つて居たものゝ、その後に隱れて居る玄耳其人までが、か程に面白い人だとは思はなかつた。發車には最う五分しか間が無い、それに麻布の市兵衛町まではいくら急いでも往復一時間はかゝる。椋十先生は息子を取りに遣ると言つて聽かなかつたが、愈無ければ横濱で如何にかする事にして、尚一應調べて見ろといふ事になる。上衣から胴着、それからヅボンと順次に調べて見たが成程見えぬ。ぢや兎も角も横濱へ行つての上にせうと、再び待合所を出かゝると、誰やらが尻のポケットを見たかと言ふ。先生『成程！』と言つて忙しくそのポケットを探る風であつたが、軈て『有つた／＼』と言つて五つ六つの鍵をぞろ／＼と結び着けた一連の鎖を取り出してぶら／＼と振り廻はす。勿論一同は顏見合はした儘で一語もない。

午後一時。約束の時間通りに棧橋に集まる。春ながら今日は曇つて小雨さへ交へた北風がヒュー／＼吹く。見渡せば灰色の海が忙しなく波立つて我等の地洋丸は防波堤の外、遙かに一萬四千噸の姿を据へて泰然として浮んで居る。彼の船が——と首を左右に振つて頻りに感心して居ると、突然後から『一寸その儘て』といふ聲がする。見ると有樂社の松下君が既にカメラの筒口を我等の方に差向けて待構へて居る、油斷のならぬ世の中だと思ふ。撮影が濟んで一同小蒸汽に乘移ると、それは待設けて居たやうに直ちに纜を解いて母船を指して急ぐ。

午後二時。先程から本船に來て待合せて居た見送の人に會つて、船室

な探し當て丶荷物を持込む。鞄の置場所を定めながらも頻りに船の奇麗なのに感心する。

午後三時。糸よりも細い春雨の中に船は一聲の汽笛を殘して半月に餘る航海に上る。甲板の上に群つて居た見送の人々は既に小蒸汽に歸つて上に遺された我等はすゞろに一種の淋味を感ずる。小蒸汽はまだ眼下に居る。船客の多は皆舷側に寄つて各自にそれ〲の汽艇を見下して居る。下で手布を振れば上でも手布を振る。上で手招をすれば下でも同じやうに手招をする。大きく口を開いた。何か言つたのだらうと思つたが上には聞取れぬ。今度は兩手で喇叭を作つて、それを口邊に當がつて何やら高く言つたやうだが矢つ張り駄目だ。畢竟は双方たゞ笑つて仕舞になる。

他人の見送人ばかり見て居るわけでは無い。お父さんは如何したらうと思つて見ると、幸ちやんやちいちやんやらが並んだ右に立つて頻りに帽子を振つて居る。お父さんと言へば明治の前の前のその前あたりの年代に生れた人で今年取つて七十と幾歳やら、清濱の波面に湛へて髪は既に雪よりも白い。愚息が亞米利加とやら歐羅巴とやらへ行くといふので、遙か白河の關所の奥から山を越え水を越えて此間から東京に來て居られたのである。その白頭の老翁が、例の痙攣で、ヒク〲する左眼を瞬いて覗くやうに我兒の方を見上げながら、前後の若い者がするやうに帽子を打振るその無器用なさまを見ると何とも言へぬ一種の哀な感じが起る。老人でも都會に住んで居る人は皆若い。都會の老人が若いからと言つて地方の山間に起居して居る老人が衰へて行くのを責むるわけにはゆかぬ、揉上を剃落して香水を匂はす當世の若者がする様を見て、これが見送の様式かと思はるればこそ、見えも振りも打忘れて斯くされるのかと思ふと、氣の毒なやうな、相濟まぬやうな氣がして、此方では只無闇に手巾を振る。

がこれも束の間、三分、五分と、船と小蒸汽との距離は段々と遠くなつて、打振る手巾の白いのさへもそれとは認め兼ねる程になる。小蒸汽は益々小さくなる、總て横濱の市街は模糊たる烟霞の中に沒して仕舞つて漸く遊子の情を意識しはじめる——此時から自己存在の中心が陸を離れて船に移る。

午後六時—七時—八時—九時。乘出してから既に三時間經つた。船は先程東京灣を出離れて當に太平洋に入つて居る。雨に暮れゆく春の海は瞬く間に闇に沒して、只舷側に碎くる波頭の、洩れ射す室内の燈光に映つて、浪霧を散すやうなのが見えるばかり。寒氣がして來たので船室に遁入る。栓を捻ると暗がりの室内が俄かにパツと明くなる。部屋は四疊半程の方形で天井及四側を眞白く塗つてある。床には一面に緑の毛氈を敷き詰めてある。遁入つて正面には衣裳棚があつて、其上に種々と船中の規則を書いた掲示がしてある。衣裳棚に向つて左側には圓窓が一つ切つてあつて、甲板を隔てゝ海面を望む。窓に向つて反對の側には上下二つの寢床が作り附けてあつて、それをカーテンで隱してある。寢床の右脇に細長い箱を縦にしたやうなものがある、内に外套やら帽子やら

を懸けて置くところなので、外面は全身大の姿見になつて居る。この姿見に向つて圓窓の左側に洗面所がある。其處にまた一つ鏡があつて、その水技の下には小便の壺までが置いてある、勿論これは深夜の用に供するものである。

で一通り先づ恁んな工合の室内で一人安樂椅子に倚つて此一週間程の經過を考へて見る。旅券のこと、買物のこと、暇乞のことと忙しかつたこと、惑ついたことなぞを一つ〳〵思ひ出して、だが最う明日からは大丈夫だと思ふ。卒然として銅鑼の音が響いて食堂に出る。男女の西洋人がズラリと並んだ中で、羊の足だの、犢の肝臓なぞを食ふ――初めて圖書館に行つた時のやうな心持がして如何も落着が無い。今頃は家では味噌汁で焚たての飯を食つて居ることだらうなぞ思ふと、自分は何だか百里を隔てゝ不用の芝居をして居るやうな氣がして妙な心持になる。兎角して食事を終つて再び船室に戻る。

船室に戻つて徒然として椅子に凭れて居ると、包んだやうな汽罐の音と、木の葉を捲くやうな波の音とが、床に傳はり窓を透して、微かに室内に響いて來る。總て二三日の疲勞が一時に出て來て、汽罐の響も波の音も全く聞えなくなつて仕舞ふ――かくて忙しかつた發程第一日が終結する。

（三）船中の二十四時

昔しと言つても桃太郎やかち〳〵山の時代ではない。つい四五年前椋十翁がまだ若くて玄耳を名乗つて居る頃「陣屋の二十四時」といふを書いてそんじよ其處邊の人々をやんやと言はせたことがある。さてこれは船中の二十四時、天に震ふ喊聲を寫すでもなく、人馬狂奔の大活劇を描くでもないから讀者に何の興味をも與へ得るでは無からうと思ふものゝ、書かいては何とも氣が濟み申さぬので、宛然春の海の終日のたり〳〵たるが如き船中の行事に筆を染めることにする。

午前五時。目は覺めたが起るには少し早過ぎる。夜明の色は窓を透して室内は既にボンヤリと明んで居る。外は曉天模糊として朝霧深く立ち罩めて居る風情、只近く灰色の海に高からぬ波が起伏して居るのが見える。

午前六時。コツ〳〵と戸を敲く音がする。寢床の上から「エース」と答へる。風呂番のボーイが顏だけ出して『お風呂が出來ました』といふ。そこ〳〵に盥漱を濟まして風呂場に出掛ける。風呂場は大概便所と同室にあるので、其室を又いくつかの小房に區劃して、三疊敷程の處に一個の風呂桶を据ゑておく。「風呂をつくる」といふのは湯水を適當に鹽梅して拭布を整ひ、石鹸海綿等をそれ〳〵に準備して行くことを言ふ。湯は鹹湯なので其外に上り湯として淡水の湯が取つてある。寢衣を脫ぎ捨てゝザンブと湯の中に飛込む――と言ひたい處だが、濫て湯水を撥かすものぢや無いと數へられて來たので極めて遠慮してそろ〳〵と滑り込む。兩脚を長々と伸ばして仰向になつて居ると船體の動搖に伴れて水が左右に搖れる。水が左右に搖れると共に自分の體も亦左右に搖れる。搖られ〳〵て又うと〳〵と眠くなる。驚いて目を覺ます――隣の風呂に誰ぞ來

たのだらう、ザヤア〳〵と湯を捻り出す音がする。

午前七時湯から上つて、着物を着換へて、甲板の上を散歩する。さしも深く罩めて居た霧が今は綺麗に霽れ渡つて、何時ぞや富士山の絶頂で御目に懸つた天日様が今度は満々たる大海原の中で自分を照らす。『何時も御機嫌好う結構で、、、』と御挨拶に及ばうとしたが、眞逆に『お、、お前か、今度は妙な處で逢ふれ』とも何とも言つては呉れまいと思つたから止す。軈て下の方でゴン〳〵と銅鑼の音。

午前八時。ゴン〳〵〳〵、愈朝食開始。帽子冠つたまゝて食堂に入りかけて、周章てゝ脱取つてボーイに渡す。中央に三つ長い食卓が縦に列ぶ。それに直角をなして左右に幾つかの側食卓が並ぶ。我等は向つて左側のその一つを占める。中央の長卓の主座にはそれ〴〵船長、事務長、一等運轉士と言つたやうな主人側の人が座る。我等の卓子には機關長石井君が着く。食事は先づオレンヂなぞの果物から始める。オートミールを啜る、鹽鯖の焼いたのを取る。焼豚にオムレツ、但し卵子は茹たのなり、揚げたのなり、好によつて如何様のでもある。最後に菓子を食つて珈琲を喫む。

午前九時。朝食の後は暫時喫煙室に退いて雑談に耽ける。この室は上甲板の艫の方にあつて、幾つか小卓を圍んで皮張の椅子が五脚づゝ置いてある。此處は男の專有室、煙草は素より酒、鑛水の類を飲むこと自由、正面の壁に大きな時計が造り付けてあつて、其下は一面爛漫の櫻花に彩雲霞曳する吉野あたりの春景色を寫したつゞれ織とやらで飾つてある。

美しいとも、見事だとも、さても稱讃の辭に窮して仕舞ふ。大阪の誰やらが『好い船やな』と言ふ。博多の某君が『好か船たい』といふ。自分がうろ覺の大阪辯で『左様おますなア』と言はうとして居ると、一等運轉士の東郷君が來てこれからその好か船を案内して呉れるといふ。

午前十時—十一時—十二時。東郷君に伴れられてぞろ〳〵と船橋に昇る。キアピテン、グリーンは風貌瀟洒たる典型的英國海員で、起つて一同を迎へ入れて愛嬌のある挨拶をする。」椋十翁が一同を代表して一場の謝辭に及ぶ。船橋を辭して海圖室に到る。船大工が鎚を揮つて頻りにコツ〳〵と何からの修繕をして居る。チヤート、ルームとは名の如く海圖を置く室なので、船が既に何哩走つて今何處の處に居ると、日々の行程と位置とを附込んで行く。嘗て聞いて居た六分儀といふものがある。『これは恁うしてかうするものだ』と東郷君は説明して呉れたが、何しろ初めての者には十分に解り兼る。

海圖室を出てから羅針盤だの探海燈、無線電信局にラウンヂルーム、酒舗、スキートルーム、小兒室、第二食堂、暗室、印刷所、納戸、二等船客食堂、三等客室、洗濯場及機關室等を見る。無線電信局には一人の技手が居て頻りに他の船と通信して居る。本船は昨晩から先發の練習艦隊と受感距離に居るのださうで、昨晩當方から出した祝電の挨拶を今受けて居るところだといふ。技手は受音機を耳に當てゝ聞取りながら、當方からも何やら打電つて遣ると、パチ〳〵と耳を聾するやうな響を起して、感電機の處からは蒼い白い強烈な火花を散らす。それて當方に受け

た電報は『カネイル、スグオクレ』なぞいふ電報か何ぞのやうに、普通の電報用紙に寫取られて何の不思議もなさゝうに各船室に配達される。

フウンザ、これは一寸譯語がつかぬ。試に字書を引くと『ノラクラスルヿ、ブラ〳〵スルヿ、ダラケ横ハルヿ』なぞいふ譯語が出て來る。マスター、オヴ、アーツとか、何々博士とか、左樣な學者が五人も六人も寄つて作つたといはれる字書にも前掲げたやうな譯しか無いのだから、こゝでも「ダラケ横ハル」室位で勘辨しといて貰ふことに仕やう。文字通り食前食後にダラケ横ハル爲に設けられたもので、喫煙室に入るを好まぬ男と、一般の婦人に對する設備である。スキート、ルームとは伴(とも)の部屋、即ち從者を伴れた夫婦者なぞの這入る室で、一室が二房に分れて、一方には、主人夫婦、その次の間には伴の者が控ふるやうになつて居る。此室には便所も浴槽も特別に備付けてあつて、此上もない贅澤である。小兒室は幼兒の守をするところ、第二食堂といふのは無遠慮に日本食でも遣らうといふ時に用ひるもの、印刷所は日々の獻立(メヌ)其他を刷るところ、納戸が食料品の置場で二等客食堂は一等客食堂よりも稍粗末、三等客は板箱の中に寐るので、洗濯場ではビショ〳〵の毛布が見て居る間に乾く、三等室の一隅に監禁所があつて、その前に竟日中毛布を引被つて寐て居る者がある。『何うしたのでせう』と聞くと『密航者だ』といふ。穢れた茶色の毛布の上に蜜柑が一つ乘つて居たが寐返りを打つた拍子にころ〳〵と轉げた、ベッドの下に潜つて仕舞ふ。

午後一時。ゴン〳〵〳〵――晝食の銅鑼。一寸首を出して覗くと、豚尾を垂れた支那人のボーイが摺木(すりこぎ)樣のもので金盥を亂打して行過ぎる。

晝食の獻立――牡蠣、スープ、鮭、海老のコロッケー、豚の尻、雞の腸詰、牛の肋肉、羊の舌に牛の舌、ビステキにハム、それからプロデインク、パイ、アイスクリームに果物は蜜柑バナヽ、梨子葡萄、それに次いて茶に咖啡――これ等の中から各自に好きなものを取つて食ふ。

晝食の間か午前中留守の間を見計つて、部屋附のボーイが來て寐床を作つてゆく。

午後二時。午睡。

午後三時。目を覺して喫煙室に行つて見たが、西洋人が三四人卓を圍んで將棋(チエッス)を差して居る外に連中は一人も見えぬ。折から外に笑聲が聞える。出て見ると連中は右舷の甲板に集つて頻りに例の玉突を遣つて居る。玉突と言つてもこれは甚だ別趣向なので、なんぼ船が贅澤だからとてかうも揺れる中で普通(なみ)の玉突が出來るものぢや無い。甲板の一部に縦横の線を引いて、その各の角の中に加符減符(プラスマイナス)の附いた幾個の數字を記して置く。そして一定の距離を隔てゝ數個の平圓柄をそれに突込む。甘く加符の中に入ればそれ丈けの得點があるし減符の中に突入ればそれ丈けの負になる。たわいないやうなとだが無聊に苦む船中ではこれがまた意外の興を惹いて、某銀行の重役何田さんなぞは肩が凝つたと言ひながら、昨日も今日も、午前も午後も遣つて居る。

午後四時。先程玉突の中に過ぎて仕まふ。但し此頃午後の茶が出る。

午後五時。日が西に廻つた。艫に行つて水面を見ると、銕葉に掻き立てられた水が深碧の中に白泡を生じて澎湃として宛然海神の荒るゝが如き趣を呈して居る。軈て艫が進み來た痕を見ると遥かに金蛇の如き一條の船脚を遺して、それが蕩揺たる水波の中に消えて仕舞ふ、儚き夢の尾の痕を留めざるが如くに。

午後六時。此頃から夕方の散歩が始まる。杳渺たる海波、團々たる夕陽、而して飄々として渡る萬里の風に吹かれつゝ胸を張り體を伸して玲瓏透徹清鮮無比の大氣を兩肺に充たす。壯絶快絶、當に天地を呑むの概があつて無限の精模が鬱勃として全身に漲るを覺える。

午後七時。晩餐。

午後八時。晩餐を終つて喫煙室に這入り込む。連中は一隅のテーブルを圍んで例の通り句會を開く。と言ふのは椋十翁が又も玄耳といふ宗匠に還つて、桑舟だの古玩だの春耳たのといふ弟子をつくつて、桑港に着くまでに天晴れ一際の俳人に仕立上げやうといふのである。それて柳だの、桃だの、汐干だのといふ題を出して各自に五句なり四句なり作らせる。「對岸の柳に渉る淺瀬かな」といふのが出來る。「塵塚の側に盛や桃の花」といふのが出て來る。「筍や筍の側に生えにけり」。「蛤に指を食はれて花嫁が顏に紅の散りにけり」。それて宗匠の「宵の春喫煙室の句會かな」て止を刺す。

午後九時。句會が果てるとこれから山中君の時間になる。山中君といふのは大阪て有名な山中商會の組合員てボストン支店の管理をして居る人である。心持ち背を圓くして、愛嬌のあるやうな無いやうな、そして眞面目なやうな道化たやうな調子て、夜の紐育、夜の倫敦、それから夜の巴里を說き出す。『さうやつてな、あんた』、『そりやあんた、ほんまに可うおますぜ』とやつて來ると誰も彼もが魅せられたやうになつて一時間二時間は知らぬ間に經つて仕舞ふ。句會と山中君の哲學――我等はかく命名けた――とが毎晩の重なる日課となる。

午後十時。山中哲學が終つて十時を少し過ぎた頃からぼつ／＼寢室に退く。窮屈な洋服を日本服の寢衣に着換へてウントコ寢床に匍ひ上れば、夢は早くも三千哩を駈け戻つて遥かに横濱の埠頭に彷徨つたり、五千哩を抜け駈けしてまだ見ぬ紐育のブロードウエーを歩つたりする。斯くして夜明の五時までは全く華胥の國に遊ぶ。

（四）陸影

三月二十八日。午前十時、南方水平線上微かに大小三個の島影を見る、蓋し南溟の無人島なるべし。

午後五時、遥かに南東東に當りて一大島の一角を認む。或は雲の如く、又烟の如し。一度其影を逸すれば再び之を捉ふるに由なし。

（五）ホノルル

一

三月廿九日。不圖目が覺める。時計を見るとまだ三時だ。最一度寢付うとしたが何だか窓外てがや／＼する。若しやと思つて飛び起て見ると

聳せる處、つい鼻の先に巨島の影が橫はつて居る。月が高く中天から此の島を照して峨峨たる、山嶺は彷彿夢の如く淡く濱邊に連なる一帶の岩礁は黑影漆の如くして近く我等に迫つて居る。『ヤア來たなアー、』『愈着いたれ！』、氣の早い連中はワイキーの料理屋が何とかて、正金の支店が如何とかだと、今から見て來たやうなことを言つて居る。そしては其處此處にアハヽと高い笑聲が起る。

二

六時。船はホノルヽの港外に停つて檢疫船の來るのを待つて居る樣子。船室で上陸するに持行く手廻りの物を集めて居るとコツ／＼と戸を叩く人がある。『お這入り』といふと共に這入つて來たのは一さんのお父さんの勝沼ドクドルである。『ヤアー！』『ヤア！』。それから一通り今度來るやうになつた次第を物語つて、『ぢや兎も角も又後程御目にかゝるとに仕やう。棧橋へは一も御迎に來て居る筈です』、かう言つて一さんのお父さんは行つて仕舞つた。前にも言つた通り一さんのお父さんといふのは永い前から米國へ渡つて、其處で醫學校を卒業してから當府に來て既に二十年近くになるのださうな。今では米國の市民權を得て當地移民局の醫官をして居られるのである。船着每に臨檢に出て來られるのなさうで、戸川秋骨さんの「二萬三千哩」に出て居る勝沼君といふのはこの一さんのお父さんのことである。

檢疫が濟み、旅行券の檢査が終ると後は隨意に上陸が出來る。手提一つに傘を持つて甲板に出ると、果して一さんの姿が見えた。何とか言ひたかつたが距離が遠過ぎたので笑つたゞけて我慢をする。尙一つ甲板を下りて最下の甲板から梯子を下りる。棧橋の上には米袋だの龜甲萬の樽だのが山のやうに積んてある。

『よく來ましたれ！』と一さんが言ふ。『久振りてした』と自分が言ひ切らぬ中に俄然手を出されて一寸惑つく。自分は見物は止しても其儘一さんの家へ行きたかつたが、一行には一行の豫定があるので、更に午後の往訪を約して、タツク社の差し向けた自働車に乘込む。

三

乘込むと直ぐに自働車が走り出す。走り出すと共に運轉手兼案內者の說明が始まる。此れが何町て彼が何街、布哇の名物はバナナて、無い物は泥棒だなぞといふことまて饒舌る。十五間幅の道路の中央を電車が走つて、又その間々を澤山の馬車や自働車が通る。家は多く木造建築て、果物屋だの、料理屋だの、雜貨店だのが連つて居る前を白人やらカナカ人やらが入り亂れて歩く。暫くすると日本人の商店が軒並につゞいて居る街へ出た、見れば壽司屋だの錢湯屋なぞの看板まて見える。不圖見ると彼方から四五人の子供が來る。本を抱へて居るところから見ると、これから學校に行くものらしいが何れも跣足てある。如何に昨夜雨が降つて今朝は道が惡いからとて靴を惜んで穿かぬのてもあるまいと思つて鍾馗樣のやうな運轉手の老爺に聞いて見ると、愚な事を尋ねるなと言はんばかりの顏をして『身體が丈夫になるからだ』といふ。日本て恁麼事をしたら五十錢の罰金を課せられ

ると話すと『馬鹿な役人も有ったもんちやな』と言つて尚一層自働車を逃く違る。軈て市街を後にして郊外に出る。山は皆翠緑滴らんばかり、その翠緑の中を突いて車は飛鳥の如く走つて行く。怪物の手を伸べたやうな芭蕉の茂(しげみ)や、青坊主の突立つたやうな仙人掌(サボテン)の化物を後にして行くと、遠に廣濶なる甘蔗畑(プランテーション)が見える。耕地の中央に製糖所(ミル)があつて、彼地此地の煙筒からは熾んに黑烟を吐いて居る。打連(つらな)る勞働者の小舍の間を縫つて自動車はとある製糖所の門前に停る。

管理者の許可を得て內部の縱覽をする。大勢の同胞勞働者が物珍らしさう我等を眺める。刈上げた甘蔗は專用の汽車に積まれて直接工場の一隅に運ばれる。斯くして運ばれた甘蔗は葉の附いたまゝ、長い莖のまゝて壓搾器械の中に投げ込まれると、自身に葉を捥(も)ぎ莖を剝んで、軈て粗製糖と化つて一方から出て來る。更にこの粗製糖を大きな煮釜(ボイラー)に送つて僅一二の次第(プロッセス)を經ると純白雪を欺く精製糖となつて出て來る。それを麻袋に詰込んで更に汽車に依つて專用の波止場に送る。

工場の縱覽を了へてから附近の勞働者の住居を見舞ふ。多くは耕作に出掛けて閉つて居る。ペンキ塗の細長い長家を四戶乃至八戶位に仕切つてあるので、その中央に共同の炊事場(キチエン)を設いて形ばかりの爐を築上げてある。漸く開いて居る家を見つけて其中を見る。六疊と四疊半ばかりの二間で、床には薄縁を敷いて其上に寢るのださうだ。壁には新聞紙を貼りつめて、處々に女の繪だの商品のペーメなどをはり付けてある。小高い處に神棚樣の者を仕つらひて、殊勝にも其處に　兩陛下の御眞影を捧持してある。八厳だの傳助なども大分此邊に働いて居る事と思つたけれども。時間がないので訪れやうも無かつた。

耕地(プランテーシヨン)から戾つて一寸領事館に寄つてから、ヤングホテルといふのて晝食をする。昨年朝日の一周會員が目を廻したといふ六階か七階の大ホテルて、ホノルヽ位の處にさへ斯んなホテルがあるかと思ふと、御馳走の味よりは何だか情無いと思ふ氣持の方が先に來る。ホテルの近所にフート街といふ町がある、可成の通(とほり)である。

四

晝食を了へて一同はまたも自動車を驅つてパリの絕勝に向ふ。兩山の迫る處に溪流があつて淙々たる響をなして流れ去る。道は凡てコンクリートて固めてあるので少し位の降雨があつてもぬかる事は無い。サツと驟雨が遣つて來る、直ちに晴れる。晴れたと思ふとまたサツと來る。此の中を自動車は路の傍の並木に添うて矢の如く走る。軈てパリに着いた懸崖數十丈、眼下に白浪オアフ海岸を洗ふを見る、一寸江の島から稻村ヶ崎邊を眺めた風情である。此地は其昔しカメハメハ大帝の戰つた跡なさうて『あの穴は當時土兵の匿れた處だ』なぞと、運轉手君がその大きな手を差し延べて傍の洞穴を指さす。折ふし海の方から一陣の强風が吹いて來て田邊君の山高をブイと持つて行く。面喰つた田邊君は周章てゝその後を追つたが、轉々又轉々、仲々追付けない。漸く拾ひ上げた時にはあはれ全く泥水の洗禮を終つた後であつた。此處で同船の永井桑港領事夫妻に出會す。

パリから戻つて一行はワイキ海岸の望月といふ料理屋に行く、自分はその近くの一さんの家に行く。一さんの家に行つてから一緒に公園だの水族館なぞを見る。芭蕉の怪物が居たり、サボテンの化物があつたりする丈けあつて此處の魚は皆珍妙を極めて居る。青いの、赤いの、斑なのなぞは言ふ程のことも無いが、腹に目があつたり、尻尾に頭が着いてたりするのがある。此點に於て世界隨一の水族館だと言はれるのも成程無理ならぬ事だと思ふ。一さんの家で一さんのお母さんに會て、お母さんは無事か、叔母さんに變は無いかなぞといふことから始まつて、誰が嫁に行つて彼が婿になつた、餘り内團の事に關するから此處には皆んな省いておく。

其夜は望月に盛んな懇親會が開かれて、殊に椋十翁如きは大した元氣であつたさうだ。道理で船に歸つて見ると連中の氣焔は偉いもので、浮かり傍にも寄付けぬ程であつた。自分は一さんの呉れたバナヽの大房を衣裳棚の上に飾つて少時はそれに見惚れて居る。

五

明けて三十日の午前八時、船は錨を上げて更に七日間の航海に上つた。棧橋には同行の誰彼を見送りに來た當府の同胞が集つて盛んに手巾を振る。上では其等の人々から送られた名物の花環を首に懸けて一向に訣別を惜む。軈て船が動き初めると今迄さうして懸けて居た花環を取つて遂に之を水上に投る。投げられた赤き白き様々の花は、送つた人、送られた人の心を乘して漾々として漣波の上に搖れて居る。此時ドツと笑聲が起る。何事ぞと見れば例の山中哲學先生が不相變背を圓うして呆然と水面を見守つて居る。成程水の上には五六枚の絵はがきが縺れつ、離れつして漂つて居る。船の出際に周章てヽ投つたのが、生憎向側まで屆き兼れて其處に敢なき溺死を遂げつヽあるものであつた。

氣霽れて風和かなり。三時間の後には船は再び水天の間に入つて、更に東へ東へと進んで行く。

六　帆前船

ホノルヽを出て四日目の暮方に船橋に登つて彼方此方を眺めて居ると、遙か東南の方へ帆前船らしいものが見えて來た。正面に夕日を受けて居るので其帆があくまでも白く紺青の水に映つて居る。彼方で望遠鏡を覗いて居た商船學校の高橋君が招くので自分も行つて覗いて見る。成程今度ははつきり見える。三本檣に帆を十分此方を指して這つて來るのだ。肉眼では唯平な水の上に白いものがチョボと浮いて居るとしか見えないのだが、恁うして望遠鏡を通して覗くと、その平に見えた水面が仲々平でないので、起きつ伏しつする波に伴れて船體の動搖する様が手に取るやうに見える。「何處へ往くのでせう」と聞くと、「布哇へ材木を積んで往くのでせう」と高橋君が答へて呉れる。

横濱を出て最う十六日になる。毎日恁うして海と空をのみ眺めて居るからには少しは海に居るやうな感が起りさうなものだと思つて居たが、物の本で讀んだ事のあるやうな感は更に起つて來なかつた。詰らんなアと思つて居る矢先へ今飄々として風に送られ行く帆前船を見た。恰

仕が百人も居て、酒池肉林を備付け　窮屈したと言つては男女が縺れ合つて面白くもない踊をするこの二十世紀式の船を棄てゝ、波の音に和して欸乃歌ふ材木船に乗移りたくなつた――なぞと思つて居るうちに兩船の距離が段々隔つて、西の船が東になり、東の船が西になつて、入日を背にして急ぐ帆前船の影は肉眼では認めかれる程に小さくなる。「あゝしてホノルゝまで幾日位かゝるのでせうと」聞いて見ると「まア一と月位でせう」と高橋君がいふ。一と月といふと短くはない、其間には雨の降る事もあらう、風の荒れる事もあらう。雨が降つて風が荒れる晩に、材木を積んだ帆前船が闇を衝つて矢のやうに飛ぶ――と、恁う思つた時に、甚だ朧氣ながら初めて海に居るといふ觀念を意識し得たと思つた。

七　金門

四月五日の拂曉船はいよ〳〵金門にかゝつた。金門といふからには――と言つて別段金で造つた門があらうと思つて居たわけでも無いけれども――さりとてかく命名くるからには矢つ張り何ぞ金らしいところがあるのかも知れんと、甚だ不得要領な考で實地其場に臨んで見ると、格別何の事があるのでもなく、唯普通の灣口の通り双方から岬角が相迫つて、其一方の上に明け殘る燈臺の赤ラムプが、曉の色をとほしてピカンと見えるのばかりであつた。船は速力を緩めて油を流したやうな海を靜かに灣内に進んでゆく。狹い灣口を入ると入江が左右に開けて、中に一つの島を抱く。船は其島を左に見て右の口に入つていく。

霧が晴れて朝日が桑港の市街をパツと照らす。今迄ボンヤリとして居たものが明瞭して來た、高い低い數十の丘の上に建て連ねた街が手に取るやうに見える。何でも、四角な箱を千も萬も十萬も集めて、それを周圍から内心に向けてゴチヤ〳〵とげ投つけたやうに見える。青草の生えた丘の上に散らばつて居る郊外の家は、一突つけば其儘ころ〳〵と轉がつて海の中に落込みやしないかと思れる樣だ。つまり立木も何もない丘の上に四角な家が吸着いたやうに立つて居るといふことなのだ。――主として屋根のみが目に入る日本の市街とはそれ程に感が違ふ。

（以下次號）

趣味の人（上）

黑頭巾

其一

◉全盛の美婦が、文金高島田に盛裝を凝らして推し出したる姿は、「日光」の結構ならすんばあらず。

◉金時計に金鎖、金の簪に金の指輪、金の紐に金の帶留、金光燦爛として、影も黄色に映じ、一笑すれば金の入齒閃めく。

◉「日光」に、瑞垣の飛越獅子あり。金碧絢爛たる中、

極めて素樸なる石像也。

●案内者は説明すらく、「日光」は頗る三代將軍の御威に入るべく、苦心したるものなるが、家光參拜するに及んで、「日暮し門」を見るも、更に一辭を發せず。

●有らゆる善美を盡くせる建築も、彼の前には却て不興の種かと、役人共は恐入つたる時、家光は、彼の飛越獅子を見て、忽ち破顏一笑したりと。

●彼の突梯奇警なる飛越獅子は、滿目の造花壇の中、一本の野花を見るの感無くんばあらず。

●夏の大座敷に、ズラリと居並ぶ男女の客は、儼かめしき善美の盛裝、天行く雲も、樹の間吹く風も留まるべく見ゆる時、一箇、サッパリとせる浴衣掛けの美婦、其間に周旋するあらば、滿場の涼氣は彼の身邊より湧き來るべし。

●「惱人春色不須多」場を動かすの生氣は唯だ一點にして足れり。

●「日光」には靈氣無し。唯だ彼の飛越獅子ありて靈活の氣を帶ぶ。

●其の疎末に造り爲せる、短眼平鼻、極めてトボケたる顏面は、金裝せる觀光の客をヒヤカすにも似たる也。

●吾輩は謂ふに、彼の三代將軍は趣味を解するの人也。

●「日光」を見ずんば則ち止む。縱ひ見ると雖も、飛越獅子を見ずんば、則ち「結構」を言ふこと勿れ。

其二

●吾輩曾て鐵舟寺に至り、田子ノ浦を觀望す。蓋し東海道稀有の絶景也。

●後ち此地、高山樗牛の友人等彼の遺言に隨ひ其墓を立つ。

●吾輩も亦た彼の世界文明史を讀み「ミケルアンゼロ」氏曾て人の其の埋葬地を問ふに答へて曰く、『吾をして永くブルネレシーの建築を冥想し得しむる處』、の記事に至て、故樗牛が志を哀まずんばあらざる也。

●蓋し樗牛一生、美術史に貢献す。死して風光絶佳の地に葬るの志、豈、ミケルアンゼロに讓るものならん

や。
●富士山といへば、西行法師か、曾我兄弟が附物なりしに、樗牛は富士山下に一名勝を留め得たる也。
●名も無き漁村と雖も、富士山見ゆれば、何と無く嬉し。
●富士山は日本の富士山也。而して東海道は富士山の東海道也。
●若し富士山を除却せば、東海道の風光は其性命を失ふ。
●北齋の「富士百景」此の名山の變化を寫して神に入る。其の意匠の豊富なること驚く可し。
●廣重の「富士山三十六景」亦た可也。廣重の富士は頂上、一線、妙に平廣に過ぎて癖あり。
●近時「富士山志」「山岳志」「富士登山案内」等の書あり。然れども、富士山を寫して精細を極むるは、吾輩を以て見れば、五雲亭貞秀を第一とす。
●貞秀の畫風、描圖に適す。其の細緻に渉りて屈托するの色無きは多とすべし。此人にして富士山を寫す。必ずしも其大觀を書かざるも、其の精博を極むるに至つては、前に古人無き也。
●貞秀に「富士山道知るべ」一卷あり。小冊子なれども、維新前、富士山志の最も要領を得るものと爲す。
●貞秀の富士山を寫すもの、裏、表の三枚續、錦繪三種あり。外に、縱三枚に、登山の道を描くもの珍とすべし。
●貞秀は兩度、筆を携へて登山を試む。毎に其非凡の氣根を以て精緻の圖を作る。彼も亦た山靈に耻ぢざるの畫家也。
●貞秀は、其師、國貞が第二世豊國襲名の態度に慊らずとし、再び其の門に就かず。
●貞秀浮世繪師の氣骨ある者と謂ふ可し。蓋し富士山を寫すは、宜しく凡骨を以てす可らざる也。

其　三

●北齋の富士百景は妙といふも畵也其の異景百種を擇ばんと企てたるは詩人國分靑厓也。
●吾輩、忘年の友、おろち平も亦た趣味の人たるを失

はず。彼、富士山の繪葉書を蒐集して、アルバム一冊を爲す。

●彼本姓は鳥居大路、名は良平。或は彼の姓名を誤讀して、鳥居おろら平といへる者あり。是より同人、彼を呼ぶにおろら平を以てす。

●吾輩、おろら平と相携へて靑厓を訪ふ。彼、欣然、長髯を撫して語る。

●地高くして、庭、崕に臨む。遠風。草花の梢を吹き來る。

●彼の富士山帖、二三百種、浩瀚といふべし。其の中、日本寫眞師の撮影せるもの、遂に、外人某の富士十種に及ぶものある無し。惜まざる可んや。

●本邦寫眞師の撮影に屬するもの、多くは意匠變化に乏しく、且つ概して細巧に失す。宜しく眼界を洞開し、豪宕の意匠を以て之を撮影せざる可らず。

●吾輩は謂ふ、富士を賞する者は多し。眞に深切に富士を研究する者は少し。

●或は傳ふ、昔し富士山麓一豪農、つねに富士山形を研究し、一日七十回の變態を寫す。事遂に天聽に達するに至ると。

●北齋の百景の如き、筆力剛健稱すべきものありと雖も、尙ほ理想畫に屬するもの多し。

●東海道五十三對の錦繪一卷、豐國、國芳、廣重の合作に係る。其の中に、豐國、廣重の二人して大井川の兩岸を畫けるものあり。

●豐國は、島田を畫く。肥滿の大力士、蓮臺に大アグラをかき、雲助は小さくして富士山は高く遠し。

●廣重は金谷を畫く。窈窕たる少婦駕籠蓮臺に乘る、纎手竹杠を賴より、肩を引き、腮を襟に埋めて戰々兢々たり。江波汪洋として漲り、小さく白き富士山、駕籠の中に見ゆ。

●此の二圖を對照するときは、富士山の趣味は廣重にあるや論莫し。

●遠見の富士は、小さく白き處に妙味在り。九段阪の夜月に、大村兵部大輔の銅像高く峙ち、淡墨の富士は低くして夢の如し。

●富士は百景にして盡す可らず。情景の變化につれて到處妙味あり。畢竟、富士は趣味也。

其四

●峯盲、岳靈を訪ふに至つて、登山熱も亦た極まる。

●他日、登山の電鐵も亦た設けらるゝに至らば、小野湖山も登山を試むるならん。

●博士重野安繹八十の老軀を提げて歐亞を踏破し來る。而して富士山に登らず。富士山に登るは洋行よりも難事也。

●故博士伊東圭介は九十にして登山す。又た近世稀見の人也。惜哉、斯人、遂に海外を見ず。

●近年、富士山頂に、辯論會の開かるゝあらんには、劈頭、一萬尺の壇上に三寸不爛の舌を皷する者は、伯大隈ならざる可らず。

●伯大隈は海外を見ず、富士山に登らず。而してつねに大氣焰を吐きつゝあり。

●勝海舟は、登山の有無、吾輩は之を知らず。

●遼東還附の時、海舟の句に、

三國に踏跨れや富士の山

吾輩も亦た此句を愛す。

●誰か味噌をするがの富士と謂ふや。擂鉢を伏せて眺むるさへ三國一の姿也。

●吾輩も亦た多少、富士の繪葉書を集藏す。其の中、富士の活書とすべきは、觀瀾博士の贈れるもの也。

●博士、去夏、登山して一合目に紀念葉書を送り來る。其の絕巔よりするもの、眞に六根淸淨の氣あり。

●蓋し登山に貴ぶところは、六根淸淨に存せずんばあらず。

●博士、濱梨を携へ歸りて栽培に苦心せり。此草、山上の靈草と稱す。淸楚たる形容、之に對して、絕巔の六根淸淨を憶起せしむべきのみ。

●濱梨を煉羊羹となすものに至つては、澁くして仙味を帶びず。

其五

●吾輩も、十年前、試驗後の消夏の味を回想するに堪へず。

●今年、殊に暑氣燒くが如し。到處、山巔水涯、竹風香處、臥して、試驗の喜劇を談ずるものあらん。

●紅顏再び回らず。吾輩が試驗を談ずるは、青年者と其の趣味を異にす。

●試驗も亦た一の趣味也。試驗官の趣味は、話材と爲すべきもの無くんばあらず。

●試驗の文章は、行雲流水の如く、自由自在、才氣の橫溢するを妨げず。

●而して又た千煉を經たる匕首の如く、銳利簡明を極むるも亦た妙。

●要は其の才氣を見る。其の勇氣を見る。其の識量を見る。而して併せて其の志を見るべき也。

●聞說、江木衷の大學卒業試驗に、民法なりしと覺ゆ、五箇の問題を與へらる。其中の一は、應用に屬し、他は講義の中に在り。

●彼、唯一の應用問題に向つて力を盡し、其の餘の四問は、「講義筆記中に在り」として、全く之を省略す。而して、試驗官彼に報ゆるに百點を以てす。

●銳利簡明の文章は極めて難し。自由自在の文才は寧ろ得難からず。殊に輓近の趨勢に於て然りとす。

●吾輩の知る處を以てすれば、絕好の答案一あり。其の筆者と試驗官と共に之を忘る。

●問題は西洋史にして「サーモピレー」の戰を記すにあり。

●其の答案の劈頭、實に破天荒といふべし。曰く、「敵、險を恃んでサルモピレーに據る…

●滔々千言、戰を記して絢爛の致あり。風雲開闔、殺傷無數、太平記の妙處と雖も過ぐる能はず。而して、全篇一の固有名辭を著けず。

●戰を以て始まり戰を以て終る。而して誰と誰との戰爭なるやも知る可らず。試驗官嘆稱して、之に及第點を與ふ。

●彼の筆者は稀覯の才筆と謂ふべし。想ふに、此の才を以てして、今恐らくは、文壇に出でざること無かるべし。

●「安祿山は支那の中央に聳ゆる高山也」の答案は、人

皆知る。彼、筆者及第の見込無きを知つての悪戯のみ。

●少年學生に至ては、眞箇眞面目の滑稽を演出する者少からず。或は曰く、某處の中學の試驗問題に「消長」あり。某生は之を藤原消長と訓じ、某生は之を消防長と解す。

●豈啻、學生のみならんや、試驗官の逸事、往々、傳ふべきもの無くんばあらず。

●某農學士、極めて物草太郎也。一々答案を點檢するの煩に堪へず。則ち紙を採り、拇指と人指とを以て之を彈きて、空に向つて飛ばす。點數は、其の飛騰の高低に比例す。

●某大學事務所、某博士に向つて、成績報告を促がす。

●博士、電話を以て之に答ふ。曰く、第一八十、第二七十、第三八十、第四七十、第十三、第十四云々。事務員蒼惶として、暫らく中止を求む。

●事務員やがて還り來て曰く「お待ち遠ふ樣、受驗者は十二人だけです」「ソウカ、ソンナラ十二人だけにして置け」

●蓋し奇問奇答の供給地は、高等文官試驗ならずんばあらず。

●場屋に立つは戰場に臨むが如し。混戰するに及んでは茫然として敵を見ず。

●其の中、心裏一點の餘裕ある者、則ち能く他の意表に出てゝ勝を制す。拘泥する者は、他に致さるゝ也。

其 六

●帝都の暑熱未だ堪へ難きに至らず。萬卷書裏、細かに會心の人と語る、則ち炎氣を拂ふて餘有り。

●帝都を俗惡ならしむるものは自動車ならずんばあらず。

●自動車の奔る處、煙塵滾々として、途上の兒女を埋め畢る。暑氣實に自動車の轍跡より湧くを覺ゆる也。

●日本の道路は、未だ自動車を用ふるに早し。自動車は徒らに安寧を害し、風趣を損す。

●自動車は狹巷には入らず。風の戸隙を窺ふが如く、到らざる處無きは、バン／＼の呼聲也。

●或は曰ふ、バン〳〵は亡國の音ありと吾輩は必ずしも然か信ぜず。然れども、バン〳〵は呼聲の最も俗惡なるもの也。

●活動寫眞は十五區に滿ち、バン〳〵は八百八街に充つ。趣味の下落といふと雖も、亦た實に時代精神也。

●巧利を專一とするが故に、自動車流行し、生活難益盛にして、バン〳〵の呼聲熾を爲す。

●此二者を合して、「安くして重寶」の精神を代表するもの、活動寫眞也。

●而して吾輩の書齋、自動車の煙塵に侵されず。而してバン〳〵の呼聲に見舞はるゝを免るゝ能はず。

●若しそれ自動車響かず。バン〳〵聞こえざるの地、靜かに書齋を經營するを得ば、山氣海風いづれも惡しからず。

●帝都を去つて避暑するの味は、則ち此に存せずんばあらず。

●伯大隈の自動車に對照すれば、棚橋絢子等の徒歩主義は、隔世の感無くんばあらず。

●然りと雖も、徒歩主義は趣味也。夏の紅塵十丈、テク〳〵の中自から樂ある也。

●趣味は寒暑を沒却す。博士富井政章の咖啡に於ける如き、又た一好例たるを失はず。

●富井は碩學にして其人穩健の風あり。而して日本に於ては、殆んど第一等の咖啡客たる也。

●彼、巴里より其の精良品を取寄せ、食後、自ら之を煮る。點々滴々、四十分經て、滿杯の咖啡を得る。

●三伏暑中、彼は一室に籠りて流汗淋漓として、咖啡の一杯を造る。咖啡成るの時、身は鼎中に煮らるの感無くんばあらざるべし

●故に彼に咖啡の一杯を饗せらるゝもの彼に向つて、光榮として感謝せざるはあらず。

●富井は滿身の流汗拭ひもあへず。悠然として一杯を喫するのとき、淸風忽ち兩腋に生ずるを覺ふといふ。

吾輩今夏、大學のコートにサンマーパーチイを遣らんことを期す。而して來るべき筈の靑年諸君暑に苦んで來らず、吾輩髀肉〳〵らに生じて、想散漫として文章を爲す可らず。辛ふじて舊約を果たす。夏天早朝、淸新の氣樹梢に滿つ。而して花壇の一隅クローバーの紅花靜かに香を放つ。唯ラケット嚢中に放置せらるゝを嘆ずるのみ。

黑頭巾記

次號說苑欄豫告

次號の本欄には黒頭巾の「趣味の人」、敬四郎の「世界一週記」の續稿の外

泡鳴氏の文藝觀及び人生觀を論ず

王堂學人　田中喜一

といふ百枚以上の大論文掲載せらるべし。

此廣告によりお申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

御奈良天皇恩賜
本派本願寺所藏

宮内省御歌所寄人　坂正臣先生序
宮内省御歌所寄人　大口鯛二先生撰及跋

三十六人家集寫眞帖

裝幀用、コロタイプ印刷、用紙菊倍判、純良鳥の子、奉書、江戸川別漉、上質洋紙等各種　一組六十葉特別實價金拾圓（但用帋鳥の子に限り一圓増）
遞送料金貳拾四錢（但東京市内無遞送料）

本帖歌集の原本は、藤原氏時代の舊物にして、長年月の間幸にも蠹魚の災を免れ、料紙の下繪に聊かの變色剝落なく、墨痕亦淋漓たれば、寫眞印刷極めて鮮明にして、一帖の裏、直ちに平安朝時代の書と畵とを併せ見るを得べし、其の如何に天下の貴重品なるかは、乞ふ左の撰者の跋文に就きて知らるべし、本帖は本願寺に乞ひて百部を限り、世の仝好者に頒つものなれば速かに申込まざれば、直ちに賣切となるべし

大口鯛二先生の跋に曰く

去明治二十九年の八月、おのれ賜暇にて、京都に遊びたりし頃、故明如上人の許にありて本願寺の庫裡に藏せらる〻古書ども、これかれ取調べし中に、家集と外題したる一函あり、ひらき見れば即ちこの三十六人家集三十九帖なりけり。筆者の名もなく、傳來の故由もみえねど、その書は、道風、佐理、行成の三蹟をはじめ、公任、俊頼などの筆蹟とおぼしくて、料紙など、目もあやにいみじうめでたければ、先うちおどろかれつ〻、かく貴き天下の寶物を、なにとてよのつねの圖書の中に、うちまじへてはおかれたるならん、といぶかりあやしみつ〻（中略）時なるかな、時なるかな、天文日記とて六十餘卷あるを

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

上人がとうでられては證如上人（光教）の自筆にかゝる座右日記なり、見ずや、といはるゝまゝに、まづそか中なる一巻をうけて、ひらきみしに、そのはじめ程に、ふと目にたまりたるは、左の一條なり。

天文十八年正月

二十日從禁裏以女房奉書三十六人家集令拜領、門跡經乘へ以御書被仰越候、僧正事來二日以前御申沙汰有度下由被仰候。

天文は、後奈良天皇の御代なり、これなり〳〵、此の時拜領の御品こそ、この三十六人家集なりけれ、六十餘巻の日記かたはしより見もてゆかば、數日を費すべきを、たま〳〵何心なくひらきみつるその一巻の初にしも、この事を見いでたるは、まづ不思議の縁なるに、明如上人が、その事ともなしに、見せたまひし日記の中に、この事のまさしく記されてありしは、全く本書の世に出づる時到來せるにて、證如上人のみたまの、暗に示したまへるわざにこそ、とかしこくおぼえたりき（中略）やがて上人より本書を借受けて、東京にたづさへかへり、ひろくその道の博士等にも見せて、その説をもとめしに、誰も未だ見聞せさる珍書なり、寶物なりとて、ひたすらおどろきたふとむばかりなりけり、（中略）本書はかくの如く、後奈良天皇恩賜の由緒貴き平安朝の舊物にて、世に傳へたる三十六人家集中の最古最良の證本たるのみならず、その筆者は前に記せる如く、本朝三蹟とたゝへられたる能書たちの筆もまじり、その料紙は、後世にもたぐひを見ざる結構にて、藤原氏全盛時代の美術の粋を鍾めたる物なれば、美術家の參考品としても、無比の重寶たるものなり。本書中の一片にして、またく世に傳れるは、千金の價値あり、然るに、西院天皇の返させたまひしより後、二百餘年の間塵埃のそこに埋もれて、しかも蠹喰のうれひなく、今日に至れりとは、おもへども〳〵不思議の至ならずや、おのれはからずも、これを發見して、かく世に紹介することを得しは、實におのれが一生のさいはひにて、うれしともうれしきことのきはみになん。本書一たび世にあらはれて、古筆家の從來の鑑定を一變せしめたること、又本書の料紙の下繪その、切り繼、破り繼、重ね繼などの製によりて、美術家の意匠を啓發せしめたる力の頗る大なることなどは、既に洽く世に知られたれば今又いはず。又おもふに本書のかくの如く貴重なること、もしはやく世に知られてありしならんには、かの戰亂の時代などに、よからぬものどもありて、いかにもてはふらかしけんも、はかられざるを、なか〳〵に絶えて知るものなかりしは、今日まで滿足に傳はれるもとゐなりけんかしとにもかくにも天下の至寶なれば、神佛の加護ありしなるべし（中略）又本書は、もと御室關白道長公の意匠になりて、上東門院の御遺物ならす、と紫式部の日記によりて、おのれが思ひよれることゞもは、坂ぬしの序文にもいはればあらしつ、さてこの寫眞版は、故明如上人世にいまそかりしころ、本書を見ることあれはざる人にも、ひろく見せ、又おのれらが手習の本にもせまほしとて、おのれせちに上人にこひきこえて、一帖のうちより、一葉二葉あるは五六葉あるはまでづゝえりいで寫しとり、かくはものしつるなりけり。

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

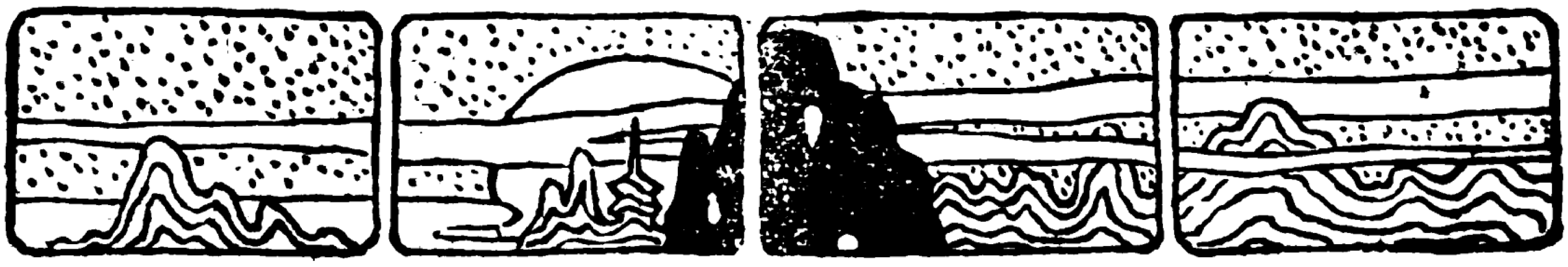
▼○一冊 定價五拾錢郵税金四錢▲

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとするも、都會に出て、親しく其準備をなし能はざる青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四料目の內、日本學生の最も誤り易きもの、又は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を斟酌して、假りに**試驗問題**に**擬**し、別に**詳密叮嚀**なる**解釋**を附せられたるものにして、問題の數實に**七百以上**に及べり

されば、一航英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の內に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 **反省社出版部**
（電話下谷九百十九番）（振替東京三十四番）

發賣所 東京堂 上田屋 東海堂 北隆館 三共社等其他



離合

森田草平

一

夏の日の夕暮てある。嘉一は街道を眞直ぐに走つて來て、一軒離れたおせいの家の裏口から飛び込んだ。一寸四邊を見廻したが、土間の竈の下に、桑の木の榾が燃え差して、白く灰に成つてるのが見える許りて、家中に誰も居ない樣子てある。大方おせいは鍋を掛けたまゝ、汁の實に茄子てもチ切りに行つたのてあらう。

それを見ると、嘉一はやゝ氣勢を挫かれたが、こんな時に聲を出して呼んで見ると云ふことはしない子だから、其儘のそ〳〵と表の方へ出て行つた。庭には蠶飼の蓆が放り出したまゝ、山の樣に積んてある。いきれ臭い香が鼻を突く。そこを通つて、庭の端にある池の傍へ行かうとした。池と云つても、道普請の時に土を取つた跡が、水溜りに成つてるだ

けに過ぎない。池の縁に太い柳の樹があつて、其下にいつも川魚を入れて置くふねが繋いである。おせいの亭主は村の番多て、夜番と墓掘りが仕事であるが、其合間には漁師もやつて、捕つた魚は、此ふね――と云つても、四角な箱に幾つも小さい穴を開けたものであるが――其中へ鯉だの鮒だの、鰻だの鯰だのといろ〱ごつちやに入れて置く。嘉一は何日もおせいの家へ來るたびに、其の側へ行つて、蓋を取つて覗いて見い〱した。て、今もそこへ行かうとしたが、不圖見ると、汗ばんだ、土埃まみれの襯衣に股引を穿いた男が、自分よりも先きへ池の端にひとり突立つて居た。今畑から上つて來た所でもあらう、土の着いた鍬を杖にして、凝乎と空を見上げてゐる。元から知合の彦作といふ作男だが、嘉一は如何云ふものか此男を怖がつた。彦作は村でも中身上の百性の家に生れたのだが、可憫相に生れ附きの唖て、其上兄弟が八人もある。だから子供の時分から内でも始終邪魔にされながら大きく成つた。今年幾歳に成るのか當人さへ知らない。とにかく一番上の兄にはもう嫁に遣るほどの娘さへある。彦作は次男て、其弟どもは分家するのもあれば、町へ出るのもある、中には水兵を志願して行つたまゝ歸つて來ないのもあつて、末の三人を除けてはそれ〱片が着いたのに、自分だけは未だ兄貴の食客で居る。それだから農業の忙しい時分には、内て扱き使はれる許りてなく、他所へ日傭にも出される。兄も餘ンまりなと云ふ者もあつたが、當人は結句其方が氣樂だと思つてるらしかつた。おせいの家は人手が少ない上に、亭主が、も一つ浪花節語りを稼業にしてるので、畠のことは始終彦作を頼んで置いて、すり耕作をして貰つた。今日も一日傭はれて來て居たものらしい。

嘉一は遠くの方から怖々男の背後を廻つて、柳の樹の下まで來た。幾度も窃む樣にして、彥作の容子を振返つて見たが、傍に誰が來たとも氣附かないのか、何時迄も無心に空を見上げて居る。ぐつたりと頰の肉が垂るんだまゝ、枯木の樣に動かぬのが眼につく。それに斯ういふ片輪には免れないと見えて、ひどく色澤が惡い。つまり口が利けないのと、人が相手にしないのとて、此世へ出てからまるで單りで、他人と交渉なしに生きて來た。その底の知れない寂しさが、こんな折に顏へ現れるのだらう。勿論當人にも分らないだらうが、此木の株の樣な頭の中に眠つてゐる人間の靈が、遠い空の彼方の或物と冥合してるやうにも思はれる。

嘉一はそんな事は知らぬ。たゞ引附けられ相に氣味が惡かつた。成るべく眼を反しては、池の中を見た。黑い水の底に、空の白い雲が綺に映る。久らくそれを見詰めて居たが、又氣に成るので彥作の方を振回つた。彥作はまだ元の姿勢のまゝて動かない。

「嘉一たま」と、おせいが家の中から呼んだ。

「何しとるぢやな、そんな所て。」

「うむ」と云つて、振向く。おせいは芋振籠を下げて、戸口に立つて居た。

「此方へおんされや、好え物上げますに。」

大柄な女て、人の顏さへ見れば、何か上げませうと云ふ。滅多に吳れたことがない。

「何だい」と云ひながら、嘉一は澁々立つて行つた。彥作も急に俯向いて、竹の箆て鍬の土を落し出し

た。

家の中へ這入ると、おせいは裾を絡げたまゝ、竈の前に踞がんで、濡れた鍋蓋の上で、ちよき／＼茄子を截つて居た。少時それを見て居たが、想ひ出したやうに、

「風呂が沸いたて、皆ンな入りに來てお呉れぢやと。」

「阿母さまがな」と、おせいは茄子を蓋ごと鍋の中へ打あけながら「有難うえも、又後に入らして貰ひに行きますわな。」

それから嘉一は又默つて、おせいが竈の下の榾をくべて、火を焚くさまを眺めて居た。おせいは片方て手を働かせながら、片方では、何か知ら仕ッ切りなしに喋舌つて居た。村でもおせい程仕方噺の上手な女はない。

そこへ街道を通る荷車の音が、ごろ／＼と此方へ近づいて來るやうに聞へた。

「阿父さだ」と、おせいは火箸を下に置いて聞耳を立てたが、「左樣に違ひない。」

「何處へ行つたの。」

「阿父さかな、阿父さはなも、遠い所へ稼業に行つちよつたわな。」

嘉一は裏の方を覗くやうにした。

がや／＼と男や女の聲がしたかと思ふと、車の音が裏口で止まつた。

「それ、矢張阿父ぢやつた」と、おせいは別に立上らうともしなかつた。

日に燒けた毛脛に、土埃まみれの白足袋を穿いた男だの、鳴海絞りの浴衣に山の擦れた繻子の帶をして、手拭を被つた婆さんだのが二三人どや〳〵と這入つて來た。其中におせいの亭主も居た。

「早かつたね、道中は暑かつたら。」

「暑かつた、〳〵」と、浴衣の婆さんは日和下駄を脫いて、脚絆を穿いたまゝ、長火鉢の前へにぢり上つた。

「何にせい、昨宵郡上を打上げると直ぐに立つて、夜通してく〳〵歩いて來たんぢやものな、全く遣切れんとは此事ぢや。」

「そんなら旅先の興行も思はしなかつたんぢやな。」

「散々さ」と、打捨るやうに云つて、婆さんは眇をぎろつかせた。

おせいは若い者が荷車から卸す行李を受取つて、一つ〳〵戶棚の中へ運んだ。行李の中には見臺だの、三味線だの、後幕だのが入れてある。婆さんは一座の三味線引きに成つて、隨いて廻つたので、外の者がせつせと荷物を片付けてるのに、自分ひとり帶の間からよれ〳〵の煙草入を出して、頰邊を凹ませながら、すぱ〳〵煙草を吹かしてゐた。

やつと荷物も片附いたので、亭主の駒吉は眞中にどつかと腰を下したが、澁い面をして口を利かない。

おせいも怫とじたが、それても思ひ返したと見えて、

「阿父さ、新家様に風呂が立つた相ぢやに、其足で一風呂浴びさして貰つて來なさらんか。それとも内で行水の湯でも沸かそかね。」

「うゝむ、何方でも可えわ」と、駒吉は不興氣に口の中で云つたが、椽側に立つてる子供の姿を見ると、急に相好を崩して笑つて見せた。

「嘉一たま、學校は如何ぢやな、もうお休みに成りましたかなも。」

嘉一はたゞ頭振を掉つた。

「お前達は如何ぢや、一風呂浴びて來ては。」

駒吉は背後を向いて、三味線引きの婆さんに云つた。

「左樣ぢや」と、おせいも言葉を添えて、「お花さ、お前嘉一を連れて行つておいでな。知つてぢやろ、新家さんは。」

「俺か、俺はまア………。それよか疲勞れたて、早う寢たいわな。」

おせいは大聲に呼んで見たが、若い者は其邊に居なかつた。て、夕飯の膳でも拵へる積りか、ひとり勝手の方へ出て行つた。

その後へ池の方から、丑松は濡れた足に下駄を突かけて上つて來た。

元來駒吉の家ほど、諸國の渡り者が集まる所はない。一月に一人や二人は、えたいの分らぬ人間がたよつ

て來て、大抵寄食者に置いて貰ふが、それが短かいのは十日、永くて二箇月位居ると、又何處かへ行つて仕舞ふ。其の中でもこの丑松は、こゝ半年許り居着いたので、今ぢや浪花節の前坐を勤めてるのが、始終無器用だから駄目だと云はれ通しだ。お花といふ三味線引の婆さんも何日頃から來てるか分らんが、何でもおせいとは大分舊い馴染らしい。その外、何日かも越前から山越しで來たが、腹が減つて耐らない、一飯だけ惠んで呉れと云つて草鞋を脫いだまゝ、一年餘り居た男もある。又丹波國の石屋だといふ夫婦連れが半歲許り厄介に成つて、其間に子供を生んだが、それを置去りにして行つて仕舞つたこともある。こんな風だから、亭主は亭主で稼ぐし、おせいも取上婆をして、夫婦で好え錢を儲けるが、年中風車で、借錢許り拵へるから、物堅い檀那場では受けが惡い。唯一軒嘉一の母親のおきさ後家だけは、人が好いので、何時でも錢を借して呉れる、餘り度々で錢の言ひ出しにくい時は、飯米を借りに行く。そこで家中が繁々出入りするから、嘉一も退窟に成ると、何日でもおせいの許へ遊びに來た。渡り者のいろんな噺を聞くのが面白い。大抵は夜中に山越しをして、狼に送られたとか、娘を江戸の吉原へ賣りに行つて、戾路に箱根の山で胡麻の蠅に隨けられたとか、嘘とも眞實ともつかぬ樣な話ばかりだが、それでも子供の好奇心を滿足させるには充分だつた。それに外の百姓家では、カンテラの油煙に黑く成つた行燈の下で、家中が氣六かしい顏を並べて夕飯を濟すと、別に談話をする種もなく、ごろ〳〵と寐て仕舞ふのに比べて、旅から旅へ掛けた渡り者が明日のことも氣にせず、喰ひたいだけ喰つて、寐たいだけ寐るといふ呑氣な狀態が、子供にも活々して面白く思はれたのだ。

今夜も灯火が點いて、駒吉を始め、家中の者が鍋を眞中にして、胡坐をかいて、夕飯の箸を上げた時まで、嘉一は別に歸らうともしないで、椽側に腰掛けたまゝ、皆ンなの話に耳を傾けて居た。家の周圍からいろんな蟲の鳴く音が雨の樣に聞える。不圖、薄暗い土間の隅に、啞の彦作が賑かな此方の群を離れて、一人むしや〳〵と茶碗の中をせゝつて居るのが眼に着いた。

夕飯がすむと、皆ンな椽側へ出て、はた〳〵と團扇を使ひ始めた。丑松は何時の間にか姿を隱した。黑い叢の上で、ぽかりと花火らしいものが光つた。つゞいて微かな音が聞える。

「段の島かな、今夜の花火は。」

「今日は何日だ。」

「川祭も最う直きぢやぜ。」

「駒さ、歸つてお出たない」と、尻をまくりながら暗がりから出て來た男がある。

おせいは一人勝手にカンテラを點火して、茄子の切つたのを糠味噌の中へ漬け出した。嘉一も側に立つて、暫らくそれを見て居たが、おせいは急に糠だらけの手を上げて、

「誰だ、〳〵」と續けて云つた。少時耳を澄したが、「え、誰ぞ呼んだかなも」と、嘉一の顏を見る。

「誰も呼びやせんぢやろ」と、嘉一は曖昧なことを云つた。

其下から、裏の方で、「阿母ア、〳〵」と、二度許り續けて呼ぶ聲がした。おせいは矢庭に裏口へ出て、戶外を覗いて見た。

「ま、お重ぢやないか」と、いきなり大きな聲を出したが、直ぐに又聲を低うして、「如何したぢや、え、お前まア如何して來た。」

斯う云ひ〳〵おせいは戸外に居る女の側へ寄つて行つた。壁にもたせた葭簀の蔭で、二人は少時ぼそ〳〵と談して居たが、

「ま、此方へ這入らつしやい、誰も氣の置ける人は有りやせんに。」

おせいは先に立つて土間へ這入つた。後からつゞいて這入つた女は、服裝も此邊には見慣れぬ女で、お白粉を塗つた顏の白いのと、髮の濃いのが眼に立つ。

「一寸此處に待つちよいて、阿父さを呼んで來るに」と、云ひ捨てゝ置いて、おせいは遽てゝ椽側の方へ行つた。

「あの」と、女は後ろから呼んだが聞えなかつたらしい。

大勢の居る椽側からは、土間に立てた衝立のために、此方の姿は見えない。女はそこに居る嘉一が可訝な顏をして、ぢろ〳〵自分の姿を見てるのに氣が附くと、につこり笑つて見せた。齒並の好い女だ。

嘉一は此女が這入つて來た時から、これがおせいから時々聞かされた、靜岡の二丁町とかへ賣られて行つた娘だらうと思つた。おせいは能く娘に逢ひに行つた時の樣子を話した。花魁の着る裲襠が見事なことだの、座敷が立派で廣いだの、まるで芝居で見る殿樣の館の樣な話をして聞かせた。それにおせいは仕方話が旨いから、聞いたゞけでも眼に見るやうで、嘉一は逢はぬ先きから此女のことは大概知つて

居た、初手から始めて逢ふ様な氣がしない。そこへ女が笑つたので、釣込まれて自分も笑つた。女お阿か云つたが、何を云つたのか分らない。

そこへ駒吉がきよと〳〵して、おせいと一緒に遣つて來た。

「阿父さ」と、女はいきなり親爺の側へ寄つて行つた。

「お重」と云つたまゝ、駒吉はしばらく默つて居たが、「まア可えわ、出て來たものは仕方がない。さ、此方へ這入れ。」

「伴侶があるとさ」と、おせいは亭主の眼を避けるやうにして云つた。

駒吉は又澁い顔をした。

「辻に待たせてあると云ふんぢやが、兎に角此方へ來て貰ふが好えぢやろ。」

「左様さな。」

「どれ、俺が云つて呼んで來やう」と、おせいは襷の着いた手に手桶の水をかけて、前垂で拭き〳〵出て行つた。お重も後から走つて蹤いて行つた。

暫くすると、二人が戻つて來たが、それと一緒に若い商人らしい男が這入つて來た。駒吉は其男の頭の上からおろ〳〵見下ろして居たが、やがて、

「此方へお這入んなさい」と、無愛相な聲で云つた。

「へ」と云ふ許りで、男は女の蔭に成るやうに身を縮めて居たが、「どうも此ン度は申譯も有りませ

ん。」

「兎に角座敷へ上つて貰ふが可え。」

「お前さん、此方（こつち）へ」と、おせいが先へ立つて連れて行つた。

長火鉢の側に三味線弾きのお花が眠りこけて居るだけで、村の男は歸つたらしい。洋燈の下に坐つた顔を見ると、女は富士額の稍せゝこましい所はあるが、輪廓の正しい顔で、殊に能く其眼が働く。男は俯向いてるから分らない。

嘉一は何氣なく椽側まで隨いて來たが、急に内へ歸りたく成つたので。

「おせい、もう行くぜ」と云ひ捨てたまゝ、ばた〳〵と驅け出した。中では聞えなかつたらしい。庭の柿の樹の側まで驅けて行くと、其蔭に立つて居た彦作に突當り相に成つて、よろ〳〵と蹌（よろ）けた。彦作は暗い所に身を屈（かゞ）めて、明るい座敷の樣子を見て居たものと見える。

二丁許り直走りに走つて四辻（よつつぢ）まで來た。これから路が寺の藪蔭へ這入るので、嘉一はいつも此處を通るのを氣味惡がつて居た。二本並んで立つ太杉の梢がいやに黒い。

嘉一は一散にそこを走り拔けた。間もなく村中（むらなか）の自分の家へ戻つたが、風呂を焚く煙が庭に渦を卷いて、屋根の上へ立上ぼるのが、夜目にも薄あかく見えた。おさきは近所の上さん達を相手に何やら話して居たが、嘉一は何にも云はないで、ひとり寢床へ這入つた。

一寢入りして眼を覺す頃でもあらう。おせいは一人風呂へ入りに來て、臺所で何やらぺちやくちや喋

言つて居た。
「へえ、左樣かえ、そりやまア好えわ」と、おまさの感心したやうな聲が聞えた。
「そんな譯でしてなも、向ふも滿更へたな家から來てるんでも無い樣だし、靜岡でも名代の下駄屋ぢやつたが、彼娘のために入れ上げて仕舞つたと云ふんでなも、折角隨いて來たものを直ぐに追ひ出しも成らんし、ま、如何成るか知らんが、當分あゝして置いときますわいな。」
「それが好え、それよか仕樣がなかろ。」
おせいは未だ何か云つてる樣だつたが、そこ〳〵に着物を被つて戻つて行つた。

二

四五日は嘉一もおせいの許へ行かなかつた。其間に、おせいの家ではおやま屋から追手が來て、揉つた揉んだとごてついた上句、如何にか借金の話も附けたと見えて、追手も事なく歸つて行つた。それからと云ふものは、急に娘が戻つた上に、婿まで出來たのだから、おせいは毎日そは〳〵して暮した。今迄も一口に新平民だと云はれるのを苦にして、亭主は番太だが、自分の生れはれつきとした百姓だと云ひ〳〵した。在所は遠方だから誰も見て來た者がない。そこで面と向つては、誰も左樣ぢやないと云ふ者もないので、飽迄それを云ひ張つて來た。それが今度は自分のことを差措いて、大ッ平に婿の自慢をして歩く樣に成つた。靜岡で名代の下駄屋だつたと云ふことが、何度となく繰返された。それから花町と云へば、二丁町切つての賣ッ妓で、一夜喚ぶには何れだけの金子がかゝるとか、暗に此邊の百姓の分際

ては及びも附かぬことだと云ふ意を仄めかせた。それからまた二丁町と云へば、江戸の吉原の本元で、昔は七ヶ町在つたのを將軍家のお許しを得て、二ヶ町だけ殘して葭原へ移したから、今でも二丁町と云ふんだと云ふ樣なことまで、おせいが自慢の種子に成つた。村の若い衆がおせいの家へ寄つた時などは、婿を前に置いて――男の名は岩吉と云つた――そんな話を始めることもあつた。そんな時は岩吉は只側を向いて苦笑ひして居た。見た所氣の利いた、怜悧さうな人間で、女に迷つて、こんな所迄隨いて來て厄介に成る男とも見えない。それに腰が低いから、村の百性には皆ンな愛相を好くした。元々あんな稼業に出てた女の身元が好いとも思つて來なかつたらうが、まさか穢多のたぐひだとも思つて居なかつたと見えて、それと分つた時には多少いやな心持もしたらしい。勿論顏には出さぬが、何うも尻の落着いて居ない所があると見えて、おせいは最初からそれを氣にして、無理にも引留めたいと、一層手を置いてちやほやした。が、それも經濟上の逼迫には敵はない。岩吉も毎日手を束ねて遊んでる間には、自分でも氣が引けるし、おせいの方でも、これには首を傾げるやうに成つた。そんな事から段々氣まづいことも有つて、平常は好いが、心易く成るに連れて、何か顏を顰め合つた時なぞは、互の心の中に蟠まりが生じない譯には行かなかつた。

一人そんな事に無頓着なのは、當人のお重であつた。十七の歳から身を賣つて、六七年も苦界を勤め拔いて來たのだから、男なぞと云ふものには土臺興味がないのだらう。偶さか兩親や岩吉の悶着を傍で聞いて居ても、まるで他人事の樣に思つてるらしかつた。何の爲めに一緒に逃出してまで來たのか分ら

ない。と云つて、格別男を有つて無しにすると云ふのでもない。朝夕の世話は、普通の女の氣が附かぬ所まで氣を附けて、骨身を惜まず働く。それに此女は泥水をくゞつた者に似合はない、お引摺のべたべたした所がなかつた。勿論着物は來る時にすつかり脫いで、着のみ着のまゝて戻つたのだが、それにしても、有合せの手織木綿に仔細らしい襷掛けして、明くる日から畠へ出た。桑も摘んだ、蠶も飼つた。雨の降る日は、大きな聲て粉挽歌を唄つて、ごいごいと石臼を廻した。こんな時は、いつも嘉一を傍へ引附けて置く。嘉一はたゞお重の側へ行くのが嬉しかつた。若い美しい女は子供の心さへ惹くものだ。お重の方でも、年の行かぬ子供が分別もなく自分に懷くのが賴母しい。嘉一はお重さへ呼びに來れば、何をしかけて居ても、放つて置いて走つて行つた。川へ行けば、川へ隨いて行く、畑へ行けば、畑へ隨いて行つた。何處へても腰巾着の樣に隨いて行くので、おせいなぞは時々、

「嘉一たま、そんなにお重が好きなら、お重の旦那樣に成つとくれんされや」と云つてからかつた。

嘉一が妙な顏をして、極りが惡相にしてるのを見て、其處に居合せたものは皆聲を上げて笑ふ。お重までが一緒に笑ひながら、

「好いはなも、最うちやんと約束がしてあるから。」

斯う云つて、子供を抱へる樣にして、頰摺をした。皆ンなが又どつと笑ふ。

嘉一はこんな時に、いつも可厭な心持がした。何だかおせいなぞに自分の心の中の圖星を指されたのが口惜しい樣てあるし、又皆ンなが子供だから分るまいと思つて云つてることが、此方ぢやちやんと分

つてるので、それが何となく氣味が好い樣な心持もした。只こんな時にお重までが一所に成つて笑つてるのが不足で成らぬ。

　ともあれ、お重と嘉一とはこんなにして日に／＼仲が好く成つたが、格別人の注意も惹かないで濟んだ。所が只一人それを見逃さぬ男があつた。別人でもない、啞の彥作で、此男は最初から二人の樣子を見張つて居るやうに見えた。嘉一の方でも此頃は啞の眼が一層怖らしくなつたやうに思つた。つとめて傍へ近つかぬ樣にして、お重と一所に居る時でも、彥作が來れば、ついと側へ寄つた。そんなに迄して氣を揉んで居ながら、如何いふものか、これだけはお重にも云はなかつた。

　彥作がお重の跡を跟けるといふ噂は、直ぐに人の口端に上つた。不具だけに、どこか遣方も無細工で、人の眼に立つのだらう。

　恰度、其頃河原に大水が出て、中洲の小堤が切れたので、それを修繕するために、村の百姓が一軒から一人づゝ出て土持ちをしたことがある。彥作も矢張其日の人足にやられたが、朝少し後れたので、畚を肩に急いで行くと、先きへ來た連中が一圍りに成つて、何を談して居たのやら、一齊に此方を向いて、どつと聲を上げて笑つた。まだ面白相に哩々云ふ者もある。何を云ふのか、彥作には分らない。分らないだけに、早くも自分に對して惡意を持つてるんだなと感附いた。が、こんな目には毎も逢ひつけてるから、知らん顏して仕事にかゝらうとすると、若い者の仲間でも剽輕な奴がつか／＼と傍へやつて來た。手眞似で。

「お前、今日は顔色が悪いが、如何かしたか」と訊く。

彦作は只頭振を揮つた。

「うむにや、彦作は戀煩ひだよ。滅多に人にや云はれんわい」と、後ろの方から喚く。

「相手は誰ぢやい。」

「番多のお重さ。幾許思つても主ある女ぢや仕樣がないな。」

「待て、〳〵」と、一番先きの男が手を擧げて制した。それから又、何やら手眞似て話さうとしかけると、此時まで相手の顔を眼を据えて見較べて居た彦作は、急に棒を掴むで立上つた。今迄からかつてた連中は吃驚し飛びのいた。

「怒つたぞ。」

「それで打つ氣か。」

「打つなら打つて見ろ。」

遠方からこんな減らず口を利く。彦作は顔を火の樣にして、しばらく相手を睨んで居たが、又そろ〳〵と振上げた棒を下した。

それからは氣後れがしたと見えて、誰もからかはうとしなかつた。合圖の鐘が鳴る。皆ンな仕事に取かゝつた。土を畚へ入れる者はせつせと入れる。それを搬ぶ者は途中まで行つて、向ふから來た男に、肩から肩へ渡して、代りに空の畚を受取る。其の男が又向ふから來たのへ肩繼ぎをする。こんな風にし

て、人足が機を織る機に往き反りする。やがて一しきり仕事が捗取ると、晝飯になつた。皆ンな日に燒けた石河原の上に蹲踞むで辨當を使つた。彥作は故とひとり離れて、連中の方へ背を向けて居たが、前の男がにや〳〵笑ひながら傍へ這つて來て、いかにも親切相な風をして、手眞似ていろんな事を聞いた。

「お前は眞個あの女に氣があるか、氣があるなら俺が世話して遣らんこともない。高が向ふは新平民ぢやないか。村の百姓から養子に行くと云や、喜んで貰ふに相違ない。それに今居る養子は何んな事が有つても永く居る氣遣ひはない。それは俺が請合ふ。だからお前が眞實の心を明せ、屹度添はせてやるから」と云ふ樣なことを云つて來て、彥作が自分を見返したまゝ靜としてるのを見ると、愈眞顏に成つて、「それに就いちやアお重の許へ養子に行くと成りや、折角お前が大切に飼つてる青馬とも別れなきや成らぬ。どうも馬と一緒に婿に成ると云ふ譯にも行くまい。如何だい、お前は青馬とお重と何方が可愛いゝ。左樣だ、何よりも此奴から先きへ極めな成らんわい。」

　ひとり面白相にから〳〵と笑つた。彥作は此男の云ふことが解つたのか、解らぬのか、終ひには側を向いて、俯向いたまゝ顏を上げなかつた。男は一寸其顏を覗いて見たが、拔足て外の連中の居る所へ戾つて來て、ぷつと失笑した。

「可憐さうに、餘りいぢめるな」と、年嵩の一人が云つた。

「俺、何もいぢめやせんがや。併し考へて見や氣の毒なもんぢやなア、彥の野郎ぼろ〳〵淚こぼして泣いとるぜ。」

「ふうん」と、一人が又感心したやうに、「口は利けんでも女には迷ふもんかな。」

それを聞いて一寸默つて居たが、一人が笑ひ出すと、皆ンな一緒に成つて笑つた。不圖氣が附いて向ふを見ると、今迄居た所に彥作の姿が見えない。何處へ行つたんだらうかと四邊を見廻はすと、向ふの堤を斜かひに驅け上つて、一散に村の方へ走つて行く後姿が見えた。

何と思つたか、彥作は自分の家へ驅け戻つた。直ぐに厩舍の前へ行つて見ると、青馬は毎もの通り何か呉れるんだなと、馬偃棒の間ひから鼻面を出して、ふうふと太い鼻息を吹かけた。彥作は鬣の邊りを輕くはたきながら、飼桶の中へ秣草を投げ込んだ。又少し離れて手を腰へ當てゝ、立つたまゝ、青馬が大きな齒を出して、もり／＼、草を嚙む樣子を、眼も離さず、凝乎と見詰めて居た。左樣してる間に、段ゝ顏の筋肉が嚏をする樣に歪んで、ぴく／＼動き出した。これが此男の嬉しい時にする表情で、彥作は生れてから未だ人並に笑つたことがない。

青馬は隨分ふるく彥作の家に飼はれた老馬で、子供の時分には、田植に此馬を連れて行くと、能く其鼻面をとつて水田を掻かせたものだ。其時分から青馬は彥作に懷いて、今でも彥作に柔順なものは、家中で青馬だけだと云つても可い。他人から相手にされないだけ、彥作が青馬を可愛がることも一通りでない。隙間さへあれば、厩舍の前に立つてゐる。糟秣を遣る、毛並を揃へてやる。何か馬と話でもしてるやうに、半日位はそこを動かない。夜も厩舍に隣つた物置の樣な板の間で寐る。これは親爺や兄貴などが座敷で寢させぬ爲でもあるが、彥作は結句それを喜んだ。物置は明り取りに一尺四方許り壁土を落

して、壁下地の上へ反古を貼つただけだから、晝間でも薄暗いが、夏の夜などは殊に蒸暑くて堪らない。其上土埃は積り放題で、放かり隅の方へでも行かうものなら、蜘蛛の巣がべつたり顔にくつつく。澤庵漬の香もする、何とも分らぬ濕氣臭ひ香もする。それでも彦作は一向平氣なもので、壁一重隣りの厩舎では、青馬が夜徹宵羽目板をばたん〳〵と前足で蹴る響が、微かに身體へ傳はるのを覺えながら寐入つた。それ位だから、彦作が馬の氣分を知つてることは、誰にも眞似が出來ない。まるで母兒でも左様は行くまいと思はれ程、細かい所まで氣が附く。馬の方でも能く彦作の心持を呑込むで、云はれぬ先きから彦作の心の儘に動いて見せる。つまり彦作は人間の仲間から外れて、畜生とふたりで、全く別な世界を造つて來たとも云はれやう。

彦作はしばらく厩舎の前に立つて居たが、もう一摑み秣草を飼桶の中へ投げ込んで置いて、のそ〳〵と戸口を出た。用水に隨いて、寺の藪下の四辻まで來た。右へ曲れば、二たび河原へ出るので、左へ行けば、村外れのおせいの家だ。それを左へ取つた。街道の土が白く乾いて、歩くたびに土埃がぽか〳〵立つ。尻切草履を穿いた足の裏は焼けるやうに熱い。

おせいの許の裏口に立つて、家の中を覗いた。奥行の淺い家だから駒吉夫婦を始めお花や丑松まで、横に成つて午睡をしてるのが、一目に見える。土間を通り抜けて、戸口の柱の側まで來たが、ふと足が地面へ粘着いたやうに立停つた。

お重は一人柿の樹の下に立つて、屋根を見上げながら何か云つてる。上を見ると、廂に梯子をかけて、

嘉一が上ぼつて居た。樋へ眼を押つけて、頻に瓦の下を覗いては、又覗く。

「目つかつて。」

「未だ。」

「最うお止しなさいよ、殺生だから。」

「最一度此ン處を」と、嘉一は瓦の下へ手を入れて見て、「や、卵があつた、〳〵。」

「雀の卵が？」

「何だ、土の圓塊――」と云ひかけて、急に默つて仕舞つた。

「如何したの」と、お重が下から訊ねた。

「釘で、指頭突いた。」

「ま、だからお止しなさいと云ふに。早く降りていらつしやい。」

嘉一は直ぐに降りて來た。お重は側へ引寄せて傷を見たが、小さい指の頭からぶく〳〵と血が湧く。

「痛い？」

嘉一は點頭いた。

お重はいきなり傷を舐めた。後から新しい血が湧き上るのを見て、又指を口へ持つて行つた。

「最う痛くないだろ。さ、これて結へて上げませう。」

めりんすの下緊めを引裂いて、指の頭をからげた。

「さ、これて好し、〳〵、最う直つた」と、兩手て子供の手を握つて、口て吹く眞似をした。

左樣してる間に、背後てみし〳〵と云ふ音が聞へたので、何事かと思つて振向くと、彦作が梯子へ登つて、嘉一のしたやうに廂の下を覗いてゐる。やゝ惘れて、

「彦さ、お前さん何爲るの、そんな處へ上つてさ」と云ひかけたが、向ふには聞えぬと氣が附いたので、立上つて側へ行つた。

彦作は梯子の上から下を向いて、何やら頻に手眞似をした。何でも自分が代つて雀の卵を取つて遣ると云ふのらしい。お重も可笑しいのを耐へて、それなら最う可いんだからと、いろ〳〵宥めて漸と降りさせた。

お重は彦作の心の中も大方素振て讀んで居た。と云ふて、格別それを氣に掛けると云ふてもない。こんな女に成ると、男から惚れられると云ふことが、別段嬉しくもない代りに、又それが別段苦にもならぬと見える。彦作の顏を見れば、出來るだけ親切にもしてやつて、飯を喰へば傍に附いて居て給仕もして遣つた。そんな時に、男かもぢ〳〵して、顏赤に成るのを見て興がると云ふのでもない。つまり誰ても介はない、出來るだけ人の機嫌をとつて、喜ばせて遣ると云ふのが、此女などにや當り前のことなんだらう。

彦作はあつけらかんとして立つて居た。午睡の連中はまだ一人も起きない。不意に蟲の着いた熟柿が一つぽたりと落ちた。しばらく間を置いて、又一つぽたりと落ちた。閑かな白晝だ。

三

斯んな中から、おせい一人は始終岩吉のために氣を揉んで、如何かして引留めやうと骨を折つた。每日手を束ねて遊んで居るのも、當人に成つて見れば氣が置けることだらうと云ふので、何處で都合して來たのか、二百圓餘りの金子を拵へて、それを資本に夏蠶の繭の仲買をやらせて見た。岩吉もそれならばと、最初は大分氣乘りして商賣に取かゝつた。隨分骨身も惜まず働いたし、景氣もさのみ惡いと云ふでも無かつたが、偖て勘定を締め上げて見ると、薄資金の入費倒れがして、半分の餘も元を喰ひ込んだ上に、おせいがお直を手傳はせて、暑い眞中に骨折つて夏蠶を飼つたのさへ、何處へ行つたやら消えて仕舞つて分らない。後には蠶箔だの蔟だの繭籠だのと、二足三文のがらくた道具が少と許り殘つたゞけと云ふ始末で、これでは成らぬと思つたのか、內密で相場に手を出したが、見ン事元も子も無くして仕舞つた。それを聞いた時には、おせいも流石に好い顏をしなかつた。何かに附けて、

「商賣で損したのなら、是非がないで諦めると云ふこともあるが、相場見たいなものに手出しして、大切の金子を捨て與れたのが辛い。餘り人の氣も知らんと云ふものぢや」と云ひ出しては、愚痴を澪した。

おせいの事だから、それが又頻冗い。終ひにはお直も聞兼ねたと見えて、

「出來たことは出來たで仕樣がないぢやないか。又、それ程惜しいものなら、始めから金子なんぞ拵へて渡さぬが可いのさ。」

「それぢやて、何も、商賣で損したのが惡いと――。」

「そんな事は分つてるんですよ、餘り冗いからさ。」

時々親子てこんな喧嘩を始める。こんな時は岩吉もたゞ默つて俯向いたまゝ、顎の髯を一本づゝ指の先て引こ拔いて居た。

こんな風て、物の十日許りも續いた。ある朝、朝飯を濟まして、家中が火鉢の側へ寄つた時に、何と思つたか、岩吉は親爺の前へ出て、

「一寸眞面目に御相談したいことが有りますが」と切出した。

駒吉はしばらく相手の容子を眺めて居たが、

「何か知らんが、伺がふだけなら、兎に角承はつて置きませう。」

「さ、こんなに開き直つて申す程の事でも無かつたのですが」と、岩吉は言葉を途切らして、「先達てもあんな御迷惑をかけた樣な譯でもあるし、私も此上手を束ねて、何もしないで御厄介に成つてると云ふのも心苦しい次第で、此間中もいろ〳〵考へた上、兎に角一度臺灣へでも行つて、一稼ぎして來やうと思ふんですが。」

お重は椽側に腰掛けて、此方へ背中を向けたまゝ、小さい聲で鼻歌を唄つて居た。岩吉の云ふことも無論耳にや這入つてた。

「いづれお前さんも」と、駒吉は重々しい語調で云ひ出した。「それを云ひ出す迄には何も彼も能う考へた上での事ぢやらうで、それに就いちや、私からは好えとも惡いとも云へん。」

「だが阿父さ」と、おせいが背後から口を入れやうとする。

「お前は默つとれ、岩さにや岩さだけの考へも有らうわな。此方の都合だけぢや物は極らんぞ。」

「そりや成程内は番多の家さ」と、おせいは直ぐ涙聲に成つて、「それぢやと云つて、岩さも今日迄それ承知して居たのぢやないかな。」

「何も私が今そんな事を彼是思つて」と、岩吉は遮てゝ何か云はうとした。

「いや、お前さんはそんな事思つてぢやない。そりや私が知つとる。併しまだ若い身空で、こんな在郷の、こんな私の家の樣な所に、行末のことを思つたら一日だつて居れるもんぢやない。」

「そんな事云や、お重だつて矢張左樣ぢやないか。お前は暇さへ有りやお花のこと許り思つてるんぢやて、お重見たいなもの如何成つても好え氣で居るぢやろが、些たァ我兒のことも考へてやるが可え。」

「莫伽ぬかすな。」

駒吉が一喝すると、おせいはそれ切り默つて仕舞つた。少時三人の無言がつゞく。

やゝ有つて、「時に立つなら、何日立たうと思はつしやる。」

「それが――明後日か、其次の日の朝にてもしやうかと思つて。」

「明後日」と、おせいが眼をむく。

「明後日ても可えぢやろ」と、駒吉が云つた。

「臺灣と云や、お前さん、暑い國ぢやと云ふぢやないか。遠いぢやろな。」

おせいは染み〴〵云つた。

その話の間、お重は椽側に腰掛けたまゝ、とう〴〵一言も口を利かなかつた。別に云ふことも無いのだらう。

それでも、明日の朝立つて行くといふ前の夜は、一晩中寐ないで二人で何かぼそ〴〵と話して居た。翌朝夙く一ばん近い停車場まで送つて行つて別れた。

其日は何處に如何して居たのか、日が暮れて餘程經つてから、漸く内へ戻つた。

二三日して、神戸から船に乗つたといふ端書が來た。それから一箇月許りして、一度臺灣の基隆から便りがあつた。何とかの商店へ住み込んだから安心して呉れと云ふ様なことを細々と書いて寄越した。それ切り皆目便りがない。

お重は矢張元の通りにして暮した。此頃では日に焼けて、色も黒く成つた。見た所、身體も生き〴〵して、永くあんな稼業を勤めて來た女とは受取れない。嘉一は相變らず傍を離れなかつた。

其間に秋も過ぎた、やがて冬に成つた。

四

冬至に間もないと云ふ日であつた。お重が大根引に行くからと云ふので、嘉一も隨いて行つた。大根畠は河原を渡つて、村の三昧の後ろにある。三昧の林も冬枯れて、ごろ〴〵した石塔が見え透く。

嘉一はしばらく傍で大根を引いて見たり、荷車の後から隨いて走つたりした。やがて、それにも飽き

たと見えて、持つて來た鍬の上に蹲踞むで、土の着いた生の大根を嚙つた。冷たい汁が頸へ傳つて、口端が赤く成つた。風が寒い。

灰白い雲が空一面に蔓びこつて、日の光を遮ぎる。其下を鳶が一羽輪をかいて舞つて居たが、急に鐵砲の玉にでも打たれたやうに、ばた／＼と林の向ふへ落ちた。

「鳶が落ちた」と、嘉一は大きな聲を出して立上つた。「打たれたのぢやろか。」

「見てらつせ、走つて行つて。」

手に持つた大根を放つて置いて、駈け出した。林の向ふへ出て見たが、獵師らしい者の影も見えない。下は一面に長い芒の枯れたのが生えて居るから、何處へ落ちたとも分らぬ。しばらく立つて眺めて居たが、又すご／＼と引返した。墓場の中を通り抜けやうとすると、女竹の茂つた蔭で、黒い影が動く。どきりとしたが、直ぐ誰だといふことが分つたので胸を撫で下ろした。駒吉が稼ぎに出て留守なので、彦作が代りに墓を掘りに來て居るのである。村の中で又誰か死んだのだらう。嘉一はおづ／＼傍へ行つて見た。彦作は一寸嘉一の顏を見た切りて、又俯向いてせつせと穴を掘り出した。物も言はぬ、側目も振らぬ。恰も他人のために墓を掘りに生れて來た人間の樣にも見える。鍬の先がかしりと當るたびに、新しい土が盛上げられて、彦作の身體はだん／＼穴の中へ沈んで行く。嘉一は我を忘れて、何時迄も傍に立つて見て居た。

空合は一層險しく成つた。一面に盲人の白眼を見るやうな雲がかゝつて、氣味が惡い。日が暮れるの

か、四邊はじめ〳〵と薄暗く成つて行く。小さい雪が一片二片新しい土の上に溜つた。だん〳〵繁く降つて來た。空を見上げると、目に見えぬ高い所から、灰の樣なものが渦を卷いてゝつゝてと落ちて來る。

彦作は最う頭が見えない位深く掘り下げた。上から覗くと、穴の底に突立つたまゝ、鍬を杖に突いて、靜と身動きもしないで居る。嘉一は薄氣味が惡く成つたので、

「彦さ、もう掘れて仕舞つたかい」と訊いて見た。

固より聞へる筈がない。それでも嘉一は聲を戰はせながら、最う一遍呼んで見た。

「うゝ、わあ」と、唸る樣な聲が穴の中から聞へた。嘉一は思はず飛びのいた。

それと共に、彦作は下から鍬を放り上げて置いて、穴の緣に手をかけて上つて來た。その鍬を擔いだまゝ、がさ〳〵笹葉を別けて、細い徑を向ふへ出て行つた。雪はいよ〳〵降る。

嘉一は一寸其後姿を見送つたが、矢庭に駈け出して、お重の居る大根畑の方へ行かうとした。墓場の出口で、ばつたりお重が走つて來るのに出やつた。

「此方へ入らつしやい」と云つたまゝ、お重は嘉一の手を掴むで、釋迦堂の簷下へ駈け込んだ。

二人はしばらく其處に立つたまゝ、空を見上げた。風が止んだと思つたら雨まじりの霙に成つた。少時すると、又雪に成つた。藪は笹葉一つ動かない。

お重はそこに捨てゝあつた荒蓆を敷いて、其上へ兩膝を落した。大方此前の葬ひに使つたものであらう。嘉一もお重の膝に凭れて横に成つたが、指の先が赤く成つて、千切れるやうに冷めたい。齒の根が

つ〳〵口の中で踊つた。

「嘉一たま」と、お重が呼んだ。

嘉一はたゞ女の顔を見上げた。

「何故默つてらつしやるの、あら、戰へてあのね、此人は。さ、最と此方へお寄んなさいよ、左樣々々、お手々を姉やの懷へ入れて――些たあ暖かいでせう。」

嘉一はしつかり女の腰に抱かまつた。女も上から抱き寄せる樣にして、頭を袖で隱して與れた。二人とも其まゝ動かなかつた。左樣してる間に、嘉一はだん〳〵眼瞼が重たく成つて行く樣な心持がした。

「睡いの」と、お重は子供の顔を眺めながら訊いた。「お臥みなさいな、ね。」

嘉一は眼をねむつた。

釋迦堂の檐からぴしや〳〵と雨垂が落ち出した。だん〳〵薄暗く成つて行く。夜が近ついたのだらう。

嘉一は急に眼をぱちりと開いた。

「此處に居るの、何時迄も。」

「あゝ」と、お重はうつとりした聲で、「嘉一たまは嫌や？」

「居つても好えの、姉やさへ居りや。」

「あゝ何厭だ、〳〵」と一人で溜息を吐いて、「何處へも最う行きたくない、家へも歸りたくない。」

「何處かへ行くの、え、何處へ行くの。」
嘉一はむつくと頭を上げて訊いた。
「いゝえ、何處へも行かないの。」
「いやだ、行くんだ、〳〵。何處かへ行つて仕舞ふんだ。」
「まア、そんなこと訊かなくとも可いんですよ。」
「可かない、〳〵。」
「くどいのね」と、お重は突放すやうに云つたが、又氣を變へて、「それよか嘉一たま、嘉一たまが大きく成つて出世した時に、お重がお婆さんに成つて訪ねて行つたら、何處の隅にでも可いから置いて呉れるの、ね、置いて呉れないの。」
「うゝむ、俺は出世なんかしない。」
お重はしばらく默つて子供の顏を見て居たが、「左樣ねい、出世なんか――出世なんかしたくないわね。」
何と思つたのか、お重は兩手を子供の脊にかけたまゝ、何時迄も物を言はなかつた。
二人が村へ戻つたのは、とつぷり日が暮れて仕舞つてからで有つた。雪も小止みしたが、寒は仲々嚴しい。寺の裏まで來ると、向ふから彥作が提灯を持つて迎ひに來たのに出逢つた。嘉一はそこから彥作に負ばれて內へ戻つた。
おせいは娘の顏を見ると、

「何してたんぢやよ、今頃まで。あの兒は如何した。」

「あゝ、其處で嫂さに逢つたて、新家まで負んで行つて貰つた。」

それ切り何とも云はずに仕舞つた。

五

二三日して、お重の姿が村外れの一軒家に見えなく成つた。二丁町を身脱けする時に拵へた借金もあるし、それに岩吉が殘して行つた借金の期限も迫つたので、その方を附けるために、二たび大阪へ身を賣つて行つたと云ふことだ。

左様とも知らず、嘉一はその日一日、姉やは何處へ行つたと、おせいの側で云ひ暮して、待つて〳〵待ち疲いた。おせいも持てあぐんで仕舞つて、

「そんなにお重のこと許り云つちよらずに、些と裏の小座敷へでも行つて見んされや。丑松が力むて浪花節の稽古しとるに。」

「いやぢや、あんな物面白ない。」

「嫌ぢや仕様がないが、面白いぞな、野狐三次がいよ〳〵南の町奉行大岡越前守さまのお白洲へ呼び出されて――。」

「うゝむ、丑松は何時でも彼處ばつかり演つとるもの。」

「はゝゝゝゝ、左様かな、それぢや仕様がない。それぢや如何したら可かろ。」

嘉一も仕様がないので、漸々立ち上つて裏の部屋へ行つて見た。丑松は今日も煤びた障子の側へ見臺代りの箱を持出して、やけに貼扇を敲きながら、一日例の野狐三次を辯じてゐた。障子の方を向いてるから、嘉一が這入つて來たのも知らないで、

「かゝる處へばら〳〵と八丁堀の同心衆が驅けつけた」なぞと、夢中に述べ立てる。江戸の町の名ぢや、八丁堀と花川戸とが一ばん名高い。

日が下つたと見えて、此部屋の障子に日影が當り出した。飴屋の唐人笛が閑かに午后の村を西から東へ通つた。それから後、冬の短かい日影は釣瓶落しに暮れて行く。

その時、不意に喧ましい聲がして、子供だの大人だのが哩々云ひながら、裏の街道を走るのが見えた。犬まて一所に成つて駈る。

「鑑作ン許の青馬が死んだとい。いや、是から死ぬ所ぢやとい。今新田の馬醫者さま迎へて來た所ぢや。見に行かつせぬか。」

一人の男が、おせいの家の裏口から呼んで置いて、其儘ばた〳〵と驅けて行つた。

「何ぢや、青馬が死ぬ」と、丑松は思はず立上つたが、そこに嘉一が居るのを見附けて、

「嘉一たま、さ、行らつせ、連れてつて上げますに。」

いきなり子供の手を引張つて驅け出した。嘉一は引摺られる樣にして、喘ぎ〳〵隨いて行つた。

「馬が死ぬんか。」

「青馬が死にますとさ。」

「彦さ許の青馬がか。」

丑松はそれに返辭をしないで、直走りに走つた。大勢が前を駈けて行く。

西の山へ入りかゝつた日は盥ほどの大きさに見える。それが血潮の樣に眞赤に燃え立つ。俗に日輪さまのお煩らひと云ふのであらう。街道から畷道へ、村の人の黑い影がひとり曲つた。又一人曲つた。

彥作の家へ着いた時には、廐舍の前に大勢人だかりがして居た。がや〳〵と口々に喋舌つてゐる。嘉一は身丈が低いから、廐舍の中の樣子は見えないが、獸の苦しさうな呻聲だけは絶間なしに聞えた。何だか怖氣がして、一人後の方へ退つて立つて居た。

二人許り顏の垢だらけな子供が、後れ走せに駈けて來た。群集の後ろを彼方此方廻つて、何處かへ割込まうとしたが、どうも思ふ樣に見へない。其間に一人が、

「吉や、窓の方から見るぢやに、此方へ來い、〳〵。」

二人はばた〳〵と駈けて行つた。いきなり壁へ攀ぢ登つて、窓の棒に捕まりながら、廐舍の中を覗き込んだ。

「見えるか。」と、吉と呼ばれたのが下から訊く。

「見えた、〳〵、能う見えるぞ。」

「一寸除いて俺にも見せろよ。」

「や、靑馬が泡吹いてやがらア。荒繩で馬の腹縛つて、棒でこぢ起さつせるわ。靑馬が涙こぼして泣くぞ。横腹ア汗びつたこて、海嘯の様ぢやい。」

「俺にも見せろよ、おい。」

「誰だ、窓から覗くなア、」と、厩舎の中から怒鳴つた。「暗いに、除け〳〵。除かんと引叩くぞ。」

二人はばた〳〵と飛び下りた。頸を縮込めて向ふへ走つて行く。

「嘉一たま、何處に居るぢやな、見せて上げましよか」と、丑松が傍へ來て抱き上げやうとした。

「最う好えの、見たない、〳〵。」

嘉一は足を掉つて抱かれまいとした。

そこへ彥作が戸口から跣で走つて來た。手に棒を持つて迂路々々して居たが、又元の所へ戻つて行つた。少時すると、今度は手桶に水を酌むで下げて來た。びちや〳〵と濺しながら、人込みを分けて這入つて行つた。眼が血走つて、其邊に居る者は誰が誰とも分らぬらしい。

日は落ちて仕舞つた。ぽつ〳〵見物人が歸りかけた。

「助かるぢやろか」と、一人が云ふと、

「左樣さな」と、連の男が首を傾げて、「まア駄目ぢやらうな。」

厩舎の中も暗く成つた。

「灯火ぢや、〳〵」と、一人の男が喚めく。

五六人ばた〳〵と入れ違ひに駈け出した。

「此處に、〳〵」と、家の中から主婦さんらしい女がカンテラを持つ出て來た。

颯と風が吹く。カンテラの裸火はちら〳〵と搖いて消えた。

*　*　*　*　*

その夜青馬は死んだ。彦作は物置へ這入つて横に倒れたまゝ、明くる日一杯顏を見せなかつた。飯を喰ひにも出て來ぬ。娘が見に行つた時には、壁の方を向いて、眼を開いてながら身動きもしなかつた。

朝夙く、嘉一が寐起きのまゝ門の柱に凭れて居ると、向ふから彦作がやつて來た。髪が生びたので、一層惡蒼い顏を變に歪めて、うゝ、わあと呻りながら、手を擧げて傍へ近つく。嘉一は居縮められるやうな心持て、其儘靜として居たが、いきなり門の中へ逃げ込んでしまつた。（終）

楔

眞山青果

（一）

綿屋の棟上振舞に呼ばれて行つた親父が、酒の上から村の者どもと喧嘩を初め、頭に怪我したと知らせて來た時、助七は眞暗な納戸へ閉籠つて、壁窓の薄明りて、例の飯島氏の物理學の本を讀耽つて居たその前は茶の帳場格子を勉强場所に決めて居た。

片手て虫齒の痛を抑へながら夜晝それはかり讀んで居たものだが、小兒が煩さく饒るのと、人出入の度ごと好く戸障子の音にビツタラする、眞蒼になるほど動悸がたかぶるので、近頃は暑いのと暗いのを耐えて、暇さへあると納戸へばかり入り込みたがる。

丁度、季節の圍物、入質の夜具蒲團が壁際にギツシリ積重ねてあるゆゑ、その上に腰掛けると本を讀むだけの窓明りが上の重網戸を透して來る。居心も惡るくはない。

女房が來て怪我と聞かせたばかりて、助七は最う身體が顫えた。意地强く齒を食つて聲も出すまいと我慢する、頬骨のバリ〳〵する、顎の角張つた親父の顏が直ぐ目の先に出る。傷口の肉がはぜ開いて、

銀杏の匂に似た血がベトリと畳へ尾を引いた。「死ぬんだ、死ぬんだ。」とあの底錆びた野太い聲で腕き狂つて居る事だらうと、考へたゞけでも頭がボウッとして眼がボウと暗らく成つた。何樣か為何うもしたら好いのか、その見當さへまるで付かない。使の人を何うするを急立てる女房に返事さへ出來なかつた。

「何んだッて、然う俺の顔を睨み付けてるのさ。恐ない目だ。何んぼ馬鹿だッてそん樣にするもんぢやありやせん。」と愚鈍な女房は見るうちに脹れ切つて、足音荒らくガタヒシ出て行つた。

これほどの大變が起つたのに、好くもあゝ他人事のやうに平氣で居られるものだと、助七はかび臭い蒲團に顔を埋めて、自分の混雑した頭をやすめて居た。

「助さん、何ぜうするんだね、使の人が急いで待つてるのだのに。」と女房が最う一度呼びに來て見ると助七は蒲團の上に爪立ちして、ボンヤリ壁窓の外を眺めて居た。執念き五月雨は窓に覆つた若栗の葉にそゝいで、その照返しはその蒼い顔をいと心苦く見せた。

助七は膝を浮かして茶の間に出て來て見たが、別に何うしやうと云ふ纒つた考は無かつた。無論自分はその現場へ駈付ける勇氣は無い。いつもは愚鈍だが斯う云ふ時には女房の方が氣が利いて居て、兎に角も別宅義助叔父さんに然ういうて來やうと云ふ。助七も差詰それより外の思案は無かつた。

「そんぢや、俺ア些ッくら行ッて來ッから、貴方釜の下を氣イ付けて居てくなんせよ。」と小兒を負つた女房は泥濘をビシャ／＼と低下駄穿いて、使の者と一所に瀬戸口か出て行つた。

助七は何より好きな煙管の傍にあるのも忘れて、ボンヤリと外の雨を見て居る。日當りの疎い小庭に

は鑑苔が一面に蔓つて、撥返る飛沫は低い緣側の半ばまで濕らした。廣い薄暗い土間には鷄が餌を拾つて居た。

戸外の方に人の足音するたび、助七はビクッと胸を跳らした。戸板に乘せられるか、畚に乘せられるかして、親父は唸りながら歸つて來るだらう。そして、例の烈しい氣象からして、自分や義助叔父を捉えて、何のやうな無理難題を云はぬとも限らない。『村の奴等が寄つて集つて、俺をこんな目に合はせたこれ見ろと』傷口を披けて見せられたら自分は何うする。あの險しい目緣がピリ〳〵痙攣つて、眸が蒼く顫える。そして、刀を出せと吼り立てる……

助七は眞蒼になつて、押入の刀箱から刀を出して、スッカリ納戸の長持の底へ隱した。土間の長棟に掛け並べた農具類のドキ〳〵光るのも氣になつた、それや庖丁の類は尻端折になつて緣の下のズウと底の方へかくした。

これて、一安心とホッと息を吐いて居る所へ、

「臭い〳〵。」と叫びながら女房は外から驅込んで來た。釜の下の薪に水を掛けながら、ブッ〳〵助七へ文句を言つて居る。

何んぼ文句を云つても大丈夫、刄物類の隱した所は見付かるまいと思ふと、獨りで可笑しくなつてクス〳〵俯向いて笑つて居た。

（二）

義助叔父の傘へ入つて、親父は身體半分濡れて歸つて來た。顔半面に眞白な繃帶を厚く卷いて、石炭酸の臭が先づ入つて來た。酒は醒めてると見えて、

「助、年甲斐も無い事してな。」と笑ひながら爐傍に坐つた。納戸を背負ふやうにして、顫えながら立つて居た助七は、幾らか拍子拔けの形はあつたが、未だなかなか油斷は出來ないやうに思つた。あの笑顔は本當の笑顔ではない。俺に油斷させて置いて、どのやうな事を爲出來さぬとも限らない。繃帶をのがれた片目が先の何所へ向くだらう、押入の刀箱か、土間か、それを見定めなければならない。

親父は落付いて煙草を拈りながら、何氣ない體に叔父と二人で話して居る。が、時々ヂロリヂロリと助七の方を見るやうだ。助七は絕えず父の視線ばかりを追駈けて居た。

「何しろ、酒飮んでる所だから、ゴテと血の出たのには俺ア自分でもビックラしたよ。金盥持つて來ると直ぐ眞赤になつて了ふんだものな。」と嚴丈な老爺はカラカラ笑ひながら、ドッシリと重い皮財布を懷から出して、敷物の下へ確かと蹈み敷く。

兄貴にも勝して、君丈作りの義助叔父も一所に笑つて「でも、好く喧嘩にならなかつたの。俺ア然うだと聞いたから、貴方の氣質だ、唯事では治まんめえと、實は心配しながら行きしたよ。」

「そこは年だて、なアに、これが今十年若くて見せい。中々默つて引込むものか。場所が外だら格別、あの綿屋の坐敷だからな。」

助七はヅキッと脳を刺されたやうに思つた。何うしても親父は何か心の底に企んで居る。それを見逹

けずに居るものかと、身體を堅くして二人の様子ばかりに氣を取られて居る。

「綿屋と云へば、今日お蝶は見えないやうだッたな。」と叔父は何氣なく云つたのだ。

「なアに、來て居たさ。俺ア會つたもの。あの兇も身體でも惡るいと見えて、年中眞蒼な顔してるな。」

と老爺はチラと助七の方を見た。助七の額から熱い汗がヂリ／＼と滲出た。

助七がハラ／＼するにも拘らず、兄弟は嫁に燒酎を買はせてチビ／＼飲初めた。自分にも一所になつて飲めとすゝめるけれど、何んとなく氣がオド付いて一所に飲む氣は無い。それよりは、二人が飲んで氣をゆるしてる様子を好く氣を付けやう。二人して何をたくらんで居るか、好く／＼見逹けなければならない。でも、親父は少し飲むと盃を下に置いて、傷口がムヅ／＼して氣分が惡るくなつたから、少し横にならうと云出した。これが第一可笑しい。自分から酒を控えた事の無い人である。

親父が奧の間に寢た後、叔父は手酌でチビ／＼やりながら、喋り上戸の癖を出して切りと助七へ話し掛ける。然し助七にしてはそれ所では無い、背後の方ばかり氣になつて、ゴトリと鼠が天井に荒れても身體が縮まる。始終その方ばかりに耳を立てゝ居た。

叔父は聶き慌てゝ帳場格子の傍へ投出したまゝの物理の本に氣が付いた。好い話種を見付けたと云つたやうに、その本を手に取つて、

「何うだ、助、矢張りこの方の勉强やつてるのかな。そしてその、何んたら云ふ器械は最う發明出來たかな。」

「駄目さ、貴方。そんなに早く出來て耐るもんかね。」

「そたッて、この前の話ぢや、荒方骨組の考だけは出來だッて話だッたがな。」

「そりや、消防の器械だがね。」

「消防だか何んだか知らないけど、愈々その發明したとなると大變な金儲だと云ふてはないか。」

「そりや、どの器械だつて一ツ發明したとなると、それこそ大變なものさ。金儲より何よりその名譽が大したもんだからね。」と助七は何時かその話に釣込れて、嬉しさうに前へ乘出して來る。

「そだッて話だなア。然うして今度主が發明しやうと云ふ器械はどんなのだな。」

「どんなと云つて、然う一口にも云はれないけれど……。」と云ひながら、肚の中ではその實を明して聞かせたものだらうか、何うだらうかそれに迷つた。

「何でも好いやな、金さへ儲る事ッたら。小原の家も主がシッカリして身上立直さないとならない人だから、早く先づ金を儲けてもとの暖簾をかけてくれろや。」

「そりや、貴方。」と助七は顫えるほど、叔父の言葉をうれしく聞いて居た。

(三)

翌朝起きて來た父を見ると、これは又一夜の中に見違ふほど、顏一面紫色に腫れ上つて居る。右の目も眞赤に脂走つて、小鼻まで塞がつて居る。頭の髓が重いと云ふて朝の飯も進まない。助七も昨夜は夢ばかり見て、ロクに睡れなかつた。

女房が洗物を下げて、臺所へ行つた後を見濟して、助七は畏々親父の前へ出た。

「お父さん、昨日の一件はお蝶の事なんだがね。お蝶、何んと云ひした。」と親父の顏は見ずに、舌の縺つた聲で尋ねた。親父はヂロリと忰の顏を見て、賤しむやうな樣子を見せた。

「主ア、未だお蝶に未練殘つてるのか、馬鹿者め。」

助七はカッと眞赤になつて、聲も滿足には出ない。その、目も口も鼻も小さな、額の狹い顏を混雜さして親父の顏を恐れた。

「馬鹿も大抵にするんだぜ。貴樣も二人の親父になるところだ。暇出した女房のこと何時まで忘れない。」

「何んて、何んて俺アそんな事がすぺ。俺アお蝶の事なぞ思出した事もガアせん。一昨日だかも途中で會つたけども、俺アわざと知らない振りして、聲も掛けせんかつた。」

「當り前の事さ。主の馬鹿にも本當に困つてしまふ。」と親父は苦い顏して居る。「それもこれも、俺が若い時道樂して身上をこんな風にしたから、村の奴等は俺を馬鹿にしてるんだ。なアに昨日だツて、奴等を何のやうにも取締めてやれるんだけんど、喧嘩したツて爲方がねえと、我慢して歸つて來たんだ。何んと云はれても好い、早くもとの麴屋になつて、綿屋の奴等を見返してやるんだ。」と途切れ〳〵の低い掠れ聲で親父は云つた。

助七は小兒の時から、お伽話同樣にこの言を吹込まれて居る。死んだ盲目の母が、折さへあると昔の全盛を談して聞かせたものだ。村の四方口に諸人助けの石橋を十六まで掛けて、祖父の太左衞門がお上

から賞狀を頂いた事やら、秋祭りには城下お出入りの歴々へ、お迎の駄馬を十幾頭出した事や、その馬が驛路を揃えて村に乘込んで來た時には、村の庄屋まで羽織袴で町はづれに出迎えた事や、先手綱は何時も峯吉と云ふ最上者の役で、そのまた唄ふ長持唄の好い透る聲であつた事やを、小兒の耳へも入るやう細かに話して聞かせた。その頃、今の綿屋はまだ鹽釜通ひの棒手振りをして居て、今の隱居などは善やく／＼と走り使ひに調寶がられて居たものだと云ふ。

生れだち尫弱く、頸筋や腋窩に出る瘰癧で始終見せられて居る助七は、その睫毛の深い蒼味のある目を上げて、何時も考深かく聞いて居た。聞いて居る中に、氣が遠く沈んで行くやうで、悲しい中にも何んとも云はれぬ快さが混つて居る。ひやうげた馬鹿婿の話や、蛇退治の話を聞くよりも、幾ら身に泌みて面白いか知れない。毎晩寢床へ入ると、目の不自由な母を責立てゝはその話を繰返させるのだ。

その頃の父は、酒ばかり飲んで、母ばかり虐め散らして居たものだ。胸毛の濃い胸元をはだけて、爐傍に大胡坐掻いて朝つから家内を叱り散らして居たものだ。酒亂の氣味もあつた。醉ふと必らず暴れ出して、何時かなぞは刀を振廻して母を追駈け廻し、そこにあつた大臼に二大刀三大刀切り付けた。遁げ後れてそこにマゴ／＼して居る自分を見付けると、何んと思つたか大聲に泣出した。

その時父の云つた言葉は未だ覺えて居る。

「助よ、好く覺えて居ろよ。俺ァ皆に寄つてたかつて氣違えにされる。」と泣いて居る。助七も譯も無く悲しくなつて一所になつて泣いた。

その母は五年前に死んだ。死ぬ枕元へ婚約のお蝶と助七を呼んで、身上の事をくれ〴〵と頼んで死んだ。助七は眞蒼になつて顫へながらも、大丈夫、屹度もとの麹屋にして見せるからと誓つたら、母親はそれが何よりの回向と思ひますと喜んだ。

通夜の晩にそつとお蝶を外に連れ出して、自分の決心を聞かせて女の心持を尋ねると、助さんがその心持ならば、私も一所になつてどんな苦勞でもしますと約定した。で、その時限り助七は自分から進んで學校を退き家の手だすけをする事に決心したのだ。

その晩の、お蝶の顔には蒼白い月の光りが寒むく落ちて居た。助七は今になつても、冬の霜夜に光る月光を見ると、その晩のお蝶の顔が目に浮んで去らないのだ。

（四）

老父の怪我は思つたよりも長引ひて、梅雨が上つても本當でない。蠅が嫌ひゆゑ、晝も蚊張を釣らせてその中でゴロ〳〵して居る。大好きな漢楚軍談を出して、その讀役を助七に云付けられるのだが、助七は又それが厭て〳〵ならない。讀惽い漢字を拾つて、細かい漢字本を讀むと、目がグラ〳〵して終には脳の底が痛んで來る。それに第一は、何より大事の物理學に讀み耽る暇がない。二三日は我慢したが、到頭我慢しきれなくなつて、或る日親父の機嫌を見てそれを云ふと、腹を立てると思ひの外、親父は案外快く承諾して、暇をくれた。で、助七は最う一寸の猶豫も無く、又暗い納戸へ入つて讀み初めた。この本は渠の舊友で、今理科大學に居る奥野と云ふ男が送つてくれたのだ。

去年の夏の事であつた。裏のポンプ井戸に故障が出て少しの漏水に水が切れる。職人を仙臺から呼んでは大事ゆゑ、小兒の時から幾らか細工氣がある所から、獨りで好い加減にコッ遣つて居る所へ友達が來合はせて、それを直すには物理學から知らなければ駄目だと云ふ。職人にそんな學問はと思つたけれど、兎に角と思つて、中學校の教科書にして居る本を借りて見ると、今まで解らなかつた事が電信でも蒸氣船でも直ぐ解かる。それに氣乘りして更らに高尙な本を賴んでやると、間も無く友が擇んで來たのはこの飯島氏の物理學とガノウ氏の物理學書であつた。

「これさへあると大丈夫だ。何んの發明でも出來ない事はない。」と思つて、仕事の合間〱を拾つては一枚二枚と讀み初めた。公式や術語があつて、初めは中々難澁したけれど、解らない所は故々郵便を出してその奧野に問合せたりして今では下卷の電氣學の部まで進んだ。冬休みで奧野が歸省して居たこの冬などは、毎日その家に詰めかけてその解說を聞いたものだ。

大學の夏休みはこの七月初旬から初まる。そして奧野が歸つて來るまでには、兎に角一應讀み終つて置かねばなるまい。不明な所や何かの質疑はその時まで溜めて置くのだ。斯う思ふと、助七は一刻の時も惜しくて耐らぬ。質物の出入れだけは自分の外の者に解からないから爲方ないが、何彼に就けて自分を呼立てる女房が腹立しくて協はぬ。自分の身體は今學問の爲めに大事な身體なのだ。それを女房は知らないで居る。

何かに付けて女房が憎い。或る時などは飯を知らせて來た女房の顏に、卦算にしてあつた刀の鍔を投

け付けてやつた。鍔は女房の頭を越して向の柱に當つた。

「何んするんだね、それ當てゝ俺を殺ろす氣かね。」と果して女房は慎なき金切聲を振り立てた。

「殺したつて好いさ、主のやうな蛆虫は活きて居たつて何んにもならない。早く、くたばつて了へ。」と情の激するまゝに怒鳴り付けた。

「フン。」と女房は鼻の先に笑つて、「俺を早く殺してお蝶を入れる氣なのかね。駄目だよ。お蝶は貴方のやうな者に見込ないつて里さ歸つたんだ。この秋は中新田の酒屋から婿か來るッて話だ。」と憎々しく唇をそらして見せた。

「もう一度云つて見ろ、貴樣。」と肱を構えて寄せて行つたら、恐れるかと思ひの外、女房は未だ〳〵猛り狂つて惡態口を利いて居る。

「貴樣、未だ吐かすな。」と助七は眞蒼になつて顫えて居る。

「云ふとも云ふとも、何度でも云ふさ。それが惡るけりや何うともするが好い。」とフテ〳〵しい事を云つて恐れない。

恐ろしく無いと云ふ筈は無い。おのれ、何所が何所までも恐れさして見せるぞと、助七は目を固めて凝つと女房を睨め付けた。

「何んの眞似だね、そんな眞似して、誰が貴方など恐いもんかな。」と黄色い歯を見せて笑つて居る。

助七は何んと云つても構はず、何所までも〳〵女房を睨み付けて居た。果して女房は少し薄氣味惡る

くなつたと見えて、

「何んするのしや、何んするのしや。」と叫びながらジリ〳〵と後に退つて行く。助七はそれが面白くなつて何所までものがすものかと女房を追駈け廻した。

「馬鹿、何をする。」と太い腕に把えられたのに氣が付いて見ると、何時の間にか茶の間まで女房を追駈けて來て、親父の手で援いられて居るのであつた。

その時親父は凝つと助七の顔付を見て、「助、主ア何うかしてるでねえか。氣分に變な所は無いか。」と何時になく慌てた聲で聞かれたが、助七は知らぬ顔して他の方を見て居た。

「助、主ア少し變だぞ、餘り學問に凝る所以だ。少し氣い付けないと駄目だぞ。今主の身體に万一な事などあつては、麹屋の家が何ぜうになると思ふ。氣イ落付けて居ろよ、助。」と忰の顔を心配さうに見込んで居る。

（五）

親父の傷は存外に長引いた。暗い所では火が見え、始終耳が鳴つた。助七はそれを見る毎に氣になつて、醫者の診斷書を貰つて表沙汰にしやうと力味むのだが、親父は頑固にそれを退けた。然うして、何故の喧嘩かその理由も話しては聞かせない。押して聞くと厭な顔をする。

然し助七には何所まで押しても、この事柄は明瞭にせずばなるまい。何んでも底にはお蝶の事が蟠つて居るに相違ないと思つた。て、朝に晩に故とうるさく親父に尋ねた。例令答へなくとも好い。その顔

色からその事件の大根を見顯はさずに置かないと決心したのだ。でも親父は口を噤んで何も云はない。急込んで聞くほど厭な顏して、終には憤るやうになつた。

「隱したつて駄目でさ。俺ァちやんと知つて居るんだ。」と好く圖て助七はこんな事を云つた。云つて了つてから自分の大膽さに驚いたが、その時はたゞ何んとなくそんな事を云つて見たかつたのだ。餘りしつこくすると、到頭親父も腹を立てゝ「馬鹿者、何を吐かす。」と煙管など取上げる事はあるが、直ぐまた力拔けしたやうな顏付して助七を見詰めたまゝ默つて了ふ。何か考へ込んで了ふ。

助七は寧ろ可笑しくてならない。自分は何故これまでこの人を恐れて、あのやうに壓迫されて居たのか、些つとも譯が解らない。此方から強く出れば、この通り意氣地なく引込んで了ふ人ではないか。ただ秘法はその時左の栂指で丸い輪をつくつて居る事だ。それさへ離さなければ、親父ぐらゐに負けるのでは無い。勝つのは技と云ふ昔からの譬があるが、自分は今までその技を知らなかつたのである。技さへ飲込めば誰れに勝つのも難かしい事ではない。

或る日、親父は五月晴の慌しい晴天を見込んで、質物を縁に出して黴を乾して居る。後姿が如何にも老人染みて、痩々して居る。面白い。一つ揶揄つて見やうと云ふ氣になつて、後から窃つと忍足になつて行つて、足の裏皮を突いた。一つ蹴つて見た。

親父は振返つて悴を見たが苦い顏して何んにも云はない。何うしても指の環の奇特である。今度はその襟を高々と捧げながら、父の横顏を平手で打つた。これには流石の辛抱強い父も默つては居ない。突

然助七の襟髪を掴んで、女房と一緒になつて、泣き叫ぶのも承知せず、頭から冷水を吊瓶で何杯も掛けた。

「覺えて居ろ、おたか。貴様俺を殺す氣だな。」と睨み付けると、

「貴方、それが病氣でがすよ。本ばかり讀んで居るからそんな事になるんでがす。」と女房はオロ〳〵泣いて居る。

本が何んだ、馬鹿者め、貴様は肚の中でお蝶に嫉妬して居るんだ。何所の國に本を讀むなと停める例がある、と助七は心に思つたけれど、水が辛く痛く鼻や咽頭へ入つて口を利く事が出來なかつた。

暫して、父は病後の力なき身體を椽にもたせて、頭から雫の垂るゝ倅の顔を傷ましさうに眺めて居た。

「助や、主は腦が惡るいぞ。今主に病氣にでもなられると、家は亂離骨灰だ。氣を落付けてな、あまりクヨ〳〵思はないやうにしてくれよ。」と染々とした聲であつた。

俺が病氣とは誰が決めた。腦が惡るいと云へば、氣違ひと云ふ事にもなる。馬鹿〳〵しい。腦の惡るいものが、あの難かしい物理學の本をスル〳〵と讀めるものか。あの本の中では一番難かしいと云ふ評判の磁氣學の公式でも何んでもすら〳〵と讀めるではないか。女房はもと〳〵馬鹿の事だが、然う云ふ親父の方が近頃少し變てある。他の事より自分を大切にしたら好からうと可笑しくなる。

その以來、女房のおたかは自分の監守を怠らない。何彼に就けて自分の樣子を注意して居るやうだ。夜も時々目を覺ましては自分の寢顔に氣を付けて居る。お蝶に對する嫉妬から亭主を最惜くなつたのだ

らう。そして、灯があつては夢を見て睡られないと云つて居た女が、近頃は枕元に有明をカン〳〵燈して置かないと蚊張へ入らない。

「おたか、主アそんなにお蝶が憎いのか。」と或る晩、夜深けに聲を掛けると、嘘つきめ、わざと飛んでも無いと云つたやうな顏付をするから可笑しい。

「憎いだら憎いと云ふさ。お蝶はお蝶でも、俺の爲めにお蝶憎いと思ふと、惡るい氣はしないもんだ。」と云つて笑つた。

「馬鹿ばし云ふもんてねえ。貴方は病氣なんだよ。」と又しても病氣を言立てる。

「何所が病氣だ。」

「何所つて腦が惡るいんだよ。本當に氣ィ沈めてくなんせよ。」と蒼い顏して居る。

（六）

父を見ても妻を見ても、助七はお蝶の事のみ氣にかゝる。喧嘩の源因を話さない所を見ても、父は餘程深く心を勞して居る事があるに相違ない。叔父の義助に樣子を尋ねても、叔父は何も話して聞かせない。

「お蝶は自分に未練があるんだ。」偶と或る晩斯う考えた。然うだ。外の事では父の樣子も妻の嫉妬も說明が出來ないが、然うだと思へば好く判かる。父は昔氣質の一徹人ゆゑ、出て行つた嫁は仇敵のやうに憎いのだ。何んと謝られてもゆるすものではない。お蝶には伯父にあたる綿屋の主人が手を突いて、

謝つたが聞入れなかつた。あの人は酔ふと好く、「お頭だ、何うか。」と手を合はせて頼む人である。それを遣つたに違え無い。でも親父は頑として聞入れなかつた。喧嘩だ。

そうとすると、ウッカリしては居られない。兎に角、お蝶に會つて本心を確めて見なければなるまい。お蝶とて然うだ。三年も連添つた良人の自分だ。別れて見れば戀しくなるに相違ない。この家に、この俺の心の中へ、何か大切なものを置忘れて行つたに相違ない。

助七はある晩窃つと、前後を見廻はしながら綿屋の門を叩いた。丁度、晩酌の時で、眇目の主は鹽辛をつゝきながら好い氣分に酔つて居た。が、お蝶の事でと聞くと、色を變えてジロジロと助七を見た。その眇目の視線は何故か松葉の如く助七の皮膚を射した。

「お蝶に會ひさへすれば判るんだ。お蝶はそんな氣ぢやがァせん。邪魔をしないで會はしてくなんせ。」と助七はピョコピョコ頭を下げた。襟は汗でピッショリ濡れた。

「お蝶と云つて、お蝶は私の家にや居ない。最う疾うに、先月の初め嫁に遣つた。」と流石縣會議員もする人だけあつて、キッパリした調子で云つた。

然し助七はそんな事にだまされては居ない。お蝶の心を知らないからこんな事を云つて居るのだと思つた。この人は增上慢だ。おだてれば調子に乗るかも知れない。旦那と云つて見やうと即坐に考えた。自分ながら思付きだ。

「旦那様、そんな事云はないで、本當に會はいてくなんせよ。お蝶に些いと會ひさへすれば判る事なん

てがすから何うかお願て御坐りす、旦那樣。俺アね、親父と違つて、何時も旦那樣の事を賞めてるんでがすぜ。親父はあの通りの馬鹿で何も判らないでがす。」

旦那と呼ばれて餘程面喰つたらしい。眉をしがめてヂロ〳〵と自分の風態を見詰めて居る。

「ねえ、旦那樣、私は……。」と云掛けるのを些つとゝ抑えて、慌てゝ奥の間へ立つて了つた。

お蝶を連れて來るのかと待つて居ると、若い屈強な作男が四五人出て來て渠を無理に往來へ引擦り出した。

助七は拳の痛くなるほど大戸を叩いて、お蝶の名を呼んだが、誰も返事するものも無い。内から堅く門の錠を下して了つた。

七日の月は青く地に落ちた。門前を流れる小川はキラ〳〵と光つた。助七はその月光を見ると、又しても母の通夜の晩の事を思出した。

お蝶のあの軟かな肌は、未だ男と云ふものを知らなかつた。男の肌は何う濕ひ、何う臭ふものか、それが早く見たいと云ふ樣子が見えた。恐る〳〵自分へすがり付いて、濕ひを持つた、泣出しさうな目付で、霞の中から物の形でも探すやうに自分の顔を宙に探した。

「お蝶。」助七は熱い呼吸して女の名を呼んで見た。月は蒼く小川に砕けて居る。

「お蝶、お蝶。」

高い聲でそこらを呼び廻つたけれど、何んの返事もない。目に見えるお蝶の顔は返事をしなかつた。

「馬鹿、何時までほざいて居やがる。」と要愼深く門の中に立つて居た作男の一人が惡態口を浴びせた。そして、今一人の相手の者と、「あんな氣違まで出ちや、麴屋の家もあれ限りだの。」と話して居るのが聞えた。

氣違と云ふのは自分の事だらうと助七は冷笑した。

「氣違と云ひたくば云つて置け。馬鹿、主等などは蟲ケラ見たいなもんだ。何が麴屋の家はあれ限りだ。俺は今大發明をして、何百萬圓と云ふ金儲をするんだ。貴樣達に俺の偉い事など判かるものか。」と大きな聲して叫んだ。何所かで他人にさまたげられてお蝶が聞いて居るに相違ないと思つたからである。發明、何百萬圓を何度も〳〵繰返して叫んだ。

「何んの發明だ、氣違ぇめ、何か大きな事を吐して居やがる。」と作男どもは眞から可笑しさうに腹を抱へて笑つてる。

ては未だ何も知らないんだ。好し今に知らしてやる。

「早く歸つて寢ろよ。家では心配して待つて居るぞ。好い若い者だつたが惜しい事をしたものだ。」と出窓の所から綿屋の主が顏を出して獨語のやうに云ふのが聞える。

「見ろ、今に驚くな、天地がひつくり返るやうな發明をして居るんだ。」

「發明たア何んの發明だね。」

「何んでも好い、誰がお前達になど聞かせるものか。」と助七は泣きながら家の方へ駈出した。途中犬

にも吠えられたが氣も付かなかつた。

（六）

家へ歸ると直ぐ納戶へ驅込んで、例の物理學書を初めから繙いて探した。他の人が發明するに自分が發明の出來ぬ事はないと思つた。で、その晩は皆が心配して止めるのも聞入れずに、夜通し本を讀んだ。次の日も殆んど飮まず食はずに讀み通した。

父は心配して本を取上げやうとすると、渠は目を鋭くして父を叱り付け、傍にあるものならば手當りまかせに何んでも投付けた。本さへ讀んで居れば到つて靜かにして居る。

「麵屋の家を再興するんだ。その邪魔をするやうだつたら、親父でも誰でも切り殺して了ふ。」などと恐ろしい事ばかり云つた。これも本心から云ふのではない、邪魔を防ぎたいばかりに強いて斯うも云ふのだと、自分でも知つて居た。

眞蒼な顏して、目も脣もピリ〳〵顫はしながら、讀んで讀んで讀通した三日目、助七は本を閉ぢて靜かに考えた。世界には知られたる事より知られない事の方が多いに決つて居る。この物理學のどの頁にも大切な發明が轉つて居るに相違ない。何所でも好い、何んでも好いから、片端から發明して行きたいと思つた。

それには手初めが大切である。何處でも好いから本の開いた所で、すぐ發明品を發明しやう。と、然う思つて助七は瞑目祈念して、本を開いた。その開いた頁には名高い物質不滅の方則があつた。

「若し假りに、物質勢力は不滅で無つたら何うだらう。先づ斯う逆に考へて見やう。」と然う思ひながら又深かき思索に耽つた。そして、その結果として、若し物質勢力の不滅が不滅でないとしたらば、何等の發動機なくして自動する器械が出來るに相違ないと思つた。

「もし、そんな器械が發明されたら。」と又考初めた。

第一に太陽が不用になる。絶えざる自動を以つて、級數的に熱と光線を産出して行く器械ならばこの世界が要求するだけの光と熱とを得る譯である。又この器械があれば風も不用になる譯だ。自動煽風器これて充分である。火も、水も何も入用なものは無くなる。總ゆる自然を征服して總ゆる自然を創造する事が出來るに相違ない。

「然うだ。然う決めやう。」と助七はやつと發明品の種類を發明した。

晝は不可ない、人の耳があると思つて、或る夜、夜深けて親父の枕元へ坐つた。そして、發明品の模型を作る資本として、三十圓の金を調達してくれるやうに頼んだ。

怪我以來メッキリ衰えた親父は、床の上に坐つて涙を持つた老眼で、凝つと悴の顏を見詰めた。そして、悴の掌を固く握つて、

「助、後生だから本心になつてくれ。主にそんなになられて俺は何うなるんだ。」と顏に寢間着の袖をあてゝ泣出した。

「お父さん、詰らない事を云ふもんてねえぞ。今の三十圓は後の百萬圓にも二百萬圓にも、幾らにても

當るんだ。吝い事を云はないでそれだけ貸してくなんせ。」と却つて助七は老父を慰めて居た。

「助さん、何んたら情ない人になつたゞよ。」と女房も膝にすがつて泣出した。

二人とも判らない、何うしたらばこの見易い理屈が飲込めるだらうと、助七は出來るだけ平易な言葉を撰んで二人に話して聞かせたが、話せば話すほど二人とも判らなくなつた。て、次の日は義助伯父を尋ねて、その企を話して聞かせたが、これも矢張り判らない。村の者を片端から說き廻つたが誰一人相手になつてくれるものが無つた。

「好し、世間がその氣なら俺にも決心があるぞ。」と遂に助七は決心をした。この器械を發明する爲めには少々の惡事はかまはぬ。器械さへ發明出來れば劾過の輕重は直ぐ判明する譯である。渠はそつと刀箱から備前ものゝ一刀を盜み出した。そして、例令未遂にして捕縛されても自分の存念を明かにして、惡事の爲めの惡事でない事を證明する爲めに、豫め二通の自訴狀を書いて、一通は時の內閣總理大臣へ、一通は郡の警察署へと郵送した。

その文句の中には斯う書いてあつた。

余は尋恒一般の盜賊が私欲を以て人の財物を竊取し、人覺らざれば生涯之を隱さんとするものと異れり。助七不肖無智なりと雖、良民の膏血を掠奪して、己の美衣甘食に供し、得色以て快樂と爲すの盲者に非ずと雖、惜むは人心無形にして、世人は余が志想を確むる能はざるの點實に悲しきの極耳。

○

作者曰く、その後の行爲は、法醫學教授某博士によりて、その鑑定例として發表されて居る。この前に書いた所は自分の知つて居る助七である。僕はこの以後の助七を描く事は初めから目的では無かつた。

次て翌六日夜同郡〇〇村大字〇〇町に至り、極貧者横△△方へ刀劍を携へ侵入し、家人に對し脅迫の態を示し金圓を貸呉と云ひ家人に於ては金圓はなしと答へたれば、其儘同家を立去り其夜は居村那△△△方に至れり。

其時△△等の視る所に依れば、「少し狐でも憑き居るかと思はるゝ風にて、面色蒼白眼光異常碌々物をも言はず只、「休ませて呉れ。」と云ひて一泊し、翌日も同家の小屋中に潜伏し腕を組み頭を垂れ、默想凝思の狀態ありて只、「飯を喰はせて呉れ。」と一言し、且食時に一度小屋を出て食事を爲したるのみ、その擧動何んとなく常に異るを以つて、△△は其日晝頃此由を助七の叔父なる義助方へ通知せり。依つて右義助の妻來り、「何故に此樣の處へ來て泊り居りし譯か。宅には二人の子もあり、明日をも知れぬ老父もある中で、其の樣にウカ〳〵して出歩行き居てはならぬ。」と申せし處助七は、「是非機械を拵へる積りであるが、親が金を出して呉れぬ故是迄辛苦を盡した甲斐もなく、面白くなくて宅に居られぬから出歩行くのである。」と申します故、「夫れては誠に困るが、夫れほどに思ふ譯ならば、何とかして親から金を貰ふて遣る樣にするが、金さへあれば宅にても器械は出來るものか。」と申せし處、「宅に居ても金さへあれば出來ぬ事はない。」と申します故自分は、「夫ならば御前の親にも話をして遣るから一應自分方まて歸つて呉れ。」と申せし處、「今何處へ行くと申しても金はなし、決して何處へ

も行きはせぬから先へ歸り與れ、拙者は人前も惡いから後より行く。」と申しますす故、自分は歸宅致し(中略)ましたが助七が參らぬ故△△が再び△△方へ迎に行きし處、其節△△宅は不在にて助七も居らざりし。」と云ふ。

助七は同日午後七時△△方を立出て同じく八時頃テフの再縁先、卽ち佐△△方へ赴き拔刀を携へ同家の入口より闖入し、言語も交へず刀劍を翳し矢庭にテフが佇み居りし茶の間と其の次の間との間なる柱の側に馳せ行きて、テフへ切付けんとするや、早くもテフは右柱の向ふに廻り逃去らんとし、助七はこれを追行かんとする際、其場に居りし夫△△の障ゆる所と爲り遂に其目的を達するを得ざりしも、助七は其際△△及△△の母△△に負傷せしめたり。而して當時金錢の事は少しも言はず、始終無言なりしと云ふ。又右の行爲に就き法官の種々なる訊問に對せし助七が答辯を見るに、其の概要は左の如し。

「自分がテフに懸想致し居りしなど申す事は毛頭なき事にて、自分は却つて彼を嫌厭致し居りし位のものなり。故に其嫌厭致し居るテフが去りしとて、自分に於て決して惡しき感情を起し居しにもあらず成程檢事廷に於てテフを離縁せし時不愉快ではなかりしかと申されし故、不愉快にてありしと申し立てしものゝ、それは家に居りしものが居なくなりし事故、テフに懸想致し居ると否とに拘はらず、愉快にはなかりし樣申立てしものなり。又自分の父、その他の親族が、自分に於てテフを愛し居りしものなる旨申立てしも知らざれど、自分の內心に於ては彼を愛し居りしものでは御在りませぬ。

「昨年十二月初め頃、チフに對し芋川に於て何か彼是申せしとの事なれども、其際は自分に於て頗る酩酊致居りて、其結果チフに對し何事か申せしものであらうと思ひます。自分の精神から出てたる事ては御在りませぬ故、自分は更に記憶し居らぬ次第て御在ります。

「人は何と申しても、自分に於ては大醉の爲め全く人事を辨へぬ位に相成りし故、如何なることを爲せしか存ぜず、又意志ありて致せし事ては御在りませぬ。

「自分に於ては全く强盜を爲すの精神にてありしも、元來惡意ありて致す譯てはありませぬ故、一時脅迫して金を取り、後償却するの考へなりし故、その意志を證明する爲め自首狀を差出し置きし物にて、事發覺の後自首狀を出しても自分に惡意なき事を證明する能はざる故、預め自首狀を差出し置き自分の住所迄警察へ明かし置きしものにして、決して自分がチフを殺害する爲め、名を强盜に假らんと致せし者にはありませぬ。

「事實、之れ迄申立てたる通り惡意なきを證する爲め自首狀を差出し、又强盜を爲さんと致せしものなれども、自分の致せし事が道理に叶はぬと御認めあることなれば致方も御在りませぬ。

「學理上の事に付ては既に自分の腦裏に貯へありて、別に書類など持ち歩くの必要はありませぬ。

「自分の考ては自首狀を出し置きし故、搜索も嚴重なるべしと思ひしに付、夫れが爲め△△△方へ潜伏致させ吳れと申し賴みし次第なり。然れ共他人の家に潜伏致し居れば搜索が嚴重なりとするも多少の時間は逃れ居られ、其内に金を取り得て他縣へ行く積りにてありました。

「父も昨年來損をして金がないと申し居る故、自分は到底强盜をなさゞれば金は手に入らずと思ひしものなり。

「自分がテウ宅へ侵入し、△△を捨て置きテフを脅迫せし事は、是迄も數度申せし通りテフを脅かし墮胎の事を自白させて、テフ又は△△より金圓を取り得らるゝ丈け取る考へなりしなり。決して他意ありしにあらず。自分は元より尋常の强盜てはありませぬ故可成彼を感服させて金を取る積りなり。

「全く自分はテフを招きしものにて、決してテフを捕へんと致したるものてはありませぬ。

「自分の考へてはテフを脅迫して惡事を白狀させ、然る後金を取る積りてありしなり。

「事實テフは姙娠して墮胎せる者に相違なし。

「否な、夫れは人によりて月經の循環が異なるかも知れませぬが、テフが姙娠せし事は相違なき事實なり。

「名譽は生存中より寧ろ後世に垂れる事を希望するものなり。然れ共、自分が名譽を重んずるものとせば、人を殺すなど云ふ精神はなかりしなり。

「友人に對し自殺すると申せし事はありませぬが、父をして自分の目的を達する樣致さしむる考へより起りしものなり。」云々。

和歌 [illegible]選

○

青山清華

月光は嘆きて地にうち敷けりしづかにひとり物をおもふ夜

うれしきは暗き中にも灰かなるあかるみを見る夏の夕ぐれ

今日は淋ししづかにをれば泣けよとて強ふる人をも欲しき心地す

あらかじめ一座の人の眼の色をよみて物云ふほどになりけり

君が戸のまへに今立つあなあはれ何に追はれて此處までは來し

來る日もまた來る日もおなじ事繰り返しゐてなほ飽かぬかな

何を嘆きなにゝ悲しむ鳥ならむ日ねもす鳴けり青海のうへ

人忙しく街を往來すわれはこの眼まぐしるさに今日はえ堪へず

暗き中によこたはりゐて寧ろわれ夕はやすし灯をばともさず

何かわがあらむ限りの聲をもて叫びてみたき心地する日よ

海にむかひ一日ゐたれはわが胸はひろ〱となりわだかまりなし

○

關本梁村

わが性のちさきをちさしかなしきを悲しゝとして嘆ひもなし

わかき時ちさきよろこび中年におほき愁ひを與へし君よ

疲れたる心は何も求め得でまた一年を過ぎて來しかな

苦しきと云ふ事を知りかなしきと云ふ事を知る二十二の時

如何にして歌はむといふ事をのみ考へて居し日の若さかな

よろこびに次ぐべきものをはぐくみてまたよろこびとなしにけるかな

何時得しかわからぬほどのよろこびをよろこびとしてはぐみてあり

なぐさむるものとてはなき灰色ににごりし海に向ひて歩む

世の闇に一人しあればかなしくもうれしくもなきうれひをおぼゆ

悲しみをほぼへし時はわが胸に來たまへとこそのたまひにしが

いさゝかの僞りを知りちひさなる疑ひを持ちわれは世に生く

よろこびのあとの悲しさ美くしき涙となりて頬を流るゝ

よろこびを求めむとして何ものも求めず胸は勞れぬるかな

〇　　　小島ます子

事あらばたより無くてと大らかに思へと涙膝にあふるゝ

よろこびは千年に一度鳥の影我か目の前を過ぎしに似たり

物忘れする女なり御一語骨に刻みて置くべかりしを

堪へかたくにがしと聞きしみ言葉も味ふ迄に我なりしかな

限りなきみなつかしさに我といふ物皆捨てゝ隨ひもする

天地に我より大きものなしと思ひて居たり君を見る迄

つゆ晴れぬ老木若木も脊をのして青やぎ渡る大空を見る

君ゐます夜ぞともし火の影までも華やぎわたり屋内かをれり

あるか中の勝れ給へる一所見る目を持てる我なればこそ

合歡の花しとゝに濡れてぬれ〳〵て日の目仰かぬ九日餘り

松木立畑の古井の通ひ路に入日を望む雨あがりかな

神しらぬ千年の後の後迄も忘れ給ひそなど忘るへき

水上を鶯鳴きぬはだしゝてふめどあやうき瀨のつたひ石

〇　　　山村龍子

夏の月呉服(くれは)の橋を笛吹きて往來やすらむふる里の君

夏の日はみ空を原を白色にてらしわたりぬ物音もなし

我れ立てばわづかにかたの見ゆる迄芋は長じてよき秋は來ぬ

なか〳〵に「生」は樂しと肥りたるかたきかひなに君は畑打つ

日は出でぬひとやの人もやごとなきおん人々も我れもおろがむ

我が二なき寶ぞ君は他人(よそびと)の指さすだにも許すあたはず

○　　三浦曉村

いと若きうれひを秘めてしめやかに鳴るかな海も五月となれば

もの足らぬ心地に馴れて一日の暮るゝをさまでおどろきもせず

名を呼ばゞ答ふるものゝうす青き海にあるごとなつかしきかな

思ひうみつかれてやがて眠るごとはてはあるらむさびしからずや

さびしくば泣くもよからむされどまたつくり笑みするあるはよからむ

月光の青くふるへる中に立ち彼の丘を見て山を見て泣く

○　　百田千里

おごそかに時計は今し五時を打つしづかに夢をつゞくるわれに

今日もまた戰ひつかれ夕ぐれの柱によりて眼を閉しけり

群をぬく大樹にそゝぐ夏の日の強き光にひそむかなしみ

うす青き夜霧のつゝむ森林の落葉の道をぬれてわれゆく

○　　本間清

ことさらに淋〳〵とはかりわれ感ずきたるべき日の悲しみもなく

水に沿ふあかるき街の午后四時の日かげ燕のかのげ閃めき

新らしき悲しぞそふ今日と云ふ大き力にあてかれ止まず

人しらぬ事を覺えし心地して思ひがけなく淋し

さ來る

○　岩崎雨洋

宣はすたゞ酒を飲みつぐ〳〵と我か顔を見し父なりしかな

わか悲哀かの巨波に碎けよとけふも終日青の海みる

○

うつるなる天地に生き何物か求めんとして求め得ぬわれ

初夏の線のなかに山鳩の一聲なきて夕べとなりぬ

○　杉田傷鳩

あゝ涙しきりに流る悲しみに了らむの日は未だ來ざるに

ものありてしきりに我背押すこゝち黃の塵湧ける街をゆくとき

歌もなくのろ〳〵としてうごめける世並みの人と居るさびしさよ

消息すわがすむ伊勢は朝ゆふべ雲の變化の多き國など

○　伊藤双流

斯くあれとわれに敎ゆる君もなくたゞなすまゝによろこべるあり

夜も晝もおなじ芝居を見る如く君と向ひてものたらぬ日よ

朝な夕なわかゆびながらはづかしき程にもなりて君を待つかな

○　日下天香

一人居の淋しさめづる身となりぬとよめく街にあき果てし今

たぐひなきわが愚かさをかくしつゝ口さがなくも云ひけるものか

初夏の野もはた山もわか愁消さむにあまり力なくして

こみどりの空に雲雀は啼くと云ふ生れし里の初夏の野邊

○　湖聲子

盃のとび交ふ中にあれどなほ胸は靜寂にたへかたきかな

つく〳〵と思へどさらに思ひ出ぬものの一つあり心おちゐず

春の丘花をつみつゝ靜やかにものを思へばなつかしさかな

○ 永田さうび

田舎路わたちの跡のこほれ穂を君とひろひし時のこひしき

われひとりひろき世界をとぼ〳〵とさすらひゆける姿うかひぬ

○ 小池相良

垢冷の夜着をそたゝむ一日のおもしろくなき事のはじめに

思ふ子もなき幸にセコンドの音をきゝつゝ安らかにねる

○ 山宮允

いつはりを偽りと知りまことをまことしく云ひ得る程に世なれたる人

○ 素乃山人

かなしみかはた喜びかあゝ吾れはそを知らずして君に見みゆる

○ 守屋百華

黒きものあまたならへりさはあれど君がみぐしを二なく愛つらく

○ 小木鳥城

生きなんと人らあそける晝の街大日輪のかげもにごれり

○ 佐伯新一郎

海は日の下にひろごりわたれども光りさびしく黒ずみてあり

○ 村田光烈

あゝたのし空を仰げば倦みはてし心の奥にとゞろく聲す

▲應募和歌原稿は必ず小石川區原町百三十三尾上柴舟宛たるべき事



風蘭

風蘭や病中に占む一詩境　へき
風蘭や浪化の僞筆賣りに來る　同
風蘭も蕭洒と京の扇店　同
風蘭や古書の紙魚掃く老夫子　同
風蘭や茶の讃刻む玉の壺　同
風蘭や妻を師匠に茶の稽古　同
温泉ののぼせ風蘭近く吹かれけり　同
風蘭やビールの醉をラムネ拔く　同
風蘭や外から覗く家涼し　同
風蘭に七賢の書畫琴棋哉　同
風蘭や句會を兼ねて普茶料理　同
風蘭や避暑の詩稿も長湯治　同
風蘭や書肆に乞はるゝ病中記　同

風蘭の塵も主人の病かな　同
風蘭や水の干易き古硯　同
風蘭や詩箋せらばる寶　同
古書堆裏一風蘭を愛しけり　同
風蘭や龍眠帖も一トはやり　同
水を遣る風蘭蕙同架かな　一墨
風蘭や寺の住持が下されし　二葉子
風蘭や席書の人に涼渡る　棹棠郞
風蘭や祠朽ちたる瀧不動　芳椰
風蘭や孟母の機に風渡る　榴炳子
風蘭や掛地の裏を風通ふ　尾棹
風蘭や見えぬ脚下の瀧の音　起堂
風蘭や貧寺の庭の大銀杏　名香
風蘭や岐阜提灯の薄明り　鶯溪
風蘭を軒の葱と掛け替へし　歩風
風蘭の花に團扇の風及ぶ　梅酉水
風蘭や松に懸けたる絹燈籠　萍月
風蘭に奇石を配し得たりけり　句樓
風蘭や印刀浸す盆の水　雨萍
風蘭や安居の僧の自炊寮　耳山
風蘭や下を雲行く天狗岩　素水

風蘭や日さゝぬ室も寺なれば　瓜錆
風蘭や溢紙に干す筆の軸　壺人
大江山深く風蘭採りけり　奇渓
風蘭や槖駝が庭の手洗鉢　方外
風蘭の椽に大雨のしぶきかな　茶量
岩の奇に旅人の眼や風蘭に　玄々郎
蘭癖の詩癖の僧や風蘭花　麥門冬
風蘭や栗鼠が首出す木の洞　蓑人
風蘭や筆返し行く師の机　キ山
風蘭を賣る峽中の茶店かな　濟南
風蘭や干割れし庵の槇柱　暢子
風蘭に垣間見る宿や歌の會　小々
樓脚に水湧く岩や花風蘭　馬皷堂
雨乞の太皷吊るす木や風蘭花　老杉居
風蘭や觀音彫れる自然石　亡禹
風蘭や山の高さに樹の低さ　同
風蘭や巖こと〴〵く淵に向く　胥山
風蘭や洞門の雫瀧しぶき　同
風蘭の窓や机に呉子孫子　雷音
風蘭や鷲の巢岩の如　同
風蘭や蹴落し坂の岩つゞき　猴孫

風蘭や雨沛然と庭の石　同
風蘭や二つ並んで松の瘤　東窓
風蘭や一路通ずる瀧の宮　同
風蘭や茶店の裏の筧岩　芦人
風蘭や昔からなる庭燈籠　同
風蘭に座禪の眼開きけり　萩泉
風蘭に動く詩情を斧や置く（題樵夫圖）　同
風蘭や易に山居の閑を處す　外峯
風蘭に風死して人榻に在り　同
風蘭ややがて伐る木のイロハ付け　青海波
風蘭を見出てゝ高さ及ばざり　同
風蘭や杣人かけし四民空し　都芝
風蘭や神臼にする樹の選み　同
風蘭やハンモック吊る木の枝に　雨村
風蘭や岩を泌み出る水雫　同
風蘭や水をそゝげば風意湧く　影法師
風蘭や手拭掛けのありどころ　同
風蘭をからめて毬の如きかな　同
風蘭に遠き日足や梅古木　儱川
風蘭や打つて知る樺の心洞ろ　同
風蘭のよき避暑の宿見出しけり　同

風蘭や鉢に眞白き壓岐の砂　よせつ
風蘭や踏み行けば鳴る寺の椽　同
風蘭の映る鏡や理髮店　同
風蘭や得度の窓を凉うす　不寢庵
檐低く風蘭吊るや御師が家　同
風蘭や岩茸採りの繩梯子　同
風蘭や蚊帳越し見ゆる離れの間　鳥城
風蘭の香に枕上の灯かな　同
風蘭に湧くや朝風夕嵐　同
風蘭や壁虎を追へば木に移る　五得
風蘭や庇の下の藁仕事　同
風蘭に水やる機のいとまかな　同
風蘭や硯に刻む座右の銘　青城
風蘭に唐畵の幅を愛しけり　同
風蘭や溪の奇石も拾ひ來る　同
下山衆の風蘭もある荷物かな　桃紅
風蘭や日脚をたよる村三戸　同
風蘭や吊るす瓢の風に鳴る　同
風蘭や凉風煽る畵人傳　成功
風蘭や値踏み逃げする祟り木　同
風蘭や木枕馴れし山の宿　同

登山難[illegible]に說く茶店かな　同
牧役所風蘭を吊る見晴しに　石鐘
いつの代の何の窟や花風蘭　同
石肥えて樹瘦する谿や花風蘭　同
二つ木魂返す岨や花風蘭　同
風蘭や強力もする杣が宿　三擊
風蘭や唐本を吹く窓の風　同
風蘭や分水嶺を國境　同
風蘭や溫泉染手拭欄に干す　同
風蘭や砦に風韻を離んずる　太郎
溫泉の日記や句に風蘭の事なども　同
風蘭や詩疑の朱紙剝ぐ瓜長き　同
風蘭や琴を走りて消ゆる風　同
風蘭や懸崖の松谷の杉　春溪
風蘭の主日々藥鍊る　同
築山の石に風蘭移しけり　同
風蘭の窓に山影湖光かな　同
風蘭に香爐の煙靡きけり　同
風蘭や柱に古りし鬼の面　猨子
風蘭や湯薬汁にあく山の坊　同
水くれて風蘭の蜘蛛はらひけり　同

風蘭や阿蘇山見ゆる溫泉の二階　同
風蘭を御嶽登山みやげ哉　同
風蘭や我家に古りし蘆屏風　同
風蘭の一雨一露をホ句に詩に　總子
風蘭に先師の詩書を曝しけり　同
風蘭に庭の緋百合もめでにけり　同
風蘭や芭蕉絹賣る唐女　同
風蘭や詩論凉しき師のお居間　同
風蘭や朽木佛の形して　同
風蘭や掃くによしなき苔の庭　同
水飯に句思ふ椽や風蘭花　同
風蘭やこの鄙に琴ひく女　鬼洗
風蘭や緣起たゞせば南朝寺　同
藥籠垂るゝも古雅や風蘭花　同
籬に風蘭の繪や螢籠　同
風蘭や鎌の銹磨ぐ雨上り　同
風蘭や幽徑谷に下る家　同
風蘭に輕くかゝりぬ市の塵　同
風蘭や楠の根に湧く宮清水　同
風蘭に水やれば葉蘭風起る　碧雲居
風蘭や湖見下ろして峯の寺　同
風蘭の花に山房即事かな　同
風蘭に居士が晝寢の裸かな　同
風蘭や倒れ木を踏む谷渡　同
風蘭や名にのみ瀧のはしり水　同
風蘭や障子にせまる山の雲　同
風蘭に淋しと見るや山の蝶　同

本號應募者總て八十七名、句數千四百二句。

募集課題

殘暑　八月十日締切
綿摘　九月十日締切

お定め

應募句は加賀國金澤市櫻畠九番丁大谷正信宛の事
句數は一人十句以上三十句以下の事



資格なき藝術批評家

星雲子

此頃藝術に對して素人評といふやうなものが可なり流行る。二三度歌舞伎座を覗いて直ぐ劇評を書く。偶まに小說を拾ひ讀して忽ち「今の小說は……」などゝ論ずる。局外者の直覺的に感知する所にも、時に聽くべきものがないではないが、多くの場合に於て、見當違ひか又は淺薄取るに足らぬ議論が多い。殊に藝術といふものを正當に味ふるには相當の準備が要る。外の事ではエライからといつて、必らずしも藝術をも解し得ると限らない。單なる學識や才智は藝術の實藏を開くべき鍵ではない。先づ第一に藝術に對する愛、第二に藝術の素養。此二つがなければ決して藝術の眞味が分らぬ。批評は尙更ら出來ぬ。芝居を見たから芝居を評する、小說を讀んだから小說を論ずるといふやうな事は只自己の無識を表白するに止るもので、心ある人の爲すべきとでない。

凡そ物には二通りの見方がある。物の外に立つて見るのと、物の內に入つて見るのとである。此二つを合せて用ふれば完全であらうが、若しそれが、出來なければ其物の性質と其時の目的とに應じて何れか一方を用ふるより仕樣がない。例へば或一つの小說を讀んだにしても其小說の外に立つて其人生觀なり其作者なりを論ずることも出來、又其小說の內に入つて其描寫なり、其人物なりを評することも出來、又兩方を合せて批判することも出來る。が、藝術を藝術として玩味し鑑賞するには、即ち眞の藝術の妙趣を發見するには外に立つて見るよりも、內に入つて見ることが必要の條

件である。但得醉中趣勿爲醒者傳といふ李白の句があるが、文藝の眞趣も文藝の内に入つて見たことのない人には一寸分り兼ねるから、强いて說いて聞かせぬ方がよいやうにも思はれる。

先頃「萬朝」などに載つた文藝取締の議論や何かは全く文藝の愛も素養もない人の書いたものらしく、誰も相手にせぬからよいやうなものゝ、書いて得意で居る當人が氣の毒のやうに思はれる。又「國民」などに載る文士又は書家などの芝居評も僕等には却て無くもがなと思はれる。

小栗風葉氏の「終篇金色夜叉」は近時最も賣行よき出版物の一つな相だ。氏の最も力を入れ且つ得意でもあり、又文藝上の價値の遙かに高き作物が左程に賣れもせず、いはゞ一時のアテを取る爲めに書いたやうなものが歡迎されるとあつては、何だか氣耻かしいやうな心地する、と同時に半面には文藝の眞趣といふものは、さう容易く解さるゝものでないといふ事をあらはして居ると思ふ。眞趣妙味は說きにくいものとしても說き得る範圍で說いて聞かせたいといふのが、一般文藝を愛好する人の志願であらう。其說いて聞かすべき任務を持つ評論家自身が、よく／＼の素人で、文藝の愛も素養もない人だとすれば、實に困つたものと思ふ。所謂今日の如き銘々思ひ／＼の思想を持て、思ひ／＼の言說を恣まゝにして居る時代には、默つてゐてはよいものも正しいものも踏みつけられて了ふ。起て戰ひ、飽くまでも戰ひ、敵を倒す迄戰はなくては自己の所信を世に行ふことが六づかしい。僕等も此れからポツポツやらうと思ふが、世の心ある人は、ドシ／＼間違つた文藝批評などを攻擊し、少しでも多く文藝の眞趣を世に紹介するやうにして貰ひたい。（完）



壯年官僚の二派

山本龜城

近時少壯官僚派に二種の暗流があつてそれが軋轢して居るかの噂が立つた。成程技術本位で政局を展開せんとするものと學識頭腦を第二に置いて優秀なる人物を集めて政局の分野を劃定しようとするものがないてもないが二者が軋轢して居るとは見えない。數年前、外交官試驗があつた時、其の試驗委員たる安達博士が馬鹿に頭腦のよい者ばかりを採用して少しも人格と云ふ點て採用せなかつたから一部外交官から非難を受けた事があつた。山座圓次郎氏等の連中もその措置には反對てあつた又一木博士等も安達博士の方針とは反對て人格の如何によつて採用したいといふ考てあつたらしい。處が其時は內閣書記官長たる南弘氏も高等文官試驗委員たる水野錬太郎氏も余り人格と云ふに重きを置かなかつたから總てが單に頭腦の宜い人物のみが採用されたのてある。少壯官僚に剛健敢爲の人才がないのはこれが原因となつた者らしい。而もこれが政黨內閣の稱ありし時代てあるから一層面白いてはないか。

（外務省の兩派）

そこて外務省中人物政治の領袖は山座圓次郎、伊集院彥吉、萩原守一の諸氏て落合謙太郎、芳澤謙吉、阿部守太郎、本多熊太郎等の面々も人物派に屬するのである。技術政治家即ち學材本位の領袖は珍田捨己氏て、倉知鐵吉、安達峯一郎、石井菊次郎氏等がその中堅となつて活躍して居る、前者は開放を喜び事秘密に關せざる限り發表して國民と歡樂を一にせんとする者て、後者は萬事秘密主義て新聞操縦にも自働的に材料を供給

せざるを本則として居るかの觀がある。そこで山座氏が霞ヶ關を去つて英國へ赴任する時多くの事務官は嘘唏流涕し幾多の新聞記者はその離別を惜んだのであつた、前者は永年山座氏の德に悅服して親とも兄とも思ひて懷かしい霞ヶ關生活を續けて居つたのが今更名殘が惜しい、後者は快活にして覇氣ある未來の小外相の去るのを心元なく感じたことであつた。山座氏去て倉知氏來り石井氏昇進して萩原氏がその後釜に据つた。石井、倉知、の兩氏は頭腦明敏で事務に鍊達し、當世得易からざる人才ではあるが、何處にか物足らぬ感あるのは世人も均しく首肯せらるゝ所であろふ。その不足せる或者が萩原氏によりて代償せらるゝか否かはこれ疑問である、萩原氏は學生時代から傲岸不羈を以て鳴り長州出身者としては毛色の變つた男で、韓國駐劄の書記官時代も常に時の公使たる林權介氏を困らせ、奉天總領事時代も奉天將軍の綽名ある丈け隨分切れ手の一人であつたのである。獨逸在勤の時、林董伯に馱々を捏ねて大手古摺らした事實はこれ亦有名である、彼はかくの如く傲岸な性癖を有して秋月太都夫氏と双璧と謠はれた位の男であるが、しかも頑固ではない、蠻骨ではない、文明的の色彩をも帶びて居る。小村伯は秘密主義の外交家であるが、しかもその幕僚としては伊集院、山座、萩原、本多、落合のあるを喜んで居る、その點から見ると小村伯も凡骨な外交家ではないことが判る。要するに霞ヶ關では人物派技術派（頭腦派とも）の勢力は五分五分と判定して間違がなかろふと信ぜられる。

（內務省の色別）

內務省は人材の淵叢である、赤門出の秀才は第一內務、第二大藏、第三外務と云ふ順を以つて集まるのであるが先づ頭腦の俊秀な者は內務省にありと云ふても差支なかろふ。併し人物が居るかどうかは疑問である。次官の一木氏は次官中の白眉と稱せらるゝ丈け人物も鷹揚に出來上つてそれに頭腦は天下一品である、但し好漢惜むらくは將略に乏しいだろふとは十人が十人の觀察であるが余は斷乎として反對する。成程一木

氏は曲を直なりとは判斷することの出來ぬ男かも知れぬが、黨略の前には屈服することが出來ろ、否反對派の邪を發見し論難を加ふるには小松原氏と共に山縣系の强味である。そして一木氏の胸中には皓乎として望宵の隈なく照れるが如く一點私情を其間に挾ぬのである。之を前次官たる吉原氏と比較せば人物の大小に於て比を同じくせず頭腦の俊秀も素より同日の談てない。彼の有名な日比谷騷擾事件の如き桂首相は一木氏を迎へてその是非を推問したと云ふてないか、然るに一木氏は次官となつてから力めて小事に關與せず悠々として餘裕ありと云ふ評がある、彼れは溢るるが如き才氣を發せんとしたことは一度もなく可成包まんとして居る素振がある。床次氏も原内相時代から賣出した人物である、水野氏は淸浦内相時代から秘書官兼參事官神社局長と云ふ長々しい官名を帶び人事大臣として省内を切り卷くつて居る。殊に原内相時代は古賀、水野、高橋三頭政治の下に何の事件でも裁決された者てある。就中水野氏は諸星の系統を暗んじ一方小手が利く所から歷代の大臣に重寶がられつゝありし人であるが、而かも歷代の大臣から豎子の將來恐るべしと囑望されたことはないてあろふ。床次氏は政爭の外に超然として我不關焉の態度を採つて居る、彼の原内相時代の園遊會の折等にも彼は寸毫も邊幅を修せずして隅ッ子に悠然閑然して嘯いて居たと云ふではないか。かるが故に彼れは誰に特に信任せらるると云ふことがない代りて人によりて疎んぜらるることもない。しかし豎子の將來は恐るべしとは原内相も平田内相も均しく思つて居た所であろふ。イヤ大浦農相も後藤逓相も山本伯も彼の未來には多くを期待して居ると云ふことだ。水野氏は人を採用するに當り君は何ヶ國の言語に通ずるかなど〻發問し、床次氏は君は奈何なる覺悟の下に官界に出づるやと推問すると云ふことである。兩者の性格はこれて躍然たりてあろふ、有松氏は私學出身の逸才である彼は圓轉滑脫なる性格を有し事務を見る道樂に耽るが如く熱心なりと稱せられて居る。今の内務省は床次、有松、水野の三頭政治て運用せられて居る

かの觀があるもさうてない。一木氏は別として局長の權力あるものは有松氏と床次氏である、水野氏が太して幅を利かして居たのは兩三年前のことて今てはない、井上氏も頭を擡げかかつて居る。要するに內務省ては人物政治を劃する人が勢力を得て來た、次官の一木氏、局長の床次氏、井上書記官、湯淺氏等其派の人てあるからてある。頭腦派ては一の水野氏が孤城を頑守して居る切りてある。かく二派に別れて軋轢が自然にあるだらうとは門外漢の想像する所てあるが決してそうてない。床次氏も水野氏も井上氏も私交の上ては寸毫の隔てもないとの事だ。又一木氏、床次氏などは學者から反抗を買ふ位の小人物てはないのてある。窪田氏、犬塚氏等の評は大分世間て面白くない樣てあるが、しかし兩氏共頭腦は明晰てある。人物としては論ぜぬ方が氣が利いて居る。地方官中にも人材がないてもない、兵庫の服部知事の如き思想に於て幾多地方官中に卓越し手腕又見るべきものがあるとのことてある、其他深野知事の果斷なる、周布知事の溫厚にして緻密なる、何れも人物政治を劃策するに缺ぐべからざるの人てある。高崎知事、大森知事、河島知事等は頭腦の俊敏なる點に於て捨て難い材だ、又水野門下の唯一の秀才たる松井茂、(韓國警保局長)警察學の巨擘を以て鳴る。樺太の平岡氏、韓國の石塚氏等も共に人物として許し難い人らしい

《各省の人材》

大浦農相は政治を喜ぶ人て、入閣早々地方官長中の麒麟兒たる押川則吉氏を拔擢して次官の地位に据ゑ下岡忠治氏を農務に、上山滿之進氏を山林の倚子に置いて、押川氏の度量の洪海の如くにして計畫の愼密なる、一木氏と並び稱せらるべき人てある。下岡氏の磊落豪放なる、外務の山座氏と儔を同じくす。謹嚴にして犯すべからざる大浦男が、かゝる放膽の高足を拔擢したのは心中一大雄圖を藏する表象てある。又上山氏の頭腦の明斷て法制に通ずる蓋し省中の珍てある。水產の道家氏、礦山の磯部氏等は人物としては未だ稚い。大久保氏は溫厚の長者て安河內氏は幾多事務官中の一鶴

である。大藏省は水町氏去りて若槻氏が之に代つた。若槻氏の議會に於ける答辯振りは遞信の仲小路氏と共に次官中の尤てある。しかし大臣としては未だ遠い。濱口氏市來氏何れも鐵中の錚々てあるが濱口氏の器は若槻以下てあるまい。水町派は頭腦派に傾き若槻、濱口の徒は人物派に歸依して居る。玆に見遁すことが出來ぬのは南滿鐵道の豪傑連てある、中村是公氏を始め淸野長太郎氏、久保田政周氏何れも官僚派の寵兒として一代に持て囃された男達て覇氣横溢せる人物派側の雄將てある、臺灣は後藤男去り中村氏去り祝氏逝きて一の宮尾舜治氏あるのみてある。韓國は人物として批評せらるべき人ツ兒一人なく皆官僚界の落武者のみで都督府の白仁氏は剛健なる思想を有する政治家である

新刊批評

▲妻

田山花袋著
今古堂發行

著者の所謂平面描寫を試みたる長篇にして筆路暢達、書かんと欲する所悉く書き得、寫さんと欲する所亦皆寫し得たる趣あり。娘より妻、妻より母となれる人、青年の空想時代より漸次實生活と觸れて老熟なる考を抱くに至る人、其れ等を取り卷く諸種の性格の女と男、皆實人世を見るが如く寫し出さる。描寫の手際より見て、著者の傑作と推すべく又近時文壇の最も注目すべき作といふに憚らず、只若し強いて慊らざる點をいへば、筆も感じも何となく落附きに乏しく、讀後シットりとしたる味の永く殘らざるやうの心地せらるゝこと也。之れ平面描寫に免るべからざること也と辯ずる人もあらんかなれども、吾人は平面描寫の裏に充分に感じを染み込まし得べきを信ずるも也。著者の前の「母」に比して描寫に於て一段の進歩あり、感じに於て稍々深酷ならざるの心地せらる。兎に角近來の最も價値ある創作といふべし。製本用紙亦よし。（定價一圓五十錢）

▲二家族

正宗白鳥著
新潮社發行

終りの方は少し投げたるやうの氣味ありて、稍々慊らざる氣のせらるれど、其描寫の自然にして且つふつくらとしたる、描かんとしたる背景の味はつて深き意義ある。著者の傑作に數ふべし。狭苦しき田舍を背景

として、粗大なる喜助と細密なる清吉との對照面白く、祖母も亦アッサリ描かれて居ながら活きて居るやうに思はる。然し最もよく出來たるは喜助叔父也。「何處へ」などに比して主觀的の鋭さが減じたるも、客觀的に眞實に物を觀且つ寫すを得るに至れる著者の進境、漫ろに驚嘆に値す。
添ふる所の「故郷より」はなくもがなと思ふ（定價七十五錢）

▲白鳥集
正宗白鳥著
左久良書房發行

收むる所、「明日」「地獄」「強者」「新藥師寺」「閑日月」「誕」「未見の人」「最初の記憶」「離別」「命の綱」「惡縁」の十一篇、二三篇を除きては何れも捨つべからざるの佳作なるが、「明日」は描かんとしたる事象に於て最も優り、「惡縁」は描寫の手際に於て最も傑れたり。「新藥師寺」「閑日月」「最初の記憶」はアッサリしてよく、「強者」「地獄」は鋭し。近時の短篇集中最も傑出したるもの也。（定價九十錢）

▲惡夢
水野葉舟著
白光社發行

「惡夢」を卷頭として廿二篇の小品を收む。「惡夢」は最も著者特徴を發揮せる作にして、やさしき情緒、鋭き官能の働き、最もよくあらはれたり。中には餘り面白からざるもの、著者の獨りよがり的のものも見ゆれど、概して著者獨得の詩境を拓きたるもの多く、何となく新らしき響あるは嬉しき心地す。（定價五十五錢）

▲米國史
若宮卯之助著
實業之日本社發行

米國に關する我邦人の智識の極めて淺薄にして往々冠履顚倒の愚をなしつゝあるを慨し、マクマスター。ゴルトウイン、スミス外數氏の著書に典據して、著者の久しく滯在したる米國の歷史を記述且つ論議したるものにして、最も信憑すべく、且つ愉快に讀まるべき米國史也。文章亦雄健也。（定價一圓七十錢）

▲日本の禍機
朝河貫一著
實業之日本社發行

日本が東洋に覇を稱するに至れるより漸く世界の反感を招きたるを說き、此機運を看取して自ら警むるなくんば日本の禍測るべからざるを說けるもの也。（定價五十錢）

▲幕末勤王烈士手翰抄
佐竹義纖編纂
實業之日本社發行

幕末勤王の烈士が生死の間にあつて父母、妻子、兄弟、友人等に與へたる書翰百通を集めたるものにして慷慨激越の調漫ろに懦夫をして起たしむるの概あり。（定價一圓五十錢）

▲近代文藝の研究
島村瀧太郎著
早稻田大學出版部發行

兎に角新興藝術觀として我國の現代に勝を制して居るものは自然主義である、そして此氣運を醸成するに力ある人々少しとはせぬが、就中堂々の陣、堂々の筆、久しく健鬪して遂には衆說の上に自己のオーソリテーチブの論據を承認せしめ、人々をして仰ぐ所を知らしめたものは島村氏である、今此篇には即ちそれ等の健鬪に用いられた「美學と生の興味」「文藝上の自然主義」「自然主義の價値」「藝術と實生活の間に横はる一線」等の問目ある長論文より始めて大小五十一編を收めてある、早稻田文學、太陽、趣味、中央公論新小說その他の諸雜誌に曾て一度は現れたものの、集めて一冊子として見れば、更に著者の全精神の脈絡が明知されて宜い。卷首の「序に代へて人生觀上の自然主義を論ず」は未だ他に現れぬ一論文であつて著者の所謂文藝上の自然主義との交涉如何も明になり、その藝術觀も更にその方からして、より深く察せられる處がある。兎角に評多き自然主義を新に舌端に上せんとするものは先づ此著を精讀した后にすべきを勸むる。（正價金壹圓八拾錢）

▲黃昏
白柳秀湖著
如山堂書店發行

一部青年の生活を忠實に描いた丈だとは著者も斷つて居る通り單にそ

れ丈のものと之を小說として見て、その人物の配置、描寫の輕重等を論ずれば言ふべき點も多く、餘り贊辭も呈れぬ、文章將た何處ぞと取り出て丶一節抜んでたと見るべき點も無いが、厭味の無い流麗の筆で讀んで佳調たるを失はぬ、卷末に鑛夫日記の一篇が添えられて居る、（定價金八拾ヵ錢）

▲子供の研究　波多市松著　實業之日本社發行

兒童心理學の知識を專門の研究者ならぬ者にも知らせん爲に作つたもの、行文平易にして周密頗るその目的に叶つて居る、（定價金七拾錢）

▲新書翰　薄田泣菫同鶴二共著　弘學館發行

靑年日用文を學ぶものの爲に幾多の文例が示してある、文に苦勞して來た泣菫氏の編んだもの丈に幾多の類書よりは見優りがする、（定價金四拾五錢）

▲モウパッサン短篇傑作集　三宅野花譯　杉本梁江堂發行

モーパッサン者十二篇の譯である、當局者の忌憚を恐れて撰擇には注意したといふが、感心に能く趣味ある者を收め得たのは愛すべしてある。筆は仲々達者である、（定價金五十錢）

▲空中戰爭　高田梨雨著　梁江堂發行

空中飛行船の最近進步は世界の耳目を一處に集めて將來の文明の變化を想像せしめる、就中戰爭は如何なるてあろう、本書は十分科學的事實に據つて脚色したもの一讀の値はある。（定價金四拾錢）

▲現今俳家人名辭書　紫芳吟社編

俳家と名の付く程のものは盡く網羅してあり、俳名、住所、略歷よりその秀句迄も收めてあるから調法だ、（定價金八拾五錢）

▲佐保姫　與謝野晶子著　日吉丸書房發行

短歌の新詠五百餘首を集めたもの、女性のか細き情緒に織り成されたる綾絹、特に創意の淸新なるもののあるのは喜ばしい、機を見て細評しやう、（定價金一圓）

▲二宮尊德　錦陵漁老著　隆文館發行

大坂朝日新聞に載せられた史實小說である。尊德翁大流行の昨今似た樣な書物は續々出るが之を小說に仕組んだのは本書を嚆矢とする、人の情に泌む所の他に優りて多きを疑はぬ、（定價金九拾五錢）

▲いたづら小僧日記　佐々木邦譯　內外出版協會發行

太郎といふ惡戲小僧の日記に擬した作り物語、飜譯ものだが少年机上の好伴侶である、（定價金四拾錢）

▲史劇十二曲　山崎紫紅著　博文館發行

紫紅氏の第二史劇集也。收むる所「歌舞伎物語」「その夜の石田」「前途」「信玄最後」「亂れ笹」「鏃」「明智光秀」「松一本」「戀の淵」「三七信孝」「當流鉢木」「破戒曾我」の十二曲。第一集「七つ桔梗」に比して確かに進步の跡を見るべし。脚本に對する理想よりいへば固よりいふべき事極めて多きも現在の看客及び現在の俳優を眼中に置きて作すれば或は此邊の所が頃合なるやも知れず（定價九十錢）

▲小品文集　薄田泣菫著　博文館發行

些かクラシズムに捉はれたる樣の所ありて天眞の流露に缺けたるを惜むべきも、文章に些のソツなく、詩壇の才人たる氏の面影を窺ふに足る。（定價五拾錢）

▲故郷　石丸梅外著　積久社發行

「京都日の出新聞」に連載せられたるものを一册としたもの也。靑春時代の追憶記ともいふべし（定價五十錢）

▲註解戶籍事件屆出申請書式　山田富太郎編　博文館發行

編者は明法學士にして東京區裁判所戶籍主任の人、充分の信用を置く

に足るべし。(定價三十八錢)

▲最新水彩畫法　四水彩畫家著

水彩畫家として名を知られたる石川欽一郎、丸山晩霞、鵜澤四丁、大下藤次郎四氏が分擔して水彩畫に對する諸種の智識を叮嚀に記述せるもの斯道に志ある人を益すべきは勿論、色彩等の事については一般文壇の參考ともなるべし。(定價並製六十五錢、上製一圓)

▲近代文學譯註叢書(第一編)　草野柴二著　新潮社發行

第一編は露西亞の部にしてゴンチャロフの「コンモン、ストーリー」の拔萃。ツルゲネフの「猶太人」の前半。トルストイの「アンナカレニナ」のアンナの最後。チェホフの「唱歌女」。アンドレエフの「天使」等を收む。英文と譯文と註解とを附しあれば、文學好にして英語を習得せんとする青年には絕好の讀み物也。(定價參拾五錢)

▲小說 壁上　眞山青果著　春陽堂發行

收むる所「枝」「埋立地」「十數頁」「父母の家」「三軒目」「半島の人」「夏日」の七篇。卷頭の三篇は本誌に出でたるものなれば其價値は讀者の知る所なるべし。諸作の最も苦心したるは「枝」なるべく、又部分には「枝」に最もよき所あれども、全體として「埋立地」と「三軒目」が傑れたりと思ふ。卷頭の序文、著者の過去及び將來に對して眞摯なる感慨を寫せもの、著者にしてかゝる感慨を抱くに至れる、漫ろに同情に堪へざるも、若し努力一番して眞に新たなる路を拓かんと欲すれば、時未だ遲しとせざるべし。吾人は著者が再び力ある信念を得て、之をあの力ある筆にて寫されんことを切望す(定價六十五錢)

▲淸澤先生の信仰　曉烏敏著　無我山房發行

淸澤滿之師の「我信念」に含まれたる信仰を說述せんが爲めになしたる講演筆記を訂正したるもの也。淸澤師は精神主義を唱導して一部思想界の歡迎を受けつゝある人、此書其人物及び信念を說き盡して餘蘊なし。(定價八十錢)

▲女學生生理　宵柳有美著　丸山舍發行

有美氏の女子研究はその生理狀態に迄深く入つて居る本書は氏が眞面目に女子學院にて爲したる生理學の講義筆記より成るもので、人の妻と爲るべき女子の必讀書である、卷末「女子の覺悟」の一章氏一流の筆に衣着せぬ露骨なる言振の中に一大規箴が籠つて居る、表紙に特筆して「本書は神聖にして犯す可からず」といつて居るが予輩は之を信ずる者である、附錄に月經誌とは之も奇拔な思付であろう(定價五十錢)

▲緣の絲(前篇)　伊原青々園著　讀報社發行

新講話と題してあるから、批評の標準も其處に定めねばなるまい、脚色の自然不自然の沙汰は大低な處でお預りとして見ると、其の局面の變化の多樣なる處に、多數の讀者を迎へる興趣がある、此點を先づ稱すべきであろう。(定價四十錢)

▲熱誠　細越夏村著　中央堂發行

文章は稍妙な型に入つてエキスプレッションが硬りクドい處に又不熟な文字もある、著者昨今文體に於て迷つて居るのでないかと邪推する、がその思想の健全なと狙つた點に於て家庭小說として推稱すべき價値が有る樣に思ふ。(金五十五錢)

▲通俗佛典物語(第一編)　大屋德城著　內外出版協會發行

佛典中の物語の平易なる邦譯、童蒙にも佛教思想を窺はしむる爲には此種の著述の續出を望む(定價金三十錢)

▲トルストイの敎訓　國本秋村著　內外出版協會發行

初に杜翁の自敍傳、それから諸種の敎訓を敍述したもの、一わたり杜翁の人物と思想とを知るには便利である(定價金四拾錢)

○壹册定價 金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（外國郵税八錢）

册數＼區別	內國	外國
六册	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二册	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵税共		

▼但し特價號は規定以外別に代金を申受くべし▲

送金注意

一 郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盗取せらるゝの虞なし
一 弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一 郵券代用は必ず壹割增の事
一 前金切の節は帶封に朱印いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一 領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十二年七月廿六日印刷
明治四十二年八月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九） 反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可

享和元年創業

日本ニ於ケル時計商之元祖

宮内省御用達

D.K.

東京市京橋區八官町九番地

小林時計店

電話新橋一〇〇三
電信略語コ(ヌ)コハ
振替口座七八〇七

卸小賣

營業品概目

時計附屬品、指環、簪、帯留、ブローチ、手釦、紀念品一式

最新の流行品目錄郵劵六錢封入御申越次第進呈す

紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

